



TITLE:

京都大学アカデミックデイ2015: みんなで対話する京都大学の日

AUTHOR(S):

白井, 哲哉; 仲野, 安紗; 森下, 明子; 福元, 隆; 樺島, 彩波; 永田, 奈緒美; 大森, 貴生

CITATION:

白井, 哲哉 ...[et al]. 京都大学アカデミックデイ2015: みんなで対話する
京都大学の日. 京都大学アカデミックデイ2015: 報告書 2015: 1-132

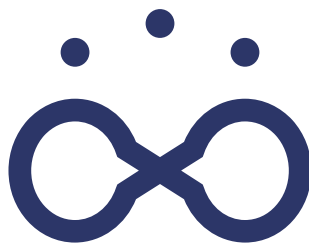
ISSUE DATE:

2015-12

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/227914>

RIGHT:



Dialog with the Public

京都大学アカデミックデイ 2015

みんなで対話する京都大学の日

報告書

2015 年 10 月 4 日（日） 10:00 – 16:00 | 京都大学百周年時計台記念館

京都大学アカデミックデイ 2015
「みんなで対話する京都大学の日」

開催日時 2015 年 10 月 4 日（日）10 時 00 分から 16 時 00 分
会場 京都大学百周年時計台記念館

目次	1. 概要
	1-1. イベント概要
	1-2. 山極総長からのメッセージ
	1-3. 会場配置図
	2. プログラム
	2-1. 研究者と立ち話（ポスター／展示）
	2-2. ちゃぶ台囲んで膝詰め対話（サイエンスカフェ）
	2-3. お茶を片手に座談会（トークライブ）
	2-4. 研究者の本棚（特別図書室）
	2-5. 対話マラソンのための給水ポイント（ドリンクコーナー）
	3. アンケート
	3-1. 来場者アンケート
	3-2. 出展者アンケート
	3-3. 京都大学アカデミックデイ賞
	4. 出展者情報
	4-1. 研究者と立ち話（ポスター／展示）
	4-2. ちゃぶ台囲んで膝詰め対話（サイエンスカフェ）
	4-3. 出展参加者一覧
	5. その他
	5-1. 出展研究者向け事前説明会
	5-2. イベント終了後の学内限定タイム（出展者交流）
	5-3. 広報物
	5-4. 報道・開催報告等
	6. 支援体制・準備スケジュール
	6-1. 支援体制
	6-2. スタッフリスト
	6-3. 準備スケジュール
	6-4. デザイン・制作物スケジュール
	7. 推薦図書リスト

1. 概要

1-1. イベント概要

京都大学は、2015 年 10 月 4 日に京都大学百周年時計台記念館にて「京都大学アカデミックデイ 2015 みんなで対話する京都大学の日」を開催しました。「京都大学アカデミックデイ」は、市民や研究者、文系、理系を問わず、誰もが学問の楽しさ・魅力に気付くことができる「対話」の場となることを目指しています。本学の研究者が来場者と直接対話することで、本学の研究活動をわかりやすく説明すると共に、国民の声を本学における研究活動に反映させることを目的の一つとしています。今年度は 66 組の研究プロジェクト、231 名の研究者（大学院生含む）が参加するとともに、近隣の高校からも 3 組の出展が行われました。当日は晴天に恵まれ、1 日で延べ 460 人の来場者が訪れました。

「京都大学アカデミックデイ」では、「対話」のスタイルに合わせて 4 つのプログラムを用意しました。研究者とじっくり対話をする「ちゃぶ台囲んで膝詰め対話（サイエンスカフェ）」や、様々な分野の研究者に触れることのできる「研究者と立ち話（ポスター／展示）」、一つのテーマに沿って皆で話し合う「お茶を片手に座談会（トークライブ）」、そして、参加研究者がお勧めする本を紹介する「研究者の本棚（特設図書室）」です。それぞれのスタイルで、研究者と来場者が対話を楽しんでいました。また、「対話マラソンのための給水ポイント」では、対話のお供として、コーヒーやお茶を用意しました。

「京都大学アカデミックデイ」は、京都大学による「国民との科学・技術対話」事業の一環として実施しました。ここでは、対話を促進させる仕掛け作りにも積極的に取り組みました。企画のデザインや運営は学術研究支援室（URA 室）及び研究推進部研究推進課、「国民との科学・技術対話」ワーキンググループが共同で行い、来場者の方へのアンケート調査も実施しました。どのような来場者が訪れたのかを把握するとともに、各出展ブースに対するコメントを受け、それを各研究者にフィードバックをすることで、今後の対話活動をよりよいものにすることを目指しています。



会場（百周年時計台記念館）

1-2. 山極総長からのメッセージ

京都大学アカデミックデイにご来場のみなさまへ

京都大学は創立以来、対話を根幹とした自由の学風のもと創造の精神を涵養し、高等教育と先端的学術研究を推進してまいりました。情報技術が目覚しく発展し、世界の情勢が急激に激動するなか、京都大学は地球社会の調和ある共存を目標にして多元的な課題の解決に果敢に挑戦しております。そのために私は、京都大学を世界や社会へ通じるための「窓」として位置づけ、新しい時代の要請に応えていこうと思います。窓、すなわち WINDOW にちなんで、次のような方針を掲げています。Wild and Wise（野生的で賢い学生を育てる）、International and Innovative（国際的で革新的な能力を重視する）、Natural and Noble（自然に学び、高潔な人格を育てる）、Diverse and Dynamic（多様で変化に満ちた世界を理解する）、Original and Optimistic（独創性を明るいきもちとともに育てる）、Women and Wish（女性が輝く、希望に満ちた環境を作る）、という計画です。そして、京都大学の学術研究の成果を市民に還元するとともに、市民の理解と支持を得て、共に学術研究を推進していこうと考えています。



京都大学アカデミックデイは、みなさまと京都大学の研究者とが直接対話をする場として企画をしたものです。学術研究の成果だけでなく、研究が営まれているさまや、同じ1人の人間としての研究者を知っていただく機会になればと思っています。そしてこの機会に是非、研究者に疑問を投げかけてください。みなさまとの対話は、研究者にとって自らの研究の社会の中の位置づけや課題を捉え直す機会となります。そして、成果還元の可能性や新たな活躍の場が広がって行きます。

この対話の場である京都大学アカデミックデイが、みなさまと共に我が国の学術研究を育む場になることを期待しています。

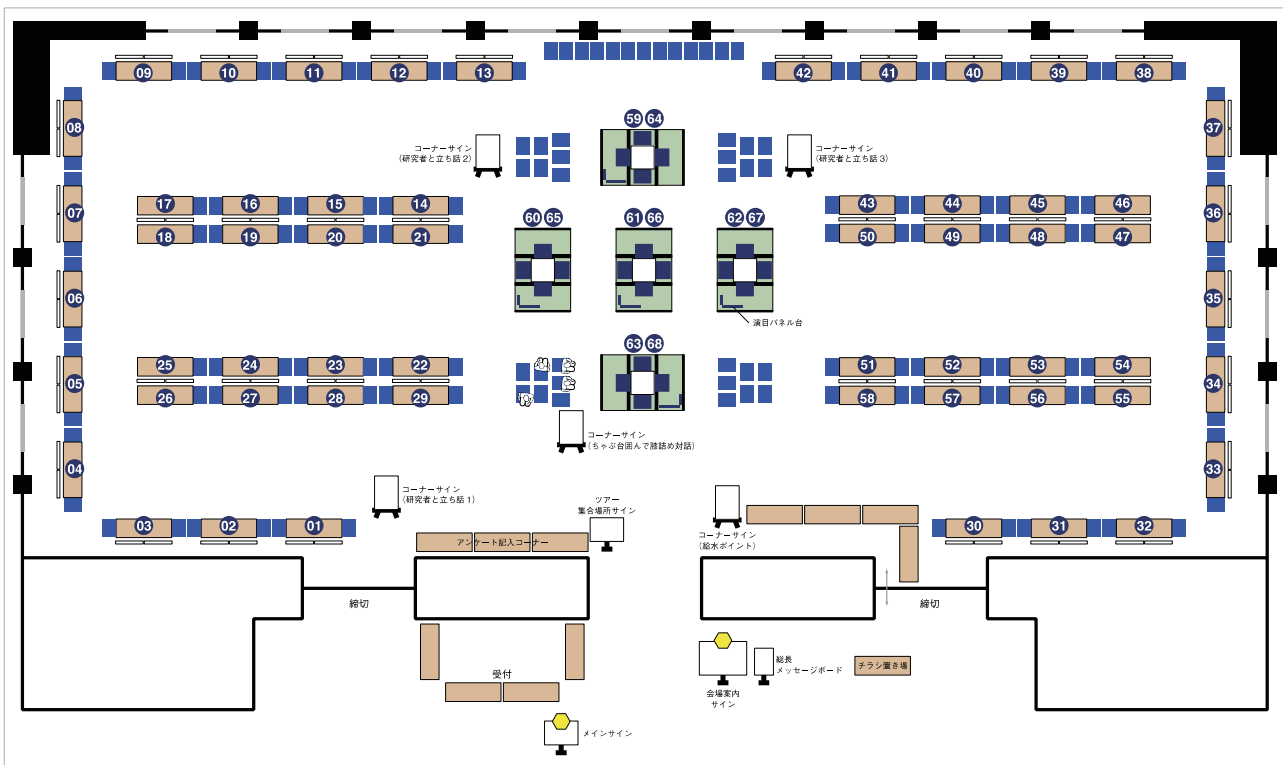
京都大学総長 山極壽一

1-3. 会場配置図

1-3-1. 「京都大学アカデミックデイ」配置図

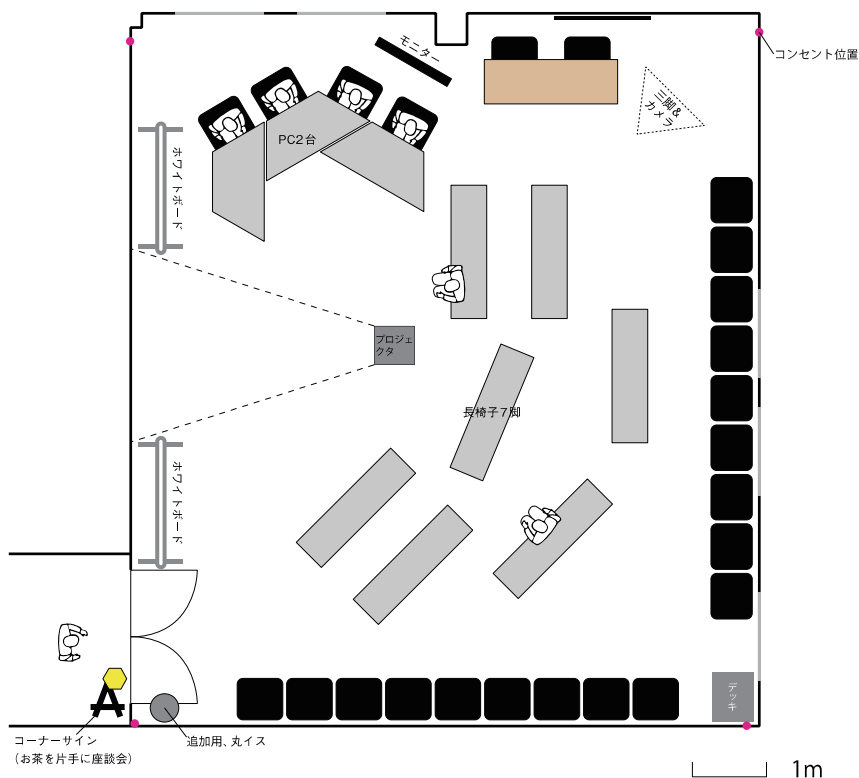


-

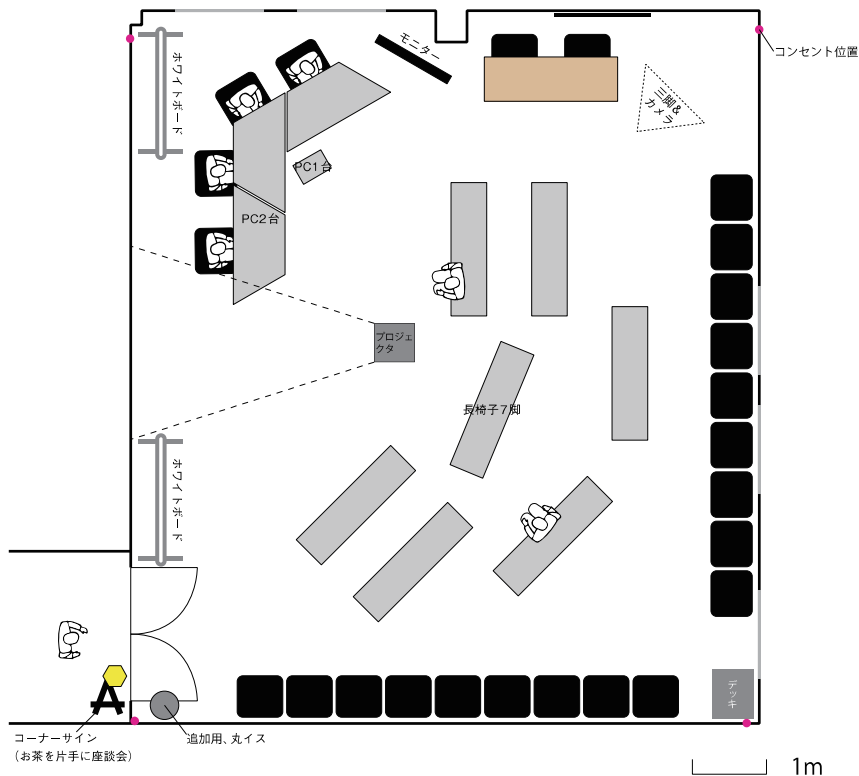


● 会議室Ⅳ：お茶を片手に座談会（トークライブ）

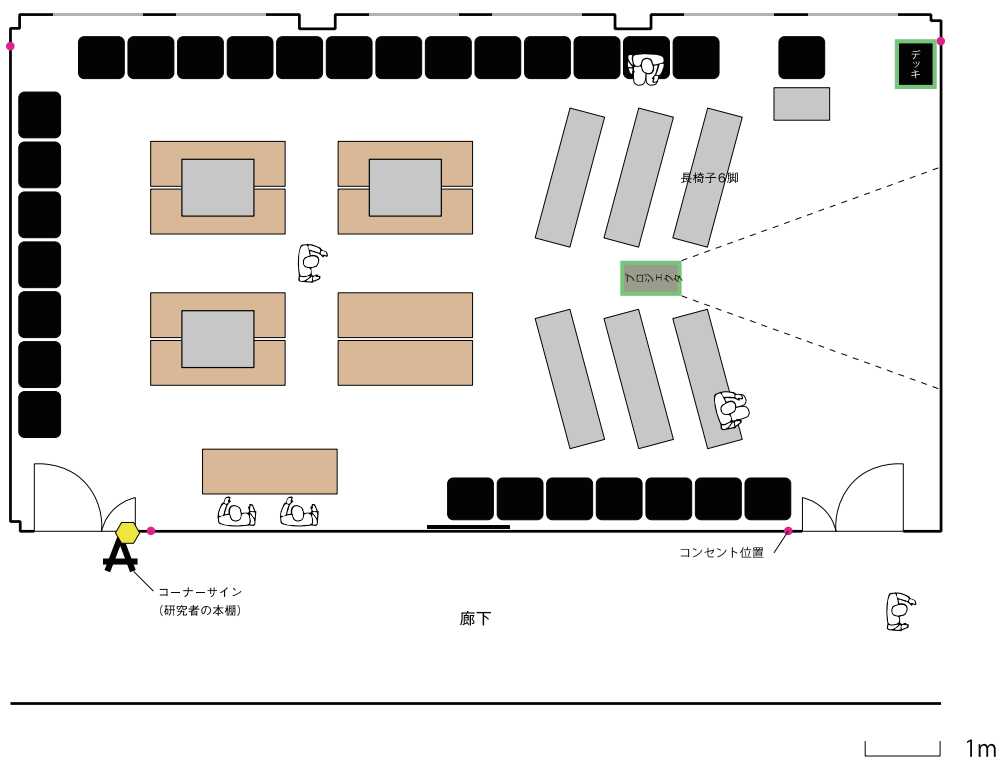
第一部「100 万円あったら、どの研究に投資する？体験！クラウドファンディング」



第二部「研究の話って、いまでも昔も身近な場所でもされているんじゃないの？」



● 会議室Ⅲ：研究者の本棚（特別図書室）



2. プログラム

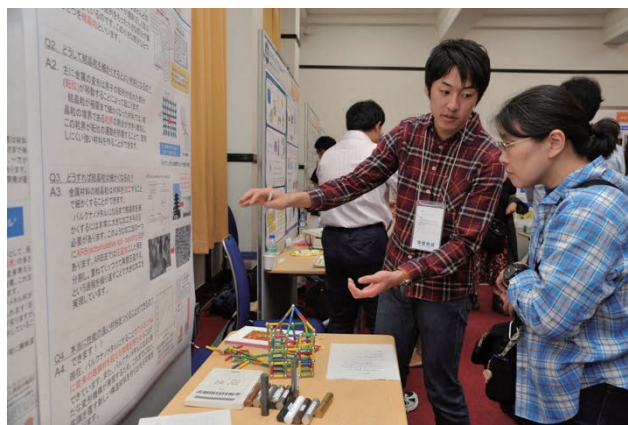
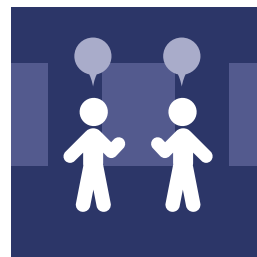
2-1. 研究者と立ち話（ポスター／展示）

2-1-1. 概要

日時 10月4日（日曜日）10時00分～16時00分

会場 京都大学百周年時計台記念館 2階 国際交流ホール

大学研究者、高校生などによる研究紹介のコーナー。会場には58のポスター展示がずらりと並び、ポスターの前ではその研究を行っている研究者が来場者と直接語り合いました。また、ポスターの前に模型やサンプル、資料等を並べ、それらを使って研究の紹介をする研究者の姿も多く見られました。さまざまな立場で研究をしている人が一同に集っていたため、研究者同士の交流も深まり、互いに刺激をしよう場になっていました。

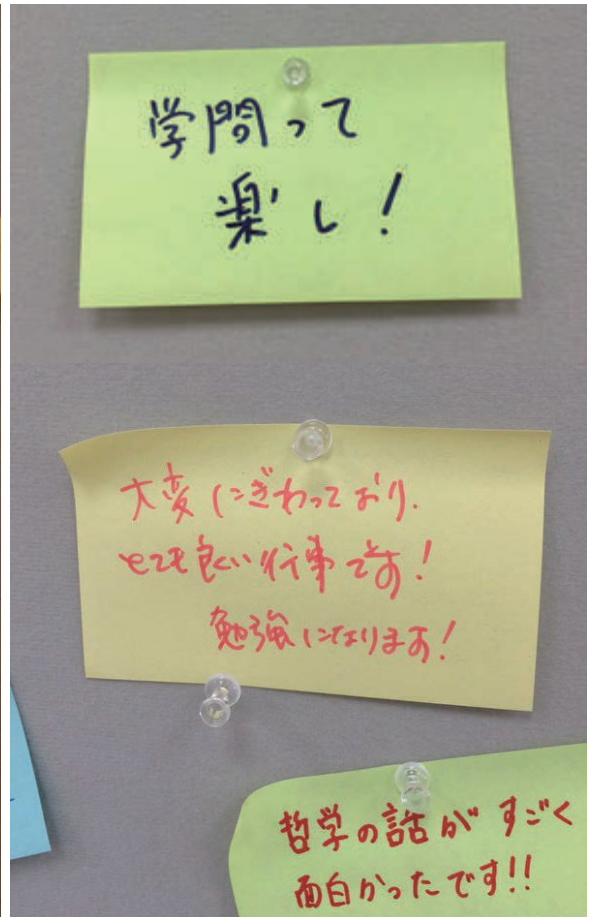
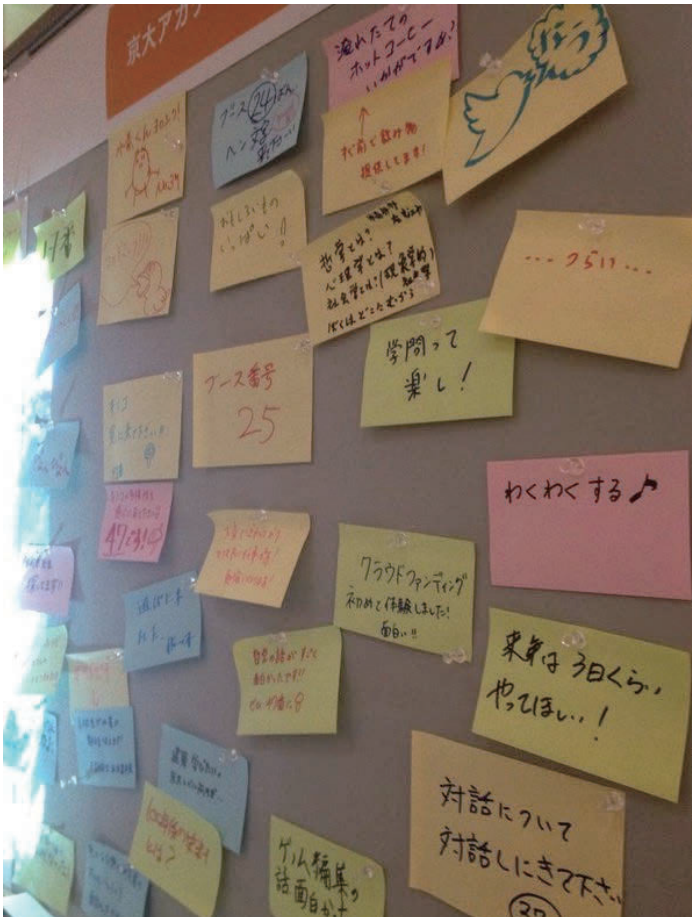
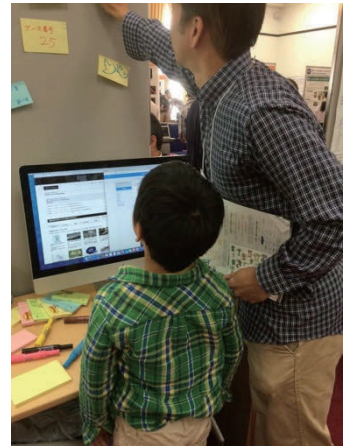
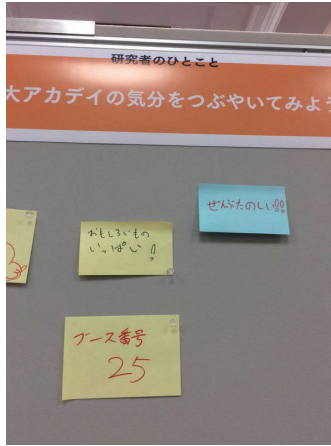
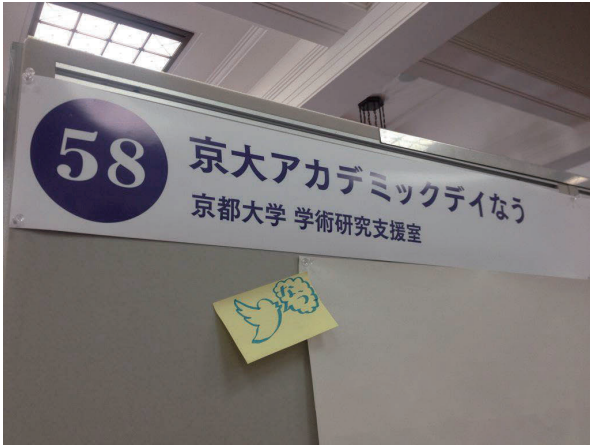


〈来場者の声〉

- もっと専門的でわかりにくいのかしら？と思っていたのですが、一般の人にもわかりやすく説明していただく工夫をしてもらっていました。(10代)
- いろいろな分野で難しい研究をされているのだと、この研究が人類に役立つのだと思えた。エールを送ります。(60代)
- テレビの科学番組を見るだけとは違って、なぜ？の疑問に答えてもらえる(60代)
- ドリンクや企画など配慮がゆきとどいていてよかったと思います。フロアも活気があったように思いました。(20代)
- 異分野の方々や高校で研究している生徒とも話すことができて楽しかった。(40代)
- 研究に携わっている方の熱い気持ちを感じることができ、日本の未来は明るいかも・・・(捨てたものではないのでは)と感じられた(40代)

■ 2-1-2. つぶやきブース

アカデミックデイ 2015 では、「研究者と立ち話」の会場に「つぶやきブース」を特設し、会場の様子などを写真付きでツイートしたほか、来場者に感想などのコメントをポストイットに書いてもらい、それを写真撮影してツイートしました。また、来場者が記入したポストイットはつぶやきブースに張り出しました。ブースのポストイット掲示版は、出展者がご自身の出展ブースを宣伝する際にも利用されていました。



■ 2-1-3. 「研究者と立ち話」ガイドツアー

「研究者と立ち話」では、学生サポーターによるガイドツアーを企画しました。2012 年までの京都大学アカデミックデイのアンケートに「なんとなく話しかけづらい」「数が多すぎてどの話を聞けばよいのか迷ってしまう」と言った来場者からの声がありました。そこで、2013 年より、京都大学の学生がツアーガイド役となり、来場者と一緒に「研究者と立ち話」を回る企画を用意しました。

協力：有限会社関西教育考学



〈来場者の声〉

- ガイドツアー企画は気軽にブースに迎えてよい企画でした。(50 代)
- 理系の展示物が多くて面白かった。ツアーがすごく楽しかった。(10 代)

〈出展者の声〉

- 運営側がツアーを組んで、一般参加者を連れて回ったところがよかった。(助教)

■ 2-1-4. 「研究者と立ち話」出展一覧

● 京都大学

出展代表者氏名（所属）	出展タイトル
潘晟（京都大学大学院理学研究科）	「ニュートリノで解く宇宙の謎」
長谷部伸治（京都大学大学院工学研究科）	「机にのる化学プラント」
掛谷一弘（京都大学大学院工学研究科）	「高温超伝導テラヘルツ光源の開発」
北川進（京都大学物質－細胞統合システム拠点）	「ナノ空間の世界と化学」
杉山弘（京都大学物質－細胞統合システム拠点）	「人工遺伝子スイッチを創る」
滝田禎亮（京都大学大学院農学研究科）	「酵素反応はどこまで正確か？」
乾晴行（京都大学大学院工学研究科）	「炎を制する－超耐熱構造材料」
野村理朗（京都大学大学院教育学研究科）	「紛争の解決にむけた心理学のアプローチ」
笠木雅史（京都大学大学院文学研究科）	「意図が先か、行為が先か」
越智萌（京都大学大学院法学研究科）	「目を背けたい世界の大規模犯罪のその後」
杉山和彦（京都大学大学院工学研究科）	「基礎物理学を目指す単一イオン光時計」
入江一浩（京都大学大学院農学研究科）	「アミロイドβの毒性構造特異抗体の開発」
中川尚史（京都大学大学院理学研究科）	「映像が捉えた野生霊長類の変わった生態」
高田明（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科）	「教えること、学ぶこと：人類学の挑戦」
松田道行（京都大学大学院医学研究科）	「顕微鏡と数学で生命の謎に挑む」
田村類（京都大学大学院人間・環境学研究科）	「磁石に応答して動く有機液晶物質の発見」
西嶋一欽（京都大学防災研究所）	「ノンエンジニア防災って何？」
今中雄一（京都大学大学院医学研究科）	「医療の質の地域格差を考えよう」
田尾龍太郎（京都大学大学院農学研究科）	「果樹のライフサイクル研究の最前線」
児玉聡（京都大学大学院文学研究科）	「ゲノム編集の倫理について考える」
佐藤文彦（京都大学大学院生命科学研究科）	「ゲノムの中から薬づくりの道具を探す」
大谷雅之（京都大学大学院情報学研究科）	「『言語グリッド』で国際協力！」
大野美紀子（京都大学東南アジア研究所）	「多言語 DB で日本と ASEAN を結ぶ」
藪塚武史（京都大学大学院エネルギー科学研究科）	「骨は水から作られる～生物の営みに学ぶ」
趙亮（京都大学大学院総合生存学館）	「ネットワークで見る独裁と民主の差」
茶園敏美（京都大学アジア研究教育ユニット）	「占領期二都物語京都・神戸の平和と人権」
キムカブジン（京都大学化学研究所）	「小さな磁石を用いたメモリーデバイス」
谷誠（京都大学大学院農学研究科）	「水と環境をまもる森の働き」
前田有輝（京都大学工学部物理工学科／京大生協学生員会）	「京大での学びをより充実させるために！」
重田眞義（京都大学アフリカ地域研究資料センター）	「アフリカと共に生きる」

田中功（京都大学大学院工学研究科）	「材料のナノ構造研究のフロンティア」
田中庸裕（京都大学 実験と理論計算科学のインタープレイ による触媒・電池の元素戦略研究拠点） 田中功（京都大学構造材料元素戦略研究拠点）	「元素戦略プロジェクト」
河原全作（京都大学大学院工学研究科）	「バブルテクノロジーによる淡水化革新」
増田亮（京都大学原子炉実験所）	「放射線と原子核は使おう」
辻伸泰（京都大学大学院工学研究科）	「バルクナノメタル：常識を覆す構造材料」
水町衣里（京都大学物質－細胞統合システム拠点）	「いい対話ってどんな対話？」
江谷典子（京都大学大学院医学研究科）	「ICT が守るビッグデータ応用の創薬」
金賢得（京都大学大学院理学研究科）	「水素分子のミクロなおしくらまんじゅう」
市川能也（京都大学化学研究所）	「新材料を創る」
明里宏文（京都大学霊長類研究所）	「人類はエイズを克服できるか？」
直井里予（京都大学東南アジア研究所）	「映像で東南アジアの魅力を発見しよう！」
平松明日香（京都大学大学院文学研究科）	「三国時代前夜：後漢王朝崩壊に至る過程」
林愛明（京都大学大学院理学研究科）	「内陸巨大古地震による長江文明の滅亡」
竹脇出（京都大学大学院工学研究科）	「建物の地震時レジリエンス向上にむけて」
秋吉一成（京都大学大学院工学研究科 ERATO 秋吉バイオナノトランスポートプロジェクト）	「バイオナノトランスポーター」
原良憲（京都大学大学院経営管理研究部）	「経験・信頼価値の脳科学的アプローチ」
田中貴浩（京都大学大学院理学研究科）	「重力波がひらく新しい物理 2015」
太田至（京都大学アフリカ地域研究資料センター）	「アフリカの潜在力とは何だろうか？」
宮野公樹（京都大学学際融合教育研究推進センター）	「産学連携の原形」
北村直彰（京都大学大学院文学研究科）	「哲学的説明－現代形而上学の観点から」
上村紀仁（京都大学大学院医学研究科）	「パーキンソン病をモデルする」
村井俊介（京都大学大学院工学研究科）	「ひと桁小さなモノづくり」
延原章平（京都大学大学院情報学研究科）	「お魚モーションキャプチャ」
飯田敦夫（京都大学再生医科学研究所）	「赤ちゃんを産む！魅惑の胎生魚ワールド」
京都大学学術研究支援室	「京大アカデミックデイなう」

● 高等学校・高等専門学校

学校名	出展タイトル
京都府立木津高等学校 科学部	「クマムシの肢は歩くためのものか？」
兵庫県立御影高等学校 環境科学部生物班	「毒キノコはお暑いのが好き！？」
京都府立海洋高等学校	「イワガキの赤ちゃん捕まえる大作戦！！」

「研究者と立ち話」レポート1

1日の間ツアーガイドを担当しました。まず何より、どの展示も非常に興味深く、スタッフとしてという以前に1参加者として知的好奇心をくすぐられてばかりでとても楽しかったです。

ツアーを始める前に来たきっかけなどから興味のある分野を聞いて案内を始めましたが、興味分野がはっきりとしていて目的を持ってきている方が多かったです。また、僕自身が大学で行っている研究にも興味を持っていただけて、ポスターの順番を待っている時間などを使って自分の研究を話す機会も多く、一般の人に自分の研究をわかりやすく伝えるためのいい練習の機会になりました。

案内した方の内訳としてはカラスマ大学の方々、家族連れの方、高校生、海外からきている方などで、様々な来場者の方を案内させていただきました。色々な背景の来場者がいる中でのことでしたが、研究者の方もそれぞれの理解度を最初に確認し、それに応じた話し方をされていたので理解できずに困るということとはほとんどなかったように思います。その中でも模型や研究に使う道具が置いてある展示や、身近なものと結び付けながらお話をされているものについては参加者も親しみやすそうで、ガイドの方から質問をしなくてもたくさんの質問が出ていました。また研究の目的や将来の展望がはっきりしていると来場者は理解しやすいように見えました。

展示の中でも特に面白いと思ったのは、倫理問題について参加者がどう考えているかマグネットを置くことで表現してもらうというもので、来場者の意見を言うてもらいやすくするツールとして非常に優れたものだと思います。

来場者に研究を理解していただくだけでも大きな価値があると思いますが、こういったツールを増やせば、来場者から研究者へ直接考えを伝えるような機会が増えてさらに実りのある対話になるのではないかと思います。

(春木慶洸)

「研究者と立ち話」レポート2

大学研究者、高校生によるポスターセッション「研究者と立ち話」に、ガイドツアーのガイド役として参加しました。「研究者と立ち話」は京大アカデミックデイの中心的な企画のひとつで、大勢の来場者の方々が興味のあるポスターや目を引くポスターの前で足を止め、さまざまな分野の研究に触れていました。一方、自分の関心のある内容のポスターがどこにあるのかわからないという方や、いきなり研究者の方に話しかけたり質問することに抵抗があるという方のために、わたしたち京大の在学生在が随時ガイドツアーを行いました。

わたしは計3組の方のガイドツアーを担当しました。最初は京都カラスマ大学の学生の方のグループでした。それぞれみたいポスターがほぼ決まっていたので、それらのポスターを順繰りに回りました。みなさん初対面でまた年齢も背景も興味の矛先もばらばらでしたが、学習意欲の強い方ばかりだったためどの分野のポスターも非常に熱心に聞かれていました。特に印象的だったのは、ご自身の興味の対象から外れている研究でも、その研究をするようになったきっかけや、どのように研究を進めているか、なにを目指して研究をしているかなどといった研究の背景にはみなさん強い関心を示され、またそういった話を楽しげに聞いてらっしゃったことです。このような風景は、実際の研究者の方と顔を合わせてお話しできるアカデミックデイならではのものと感じました。

次のガイドツアーではご高齢のご婦人おひとりをご案内しました。この方は薬剤師を長年されていて化学や薬学に関するポスターに興味をお持ちであるということだったため、そういった内容のポスターをご案内しました。この際、専門的な言葉が多く含まれると思われる発表ではこちらから多少の質問や確認をさむこともありましたが、基本的にはご婦人のペースにあわせて回るように心がけました。ご婦人はもともとのご専門と近いためかとても理解が早く、またしばしば研究者の方を驚かすような鋭い質問までされていたからです。研究者の方々もご婦人が専門的な知識を持っているとわかれると少し安心した表情で話し方を難しめ

にかえてお話しされていたようでした。幅広い背景知識の方に満足していただけるのもこのポスター企画の醍醐味であると感じました。

最後のガイドツアーでは文系の高校生二人組を案内しました。国際系のポスターに興味があるけれど主要な国際系のポスターはもう見終わったとのことだったので、彼女たちが見逃していた学際的な分野のポスターを案内しました。聞き始める前にはとりわけ興味をひかれる様子でもありませんでしたが、後半は研究者の方に積極的に質問や疑問を投げかけ、他の分野への応用について論じるなど、生き生きとした様子でそれらのポスターを楽しんでいました。自分では思いがけなかったような研究のおもしろさと出会えるのも、こうして様々な分野の研究が一堂に会するこの「研究者と立ち話」という企画の面白さであると思いました。

ガイドツアーに参加された方もご自分のペースで見て回られていた方も、来場者の方々がみなさん満足げに帰っていかれる様子が印象的でした。ガイド役として、この「研究者と立ち話」で起こるたくさんの出会いをお手伝いできてうれしく思います。

(松谷優樹)

「研究者と立ち話」レポート3

全体を通して、来場者は自ら研究者の話を聞きに行ける人が大半で、需要があまりなかったのか待機時間は長かったです。ただ、入り口の集合場所で待機していると、「どう回ればいいのかわからない」と案内をお願いしてくる方が1時間に一人くらいいたので、ツアーはそのような人の助けになったと思います。

私の場合、ツアーのきっかけは来場者から頼まれたのが3組・私自身で声をかけたのが1組でした。私にガイドをお願いしてきた方々は、一緒に回ったほうが楽しいから、といった理由で声をかけたと言っていました。どの組もご自身で積極的に質問しており、特に私の方で気をつけて話をふる、といったことはありませんでした。そこで、一緒に学ぼうという気持ちで楽しく話を聞き、疑問を感じたら時を見て積極的に質問もしていました。最後に感想を聞くと、「自分一人では思いつかない質問をしてくれるから、そういう視点もあるんだという気付きがあって面白かった」と話してくれました。一緒に話を聞き質問をすることがプラスの効果をもたらしていることが感じられて嬉しく思いました。一方、私自身で声をかけたのは高校生の二人組で、少し迷っているようだったのでツアーを提案しました。こうして頼まれずにツアーを提案することが良かったのか否かはわかりません。ただ、私を挟んで発表者の方々と楽しく会話することができたので、二人だけで回る時とは違った楽しさを感じてもらえていればいいなと思います。

集合場所の待機中、このツアーはどういうものなのかを問う質問をよくかけられました。いくつかこちらがピックアップして、一緒に話を聞くものと答えると、それなら自分で回れると立ち去られることが何度かありました。(笑) せっかくなので、ツアーをすることでいつもと違った楽しみ方ができるんだ、とアピールしようかとも考えましたが、本来の目的とは少し変わってしまうので今回は積極的にアピールはしませんでした。来場者ご自身で回って話を聞ける人が増え、ツアーの利用者が減ることはいいことだろうと思いますが、こちらは一緒に回る機会が減るので少しさみしく感じました。

(秋柴美沙穂)

2-2. ちゃぶ台囲んで膝詰め対話（サイエンスカフェ）

2-2-1. 概要

日時 10月4日（日曜日）10時30分～12時00分／13時30分～15時00分
会場 京都大学百周年時計台記念館 2階 国際交流ホール

「ちゃぶ台囲んで膝詰め対話（サイエンスカフェ）」では、研究にまつわるあんな話、こんな話を、来場者と大学の研究者がお茶の間気分で話し合うコーナーです。会場には5つのちゃぶ台ブースが設置され、10時30分から12時の間に5つ、13時30分から15時の間に5つ、計10の研究グループが出展しました。各研究グループは、どんな研究を行っているのか、なぜその研究をすることになったのか、などを来場者と語り合いました。3帖の畳から成るブースでは、ちゃぶ台を囲んだり、畳の縁に腰をかけたりと、思い思いのスタイルで研究者と対話をする来場者の姿が見られました。



〈来場者の声〉

- ちゃぶ台はゆっくり話を聞けて良かった。(50代)
- ちゃぶ台はリラックスして聞けてよかった。(30代)
- 色々な研究の話が聞けておもしろかったです。ちゃぶ台がすごくよかったです (30代)

〈出展者の声〉

- ちゃぶ台で、つい夢中でしゃべり続けそうなのを冷静に交代のタイミングを作ってくださった。(助教)
- ちゃぶ台対話企画は受賞のチャンスがなさそうなのが残念。(研究員)
- ちゃぶ台に関しては、できれば掘りごたつにしていただけると、ちゃぶ台に集まる方の人数（一度に集まる方の人数）を多くできるように思いました。(教授)

■ 2-2-2. 「ちゃぶ台囲んで膝詰め対話」出展一覧

日時	出展代表者氏名（所属 職名）	出展タイトル
10月4日（日） 10時30分～ 12時00分	七田芳則（京都大学大学院理学研究科）	「脳で感じる光」
	川村悠人（京都大学大学院文学研究科）	「古典サンスクリット詩の樹海一美の探訪」
	呉羽真（京都大学宇宙総合学研究ユニット）	「ひとは宇宙へ飛び立つべきか？」
	楠見孝（京都大学大学院教育学研究科）	「なつかしさの心理学：思い出ときづな」
	諸熊奎治（京都大学福井謙一記念研究センター）	「コンピュータで化学反応の世界を探る」
10月4日（日） 13時30分～ 15時00分	鈴木実（京都大学原子炉実験所）	「がん細胞を狙い撃つ BNCT」
	Stig Lindberg（京都大学大学院文学研究科）	「キリスト者賀川豊彦と京都」
	水原啓暁（京都大学大学院情報学研究科）	「リズムでつながる脳」
	加納靖之（京都大学防災研究所）	「歴史にまなぶ大地震」
	梁雪峰（京都大学大学院情報学研究科）	「ロボットがどうやってものを見分けるの」

「ちゃぶ台囲んで膝詰め対話」レポート1

午前中の、ちゃぶ台企画のサポートが私の担当でした。ちゃぶ台での企画は、本来 10:30 スタートの予定でしたが、研究者の方々の準備が早々に完了したため、準備が済んだちゃぶ台から順に、どんどんお客さんを呼び込んでいきました。はじめのうちは、人のいるちゃぶ台へと人が集まる傾向にあり、誰もいないちゃぶ台と人の多いちゃぶ台とに二極化していきました。これは少し予想外で、できてしまった人の輪に入るのは難しくても、誰とも話していない研究者のもとへ行くことは比較的楽だと思っていました。そこで、誰もいないちゃぶ台へとお客さんを誘導し、座ってもらうことで、だんだんと全てのちゃぶ台に人が集まってくようになりました。

開始から 30 分も立つと、お客さんの数が安定してきて、また、入れ替わりもスムーズで人が途切れなかったため、私のサポートは、立って話を聞いている方に座っていただくよう促すくらいに留めておきました。どの研究者の方も、ひとりの人とだけ話している状態はあまりなく、また、お客さんに質問を投げかけて対話を盛り上げようとしていました。

各ちゃぶ台では、対話の方法にそれぞれの研究者のカラーがよく出ていたと思います。白紙にリアルタイムで描き込みながら説明していた川村悠人先生。モニタの画面に写しだしたスライドでお客さんを引き付けていた諸熊奎治先生。議題を出し、ポストイットに意見を書き込んでもらい、それをもとにディスカッションを進めていた呉羽真先生率いる宇宙総合学研究ユニット。ちゃぶ台に、研究対象である「なつかしさ」を想起させるアイテムを広げ、実際に感じてもらおうとしていた楠見孝先生。実験に使用しているメダカを並べ、実演して見せていた七田芳則先生。それぞれが思い思いの方法で対話を試みており、私個人としても、今後行っていきたい対話についてのよき参考となりました。

また、場を観察していて思ったことが一つあります。それは、整然とした並びでちゃぶ台を囲んでいるところには人が少なく、またそれ以上呼び寄せにくい一方で、乱雑に囲んでいるところには人が多く集まる傾

向にあるということです。具体的には、ちゃぶ台の四方に研究者を含めてそれぞれ人が座っている場合は、研究者1人＋お客さん3人で話している状態が続いており、それ以上ひとが入りづらいようでしたが、一方で研究者が自ら座敷の端に腰かけていて、座布団の位置も乱雑な場合は、お客さんもちゃぶ台周りだけでなく、座敷の端や空いているスペースに座りだし、結果多くの人を呼び寄せていました。そのため、ちゃぶ台周りに人々がきれいに整列してしまっている場合、ぜひ端に腰かけて話していただきます、と促すようにして、少し場を乱してやるのが実はよいサポートであるのだと感じました。

(吉田裕介)

「ちゃぶ台囲んで膝詰め対話」レポート2

午後のちゃぶ台企画のサポートを担当しました。私の仕事は、ちゃぶ台企画の宣伝と席の空いているちゃぶ台への訪問者の誘導でした。

午後のちゃぶ台のテーマは「がん細胞を狙い撃つ BNCT」「キリスト教賀川豊彦と京都」「リズムでつながる脳」「歴史に学ぶ大地震」「ロボットがどうやってものを見分けるの」の5つでした。

13:30 にちゃぶ台企画が始まった時には既にすべてのちゃぶ台に人が集まっていました。人が少なくなるちゃぶ台があると、通りすぎる人に「ちゃぶ台いかがですか?」「これは研究者と来場者が同じ目線で語り合える企画です」と説明し、参加を促しました。興味を示すものの、靴を脱ぎちゃぶ台に上がるのに抵抗がありそうな来場者には、「この席は空いていますので、どうか座ってください」「出入り自由なので好きなタイミングで抜けられますよ」と半ば無理矢理座ってもらいました。少し強引かなと心配しましたが、皆楽しそうに研究者と語っていました。

印象に残っているのは「リズムでつながる脳」のちゃぶ台です。出展代表者の水原先生が持ち寄った空き缶とメトロノーム、脳波を測る機械などの小道具が来場者を呼び寄せ、ちゃぶ台の周りに大きな人だかりができました。次々に進む新しい小道具を使った実験のおかげで来場者の興味が途切れることがなく、一度集まった来場者も長時間同じ場所に留まったので、人の輪はどんどん大きくなりました。

他のちゃぶ台でも出典代表者が持ち寄った資料や映像に来場者が見入る光景が多く見られ、同じものを見て同じように考えてみるのがよい対話になると気が付きました。

(天野彩)

2-3. お茶を片手に座談会（トークライブ）

2-3-1. 概要

日時 10月4日（日曜日） 11時00分～12時00分

14時00分～15時30分

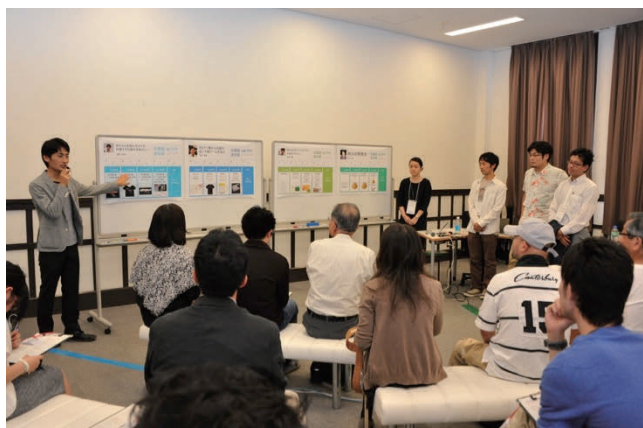
会場 京都大学百周年時計台記念館 2階 会議室IV

1つのテーマに沿ってみんなで語り合うトークライブです。今回は、「オープンサイエンス（社会に開かれた研究）」をテーマに2つのトークライブが行われました。登壇者と客席の距離を縮め、登壇者がテーマに沿って話しながら客席の来場者とも意見を交換できる場となりました。来場者は長椅子に腰をかけて、じっくりと話に耳を傾けることも、ふいに質問することもでき、思い思いのスタイルでトークライブに参加していました。また、当日はWebにて生中継されました。



YouTube https://www.youtube.com/watch?v=zCIWeHc5_7k

ニコニコ生放送 <http://com.nicovideo.jp/community/co2986551>



■ 2-3-2. トークテーマ・参加者一覧

● テーマ 第一部「100万円あったら、どの研究に投資する？体験！クラウドファンディング」

日時 10月4日（日曜日）11時00分～12時00分

会場 京都大学百周年時計台記念館 2階 会議室Ⅳ

いま注目されている研究資金の新しい集め方、クラウドファンディング。「クラウドファンディングって何だろう？」「研究者じゃなくても研究に参加できるの？どうやって？」「クラウドファンディングはずっと気になっていたけど、まだしたことないなあ。」第一部では、クラウドファンディングを疑似的に体験！

登壇者 飯田敦夫（京都大学再生医科学研究所 助教）

榎戸輝揚（京都大学白眉センター・大学院理学研究科宇宙物理学教室 特定准教授）

熊澤辰徳（大阪市立自然史博物館 外来研究員）

鈴木絢女（同志社大学法学部政治学科 准教授）

司会 小野英理（京都大学次世代研究創成ユニット リサーチ・アドミニストレーター）





〈来場者の声〉

- クラウドファンディングなどについても学べて良かった。(20代)

〈参加研究者の声〉

- 久々に純粋なワクワク感で満たされました。社会的な意義やリターンを考えることも大切ですが、純粋な好奇心こそが研究の核にあるべきだと、あらためて思いました。
- 市民参加型の科学のあり方というのは、実践、現実、理想とまだまだ議論の余地がありそうですので、今後とも意識していきたいと思います。

「100万円あったら、どの研究に投資する？体験！クラウドファンディング」レポート

座談会1では、最近、研究の分野で広がり始めている「クラウドファンディング」という仕組みを疑似体験しました。参加者は30～35人で、一般の大人や研究者、中には高校生もいました。男女比もおおよそ半々。クラウドファンディングを既にご存知の方がほとんどでした。研究者が研究内容を発表し、金額に応じたリターンの説明をした後、参加者に投票してもらうという流れで、4人の研究者が順に挑戦しました。

「赤ちゃんを産むサカナが妊娠する仕組みを知りたい！」飯田敏夫（京都大学再生医科学研究所 助教）

飯田先生は成長した魚を出産するハイランドカープという胎生魚を研究されていて、妊娠のメカニズムに注目されています。母親の妊娠期間を決める要因や、胎仔が自分の出生時期を知る方法を見つけるために資金支援を募りました。研究成果はだいたい1年から1年半である程度かたちになるそうです。直接医療等の成果に結びつく訳ではありませんが、将来的に教科書に一行載せて知識を増やして欲しいと仰っていました。

リターン

1. 1,000円：画像&動画詰め合わせ
2. 5,000円：1 + オリジナルTシャツ
3. 10,000円：1 + オリジナルぬいぐるみ
4. 50,000円：1 + 論文謝辞&胎仔標本
5. 投資しない

〔目標額〕	60万円
〔支援総額〕	31万円
〔投票結果〕	1,000円 5人
	5,000円 7人
	10,000円 12人
	50,000円 3人
	投資しない 4人

全体を終えてから、なぜ60万円必要なのか、支援してもらったお金を具体的にどのように使うのかを提示していなかったことを反省されていました。

「カミナリ雲からの謎のガンマ線ビームを追え！」榎戸輝揚（京都大学白眉センター・大学院理学研究科宇宙物理学教室 特定准教授）

榎戸先生は、普段は宇宙に存在する中性子星が発するX線を人工衛星で受け取り、中性子星の性質を調べる研究をされており、その副次研究として雷の発生の謎を探るために支援を募りました。

大学院生時代には自らγ線の検出器を作って研究し、修士論文にされたそうです。今回はその装置をいくつも作って日本海側に並べ、雲から出るγ線を検出・解析して、雲の中でどのように電子が加速されるのかを調べるそうです。榎戸先生はこの研究がもっと大規模な研究の足掛かりになることを望んでいました。また、検出したデータをウェブ上で一般公開し、市民科学に貢献していくことも検討していっていました。

リターン

1. 1,000 円：気合の入った研究紹介
2. 5,000 円：1 + オリジナルTシャツ
3. 10,000 円：1 + オリジナルマグカップ
4. 50,000 円：1 + 論文謝辞＋特注 USB
5. 投資しない

〔目標額〕	100 万円
〔支援総額〕	50 万 2000 円
〔投票結果〕	1,000 円 2 人
	5,000 円 6 人
	10,000 円 12 人
	50,000 円 7 人
	投資しない 4 人

「投資しない」を選択された方のなかに、研究内容が少し難しく、説明を聞いてもあまりわからなくてお金を出せないという方がいらっしゃいました。一般市民、誰にでもわかるように説明の仕方を工夫することも影響するということがわかりました。

「知られざる微小なハエに、名前を付けたい」熊澤辰徳（大阪市立自然史博物館 外来研究員）

日本国内だけでも数千種のハエには名前が付いていないそうです。熊澤さんはそのハエに名前をつけていくことを目指しています。今までは博物館や自宅の顕微鏡を使ってハエの特徴を観察・識別し、国際的に研究者と協力して論文を出されてきました。これからは遺伝子を調べ、DNA の配列の違いで識別し、より正確に細かく分けていきたいそうです。そのためには DNA 解析の機械・試薬を買いそろえる必要があり、それらを自宅に置いて研究室化するために支援を必要とされています。

参加者からはハエに名前を付ける権利を支援のリターンとしないのかという質問がありましたが、今回の模擬体験では支援額が最大 5 万円ということもあり、命名権としては安いとおっしゃっていました。50～100 万円なら検討されるそうです。

リターン

1. 1,000 円：研究報告書
2. 5,000 円：1 + エコバッグ＆クリアファイル
3. 10,000 円：2 + 写真集＆ポストカード
4. 50,000 円：3 + 一日体験ツアー＆標本セット
5. 投資しない

〔目標額〕	50 万円
〔支援総額〕	62 万 5000 円
〔投票結果〕	1,000 円 5 人
	5,000 円 8 人
	10,000 円 3 人
	50,000 円 11 人
	投資しない 5 人

自宅を研究室化することに共感され、応援したい気持ちで 5 万円を払いたいという意見の参加者もいましたが、一方で、趣味のような研究にお金を出したくないという意見の方もいらっしゃいました。また、別の参加者からは、自宅を研究室化するよりも、どこか一般市民も入れる施設で機械や試薬をそろえたら子供の自由研究にも使え、より一層支援をもらいやすくなるのではないかと提案があったことが印象的でした。

「椋川の開発史」鈴木絢女（同志社大学法学部政治学科 准教授）

鈴木先生は高度経済成長での拡大造林・木材自由購入化・減反政策などの影響を受け、採算の取れない杉林が広がっている滋賀県高島市の椋川という中山間地を調査されています。椋川のように高度経済成長からマイナスの影響を受けた地域は日本国内だけ見ても少なくありません。鈴木先生は、椋川の調査を通してこうした地域の新しい開発の在り方を模索し、他の地域にも活かしていきたいと仰っていました。

現地調査が大切なこの研究では、交通費が高くてしまいます。この交通費を賄うために支援を必要とされています。10 年後には村があるかどうか定かではないこの村のためにも今すぐにでも動き出したいそうです。

リターン

1. 1,000 円: 「棕川開発史」
2. 5,000 円: 1 + 棕川農産コメ 1kg
3. 10,000 円: 1 + 棕川農産コメ 2kg
4. 50,000 円: 1 + 棕川農産コメ 5kg + 現地調査参加
5. 投資しない

〔目標額〕	50 万円	
〔支援総額〕	49 万 5000 円	
〔投票結果〕	1,000 円	5 人
	5,000 円	6 人
	10,000 円	11 人
	50,000 円	7 人
	投資しない	3 人

全体を通して、リターンの内容が支援額に大きく影響することがわかりました。リターンの中身については、実質的な「物」よりも「体験」型のリターンを好む傾向があるように感じました。

また、全体の進行に関してもご意見をいただきました。今回は一人ずつ順に説明を聞いて投票してもらっていたので、参加者は金額の配分をどのように判断・決定すればよいのか迷っているようでした。はじめに4つの研究全てを説明し、その後で、どの研究にいくら投資するかを考える流れにすれば、4つの研究を平等に評価できたかもしれません。あるいは、参加者の手持ち予算をはじめに設定してからクラウドファンディングを行うと、より現実味を帯びたかもしれません。今後、またこのような企画があればこうした意見を活かしていけたらよいと思います。

(金岡歩美)

- テーマ 第二部「研究の話って、いまも昔も身近な場所でもされているんじゃないの？
～わざわざオープンって言わなくてもオープンなサイエンスについて考える～」

日時 10月4日（日曜日）14時00分～15時30分

会場 京都大学百周年時計台記念館 2階 会議室IV

地域の人々と密接に関わりながら研究成果を蓄えていく博物館の話から、専門家とアマチュアが混じり合う芸術分野の話まで。「誰にとっても研究や科学が当たり前身近にある日々」とは？

パネリスト 大崎滋生（元桐朋学園大学音楽学部音楽学科音楽学専攻 主任）

櫻井文子（専修大学経営学部 准教授）

藤井翔太（大阪大学未来戦略機構戦略企画室 特任助教）

モデレーター 山田光利（学問の箱庭管理人／Smips 研究現場の知財分科会オーガナイザー）





〈来場者の声〉

- フロアとのコミュニケーションがもっとできれば。物足りない感じ。ニコ生のコメントをもっと使っていればおもしろくなるかと。(30代)

〈参加研究者の声〉

- 京都での時間は、若い人たちのオーラを浴びてとても楽しいものでした。
- 本会場での多彩な発表やにぎわいも印象的でしたし、ディスカッションや質問から気づかされたことなど、色々と私も発見があり、おかげさまでとても楽しい時間を過ごすことができました。

「研究の話って、いまでも昔も身近な場所でもされているんじゃないの？」レポート

モデレーターは山田光利氏、登壇者に大崎滋生先生、櫻井文子先生、藤井翔太先生を迎え、座談会が始まりました。

山田氏はオープンサイエンスを推進してきたのはインターネットをはじめとする技術の進歩に加え、「市民が税金という形で研究に投資した以上、研究成果の還元を求める社会情勢が背景にある」という一般的な見解に対して異議を唱えます。「市民には科学に関わりたいという気持ち、欲求があるのでは？」さらに、過去から蓄積されてきた研究成果のうち我々が手に取ることができるのは「残ったもの、意識して残したもの」だけであり、未来の研究にフィードバックできるように、見える形で残していくべきであると主張しました。

櫻井先生はヨーロッパには市民の寄付金でできた文化施設が多く存在する、ということに興味を持ったそうです。市民による研究成果・文化の保存という観点からオープンサイエンスについて言及します。

自らの軸となっている歴史学と同人活動に基づいて、プロフェッショナルの形成を研究している藤井先生は、新たなプラットフォームが整備され、新たな収入体系が生じ、その上で新たな職業＝プロフェッショナルが生まれるという点において昨今話題のプロゲーマーや「動画配信者」と歴史におけるプロサッカー選手の誕生が類似していることを指摘し、今がその黎明期であるが故に定義も曖昧であると語ります。

大崎先生は音楽史の研究者としての立場から、「偉大な」音楽家の物語は全て「架空の物語」とであると指摘しました。この「大作曲家中心主義」から脱却し、コレクターの不在から歴史に消えた優秀な音楽家や、「偉大な」音楽家の明らかにされてこなかった、あるいは誤解されてきた一面に目を向けて、より広い視野で作家とその活動を見る「全体音楽史」の重要性を説きます。

議論の中心は「研究成果を後世に残すためには」「市民は何を求めているか」についてでした。例えば「アマチュアの創作活動を文化として残していくために何に気を付けているか」という山田氏からの問いかけに藤井先生は「二次創作のジャンルは二度死ぬ。一度目はブームが終わったときで、二回目はファンの言説が消えたとき」と、ある作品が後世に残るためにはファンコミュニティの存在を大事にすべきであると語りました。また、櫻井先生は「100年残る文化施設の裏には、自分たちがコミットした証拠を形に残したい」という市民の強い意志がある」とことを指摘しました。こうした強い意志によって残された数々の文化遺産は、我々が科学と文化を支えてきたという共同体の自負を象徴し、近代のナショナリズムの隆盛に結びつくといえます。大崎先生はその極みがドイツ中心の音楽史であり、残されたものだけを見て歪んだ歴史観を抱いてしまう危険性を指摘しました。研究の礎となる科学や文化の歴史は、文字通り市民によって作られるのです。

白熱する議論の中、会場からは「大学の授業料や博物館の入館料はクラウドファンディングにあたるのか」「市民は日常生活のリスクに直接かわる研究を求めている」といった質問や意見が飛び出しました。藤井先生は社会的意義が研究の価値と不可分になった現状をふまえて、研究者には専門性が妨げられない範囲で市民への説明責任があるとしました。「科学が豊かな生活を約束してくれる」と市民が無条件に信じていた時代は終わったが、知りたいというモチベーションは変わらないと櫻井先生は言います。さらに、大衆化した文化は市井に広がり、後世まで形を伴って残されるチャンスを得ますが、必ずしも正しい形で伝わるわけではないと大崎先生は指摘しました。

座談会を通じて、市民が研究や文化において果たす役割や、研究者との関係が見えてきました。単なる知的好奇心から、あるいは文化を支えてきた跡を残したいという欲求が、時を超えて科学や文化を保存していく原動力となってきたようです。今日でも、こうした市民の意志によって研究の方向性が決定されることや、ときにはクラウドファンディングのような形で研究者が直接市民から経済的な支援を受けることにもつながり、研究や文化が市民と一体となって進められるものになりつつあります。研究者はこれまで残されてこなかったものにも目配せしつつ、手元にある研究結果を10年先、100年先の人々が見られるように残していくことが使命であると言えます。「オープンサイエンス」の概念が単に当世代における学術的成果・文化遺産の市民への還元のみにとどまらず、世代を超えた情報の伝達という、より幅広い時間的スケールで捉えることのできる営みであるという視座がもたらされたという点で、意義のある座談会であったと思います。

来場者は多いときは20人程度で、大学生から中高年までの男性が多かったように思います。また、午前中の座談会にも参加していたという人が半数ほどいました。来場者の中には話の流れをメモに取る人も見受けられました。さらに議論で「ニコ生」「創作」などの身近な話題が出た際は、特に若い層の来場者の食いつきが良かったように思いました。こうした切り口があったことや、各登壇者の取る立場が自己紹介である程度明確化されていたことで議論の流れに追いつくのに苦しんだ様子の方はみられなかったように思います。今回は椅子に備え付けられたポストイットに書いて渡すという形式で来場者から質問を募りましたが、座談会の後半には数件の質問が集まり、オープンサイエンスの座談会にふさわしく、来場者の議論への参加がみられたのは良かったと思います。

（倉田康平）

2-4. 研究者の本棚（特別図書室）

2-4-1. 概要

日時 10月4日（日曜日）10時00分～16時00分
会場 京都大学百周年時計台記念館 2階 会議室Ⅲ

京都大学アカデミックデイに参加している研究者のお勧めの本を展示・紹介しました。研究者には事前に「今の仕事（研究、進路）を選ぶきっかけになった本」、「今ハマっている本」、「若者にお勧めしたい本」、「自分の研究に関連して紹介したい本」の4つの質問をし、その本と本を選んだコメントを紹介・展示しました。来場者が本を手にとり、本から研究者のことを知ってもらう、また当日参加している研究者との対話のきっかけになることを狙って企画をしました。

また、展示の他に、ドキュメンタリー映像の上映・解説を行いました。
※本報告書の最後に推薦図書のブックリストを付けています。

協力：京都大学生活協同組合





〈来場者の声〉

- 研究者の本棚が興味深い。(30代)
- 本のコーナーが楽しかったです。ゆっくり読もうと思います。(20代)

〈出展者の声〉

- 本の紹介や販売会場は同一会場内の方が見てもらえるかもしれない。(助教)
- 飲み物が提供されたり、本の販売を行っているところが良かった。(研究員)

「研究者の本棚」レポート

「研究者の本棚」は、研究者から「今の仕事(研究進路)を選ぶきっかけになった本」「今ハマっている本」「若者にお勧めしたい本」「自分の研究に関連して紹介したい本」を募り、来場者に紹介するコーナーです。それらに加えて、「山極総長推薦図書コーナー」と別室で行われた座談会に関連する本の紹介もありました。誰もが知る古典の名著から漫画、最近話題になった本まで、多種多様なジャンルの書籍が集まりました。本には推薦者のひとことが付き、来場者の興味を引きます。

本棚から手に取ってその場でじっくり立ち読みする人が多く、部屋の隅に並んだ椅子を利用して読書する人はあまり多くありませんでしたが、他のコーナーから来た人が腰を下ろすスペースとして利用している様子が見られました。また今回入り口付近で書籍一覧を配布しましたが、少なくとも12時から13時30分の間で急激に部数が減る様子はありませんでした。

部屋には常に10人程度が来室し、大学生から年配の方まで、様々な年齢層の方が思い思いの本を手にとって眺めていました。友人と「この本おもしろそう!」と静かに語らう様子もみられました。来場者と様々な研究分野や研究者自身について思いを巡らせるきっかけとなるような本との出会いの場になっていたと思います。

(倉田康平)

■ 2-4-2. トークテーマ・参加者一覧

● 映像上映・解説「東南アジアの『人と自然』ドキュメンタリー」

日時 10月4日（日曜日）12時30分～13時30分

会場 京都大学百周年時計台記念館 2階 会議室Ⅲ

京都大学東南アジア研究所では、2012年から Visual Documentary Project を開始し、東南アジアの若手映像作家が制作する短編ドキュメンタリーを募集・上映しています。2014年は「人と自然」をテーマに作品を募集したところ、各国から多数の応募がありました。アカデミックデイ 2015では、このプロジェクトの紹介を兼ねて、応募作の中から上位作品2本を上映し、研究者が解説を行いました。

解説 直井里予（京都大学東南アジア研究所 機関研究員）



「東南アジアの『人と自然』ドキュメンタリー」レポート

12 時 30 分から、「研究室の本棚」と同室で、京都大学東南アジア研究所による「人と自然」をテーマにした 2014 年度 Visual Documentary Project の入選作品である「The Silence of the Summer/沈黙の夏」と「More than a Tree/命を守るマングローブ」の 2 本が上映されました。

①「The Silence of the Summer/沈黙の夏」

舞台はベトナム・ハノイ。緑が失われる大都市からセミの声が消え、バイクの排気音と喧騒が人々の心をひりつかせる。かつて自然があった故郷の美しい田園風景すら今は記憶の中にだけ残っている。人口増加に伴う経済活動に押しつぶされる自然に心を痛める昆虫学者は、小さな生き物が消えることが生態系に大きな影響を与えると語る。木々の欠如に抗う人々は残された小さな緑—町の小さな中庭に一時の安らぎを得て、ささやかな夏の訪れを感じている。今や標本箱の中にしかないセミは、再び鳴くことはない。

②「More than a Tree/命を守るマングローブ」

ミャンマー北西部のラカイン州にある海岸部の村落は、毎年ベンガル湾で発生するサイクロンによる洪水に生活を脅かされてきた。こうした状況に応え NPO・Malteser International と Mangrove Service Network はマングローブの植樹を村民に呼びかける。マングローブが防波堤の役割を果たし、たとえ海から大きな波が押し寄せても安全な場所に逃げる時間を確保できるという。男性に負けじと女性も積極的に作業に参加し、人々は一丸となって命のマングローブを海岸に植え付けた。活動は植樹のみにとどまらず、木の伐採を防ぐために薪材利用が少なくすむ熱利用効率の高いコンロを作るなど、マングローブを育て、長年保全していくための取り組みは多角的に行われた。2 年後、マングローブは洪水から村落を充分守れるほどに大きく成長し、木の下ではエビや魚介類がよく採れるようになった。保全の取り組みが世代を超えて引き継がれていくことで、マングローブは今後も多くの人々の命を守り続けるだろう。

当初集まったのは 10 人程度でしたが、上映中に人が増え、最終的に部屋の隅の椅子も埋まるほどの人数になりました。客層としては中高年男性が多く、東南アジアに行ったことがあるという人が半数を占めており、東南アジアに何かしらの関心を持った人が集まっているように見えました。上映の際部屋を消灯しましたが、暗い中でも本棚コーナーにとどまる人が数人見られました。また、上映が始まる前にちょうど隣室での座談会が終わり、座談会の部屋側の入口から一時的に多くのお客さんが部屋に流入していました。このタイミングで呼びかけを積極的に行っていればより多くの方が上映に集まったかもしれません。

質問の時間にはプレゼンターと質問者、そしてお客さんの中に偶然(?) 居合わせた映像監督を巻き込んで「ドキュメンタリーとは何か」という深遠な疑問に思索を巡らせる一幕もありました。この予想外の展開に、ドキュメンタリーとはこういうことなのかもしれないとちょっと思ったり。

「The Silence of the Summer/沈黙の夏」では都市化により環境が破壊され、わずかに緑の残る小さな庭に安らぎを求めるしかない現状にやるせなさを感じましたが、マングローブ林の欠如、これに伴う災害の脅威に人々が一丸となって取り組み、共同体の危機を回避した「More than a Tree/命を守るマングローブ」は、人が自然を守り自然が人を守る良好な関係を取り戻すことは不可能ではない、という希望を抱かせてくれる作品だったと思います。「人と自然」という普遍的なテーマだけあって、どちらの作品についてもお客さんは流れる音、語られる言葉に耳を傾け、映像に見入っていました。若手映像作家によって多様な視点から切り出された東南アジアの「いま」を見つめることで、作品を観た人全ての感情が揺さぶられ、認識が変化する。ドキュメンタリーにはそんな力があると感じました。

(倉田康平)

■ 2-4-3. 関連企画

アカデミックデイ参加研究者のお勧めの本について、他の施設でも特設コーナーが設置されました。

● 京都大学附属図書館

アカデミックデイ 2015 開催前後の 9 月 29 日から 11 月 27 日にかけて約 2 ヶ月間、附属図書館 1 階 ラーニング・コモンズ前にて、総長およびアカデミックデイ参加研究者がセレクトした本を展示しました。

<総長の本棚>

山極総長が「今の仕事(進路)を選ぶきっかけになった本」、「今ハマっている本」、「若者にお薦めしたい本」、「自分の研究に関連して紹介したい本」として、セレクトした図書 11 点

<研究者の本棚>

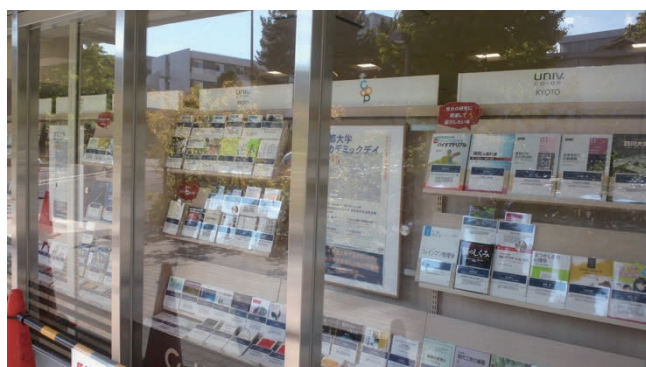
アカデミックデイ参加研究者がセレクトした本のうち、「今の仕事(進路)を選ぶきっかけになった本」から約 50 点



URL: <http://www.kulib.kyoto-u.ac.jp/modules/bulletin/index.php?page=article&storyid=1757>

● 京大生協ショップルネ（書籍コーナー）

アカデミックデイ 2015 開催前の 9 月 14 日から 10 月 3 日にかけての 3 週間、ショップルネ一階イベントスペース展示にて「研究者の本棚」が再現され、展示されていた本の販売が行われました。



● 京都府立図書館

アカデミックデイ 2015 開催前後の 9 月 25 日から 10 月 18 日にかけて、京都府立図書館地下 1 階閲覧室にて京都大学アカデミックデイ 2015 に出展する京都大学研究者のお勧め本と関連図書を紹介・展示する企画「研究者の本棚」特設コーナーが設置されました。



2-5. 対話マラソンのための給水ポイント（ドリンクコーナー）

2-5-1. 概要

日時 10月4日（日曜日）10時00分～15時30分

会場 京都大学百周年時計台記念館 2階 国際交流ホール

「京都大学アカデミックデイ」では、コーヒーやお茶を提供するドリンクコーナーを用意しました。このコーナーには、「好きなお飲物を片手に、対話の場へお戻りください」と記したサインを置きました。畳のコーナーやトークライブでは、飲み物も楽しみながら、来場者と研究者が対話をする場面が見られました。



〈来場者の声〉

- いろんな分野の研究のお話が聞けて、勉強になりました。バックやドリンクもいただけて良かったです。(30代)
- ドリンクサービスがうれしいです。(30代)
- ドリンクコーナーありがたかったです。(30代)

〈出展者の声〉

- 明るい雰囲気、よい交流の場になっている。アンケートとドリンクの仕組みがうまいと思った。
- 飲み物を提供していただけるのは、本当に助かりました。(研究員)

3. アンケート

3-1. 来場者アンケート

■ 3-1-1. アンケートの設計とねらい

「京都大学アカデミックデイ」では、来場者のみなさまに2種類のアンケートにご協力いただきました。

1種類目は、「対話マラソンのための給水ポイント（ドリンクコーナー）」でお使いいただいた「ドリンクと交換アンケート」。「京都大学アカデミックデイ」をどこで知ったのか？ どのような方にお越しいただいたのか？ を主催者が知ることがこのアンケートの目的でした。

もう1種類は、お帰りの際にご協力いただいた「記念品と交換アンケート」です。「京都大学アカデミックデイ」の満足度や研究者との対話で印象に残ったことなどをご記入いただきました。



● ドリンクと交換アンケート（A5 サイズ：148×210mm）

京都大学アカデミックデイ 2015



ドリンクと交換アンケート \ 早めに記入! /

以下のアンケートにご記入いただくと、「対話マラソンのための給水ポイント」(ドリンクコーナー)で
ご使用いただけるドリンクチケットになります。15:30までにドリンクコーナーにお持ちください。
ドリンクチケットと交換させていただきます。

※15:30を過ぎてもアンケートは受付にて回収しておりますので、ぜひご記入ください

2015.10.4

Q1. 「京都大学アカデミックデイ」の開催をどこで知りましたか？（複数回答可）

- ポスター・チラシを見て ① 高校 ② 大学 ③ 地下鉄 ④ 市バス ⑤ 新聞折込チラシ（紙名： ）
⑥ 府立図書館 ⑦ その他の公共施設（施設名： ）
⑧ 新聞（紙名： ） ⑨ 雑誌 ⑩ ラジオ ⑪ 京都大学ホームページ
⑫ ツイッター・フェイスブックなど
⑬ メールिंगリスト・メルマガなど
（差し支えなければML名・メルマガ名を教えてください： ）
⑭ 「京都大学アカデミックデイ」関係者からの紹介 ⑮ 会場に来て初めて知った
⑯ その他（ ）

Q2. 京都大学のその他のイベントに参加されたことはありますか？（複数回答可）

- ① 春秋講義 ② 京大ウィーク ③ 京都大学オープンキャンパス ④ ホームカミングデイ
⑤ 京都大学アカデミックデイ（過去 回参加）

Q3. あなたの興味のあることについて教えてください。（複数回答可）

- ① 科学・技術 ② 医療・健康 ③ 文化・芸術 ④ 京都のこと・地域の活動

Q4. ご自身について教えてください。

A. ご年齢

- ① ～9歳 ② 10代 ③ 20代 ④ 30代 ⑤ 40代 ⑥ 50代 ⑦ 60代 ⑧ 70代～

B. ご職業

- ① 小学生 ② 中学生 ③ 高校生・高等専門学校 ④ 京大生・院生
⑤ 京大以外の大学生・院生 ⑥ 京大教職員 ⑦ 京大以外の教育職 ⑧ 主婦・主夫 ⑨ 会社員・自営業
⑩ 行政関係 ⑪ 無職 ⑫ その他（ ）

Q5. お住まいの都道府県はどちらですか？

- ① 京都市内 ② 京都府内 ③ その他（ ） 都・道・府・県

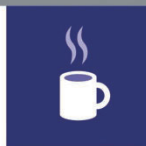


ご協力、ありがとうございました。

● ドリンクチケット（名刺サイズ：55×91mm）

何度でも使える

ドリンクチケット



*対話マラソンのための給水ポイント
（カフェコーナー）で、ご提示ください

京都大学アカデミックデイ 2015

記念品と交換アンケート (A5 サイズ : 148×210mm)

京都大学アカデミックデイ 2015



記念品と交換アンケート

＼ 帰る前に記入！ ／

以下のアンケートにご記入いただき、受付にお持ちください。

京都大学アカデミックデイ特製トートバッグを差し上げます。

※品切れの場合はご容赦ください

2015.10.4

本日はご来場ありがとうございました。今後の企画のためにご協力をお願いします。

Q1. 本日の「京都大学アカデミックデイ」は、総合的にみて満足できましたか？

最も近いものを1つだけお答えください。

① 満足できた ② どちらともいえない ③ 満足できなかった

Q2. 来年の「京都大学アカデミックデイ」に、また来たいと思いますか？

最も近いものを1つだけお答えください。

① そう思う ② どちらともいえない ③ そう思わない

Q3. 本日の「京都大学アカデミックデイ」のツイートブースからの情報は役立ちましたか？

① 役に立った ② 役に立たなかった ③ 知らなかった

Q4. 本日の「ちゃぶ台囲んで膝詰め対話」と「研究者と立ち話」の中で、あなたが良かったと思うのはどの出展ですか？もしその出展になにか「賞」をプレゼントするのなら、どんな名前の賞にしますか？

例：「ワクワクしたで賞」、「ぼくの話をよく聞いてくれたで賞」、「研究のウラ話を赤裸々に話してくれたで賞」、
「これからも研究をがんばってほしいで賞」など

出展番号（出展番号はパンフレットを参照）

賞の名前

賞

賞

賞

Q5. 「京都大学アカデミックデイ」の、良かった点・悪かった点を教えてください。

良かった点

悪かった点



ご協力、ありがとうございました。

● 記念品（エコバッグ）

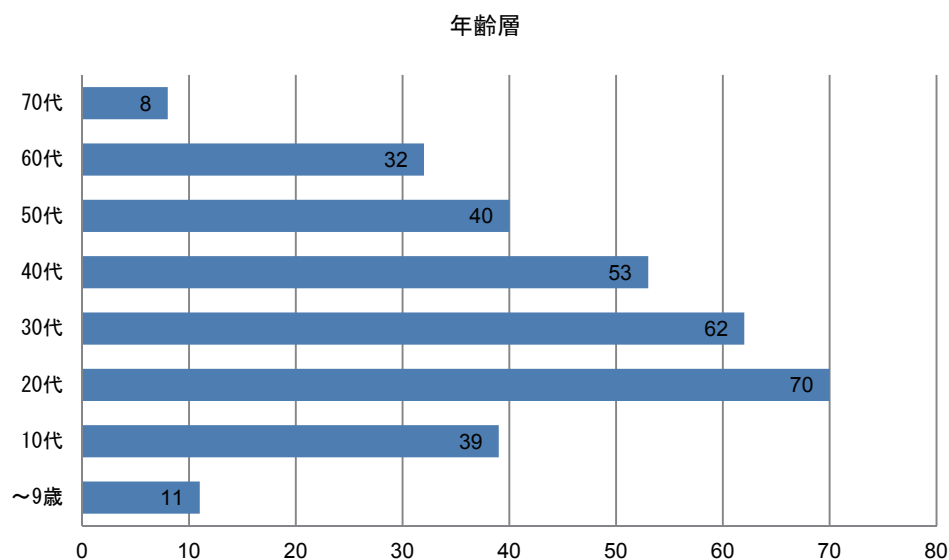


3-1-2. 「ドリンクと交換アンケート」の結果

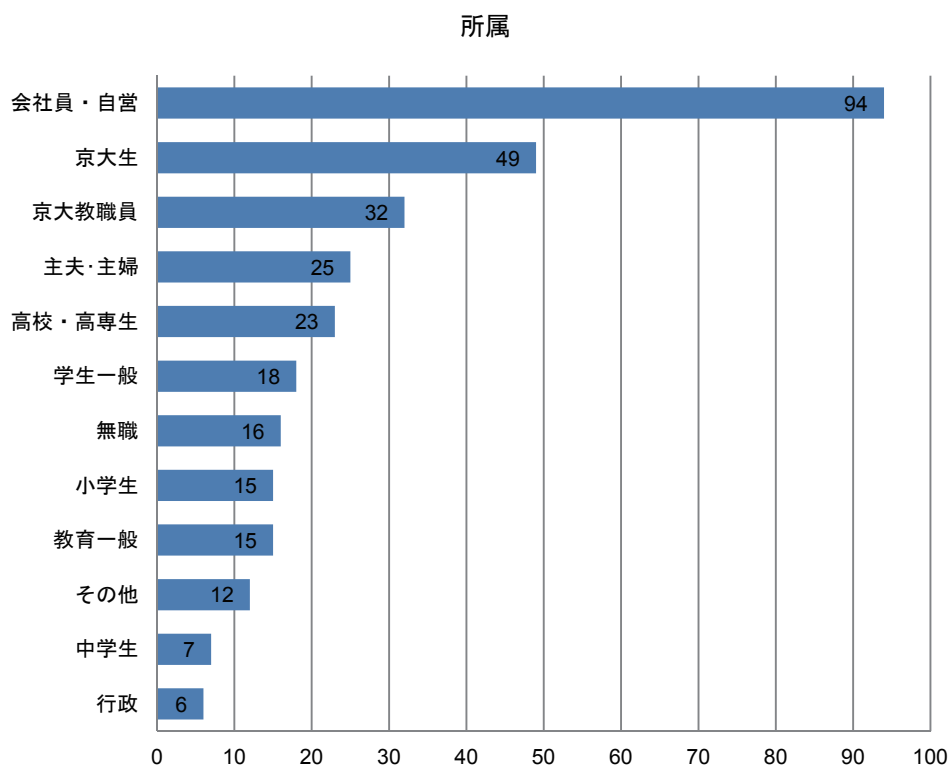
来場者 460 人

回答者数 312 人（回収率 68%）

● 来場者はどのような方だったのか？



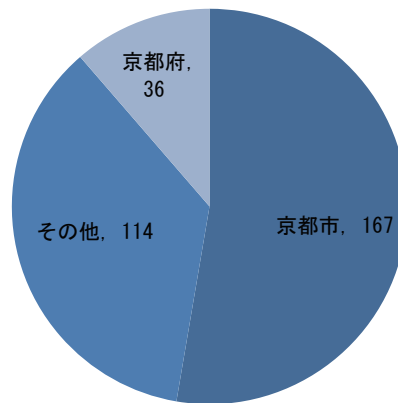
（単位：人）



（単位：人）

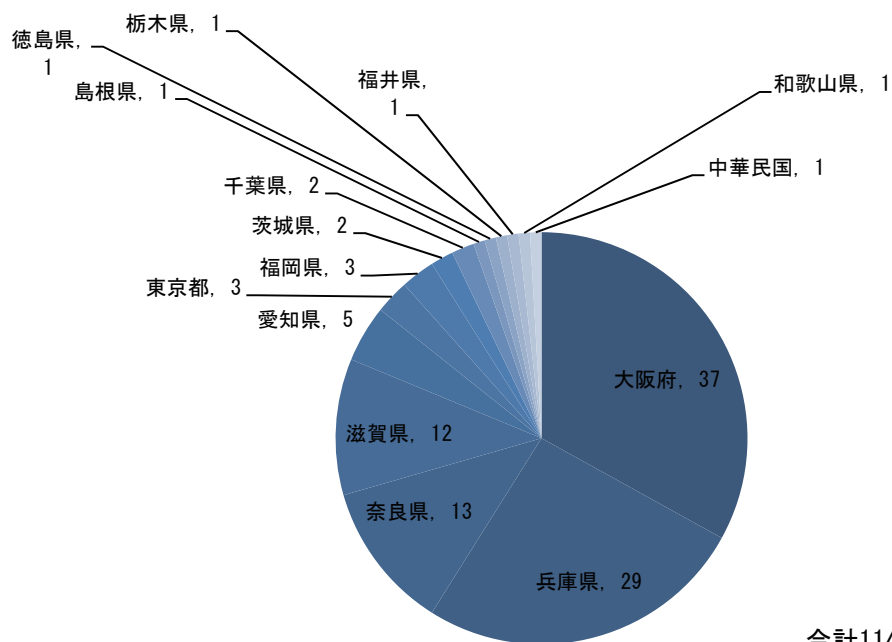
・住まい

京都市内・京都府内



(単位：人)

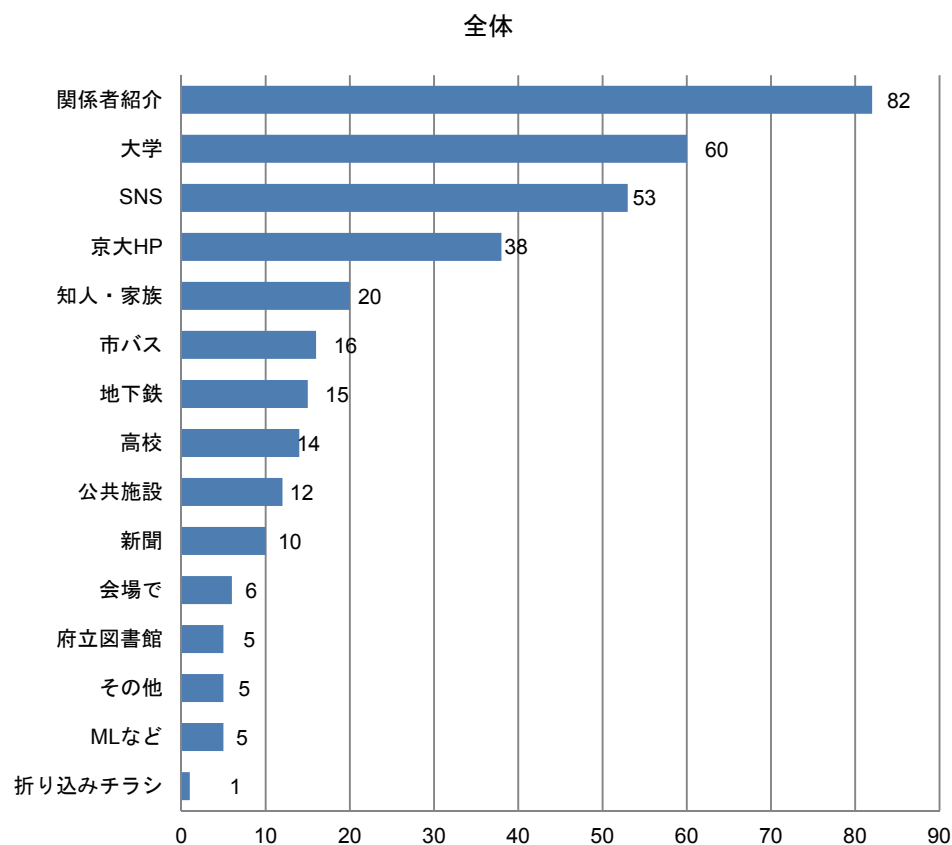
京都府外



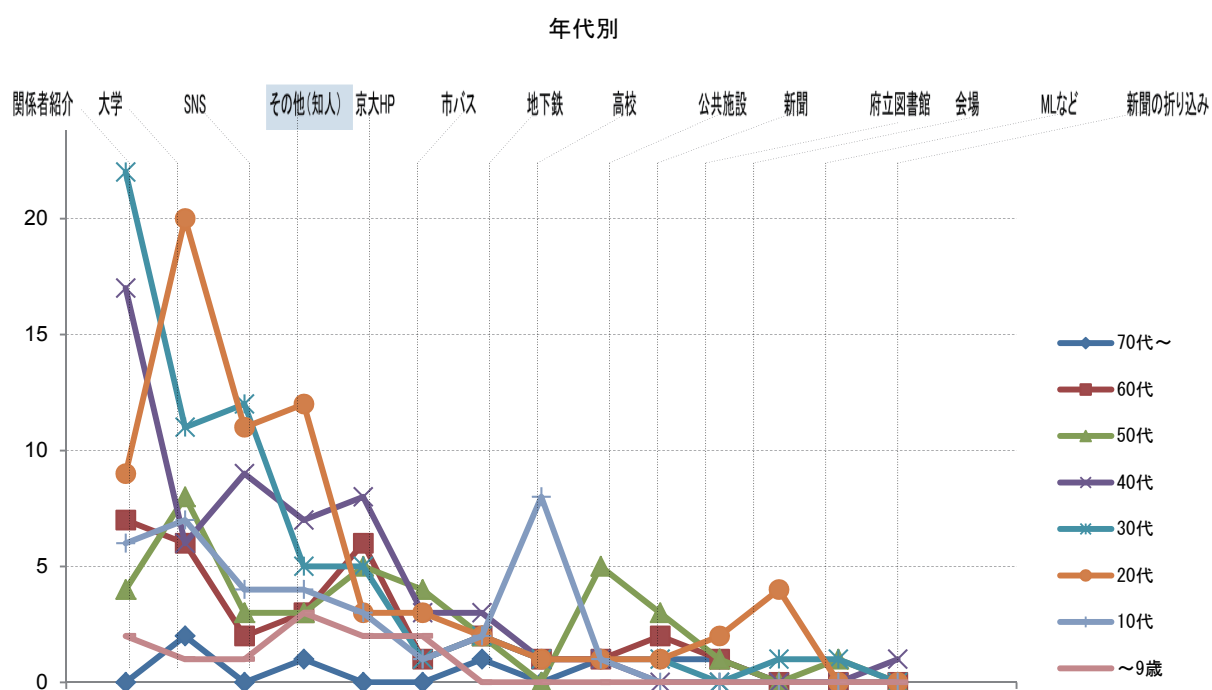
合計114人

● 来場者はアカデミックデイをどこで知ったのか？

・「京都大学アカデミックデイ」の開催を知ったところ（複数回答可）

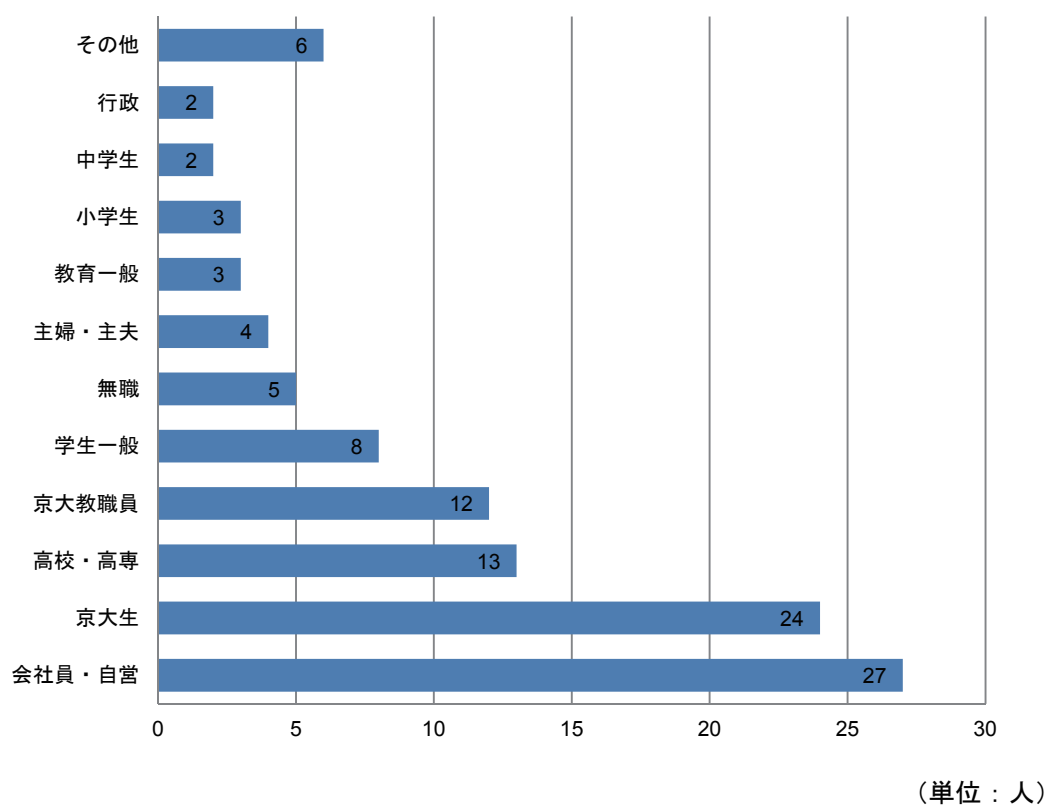


（単位：人）



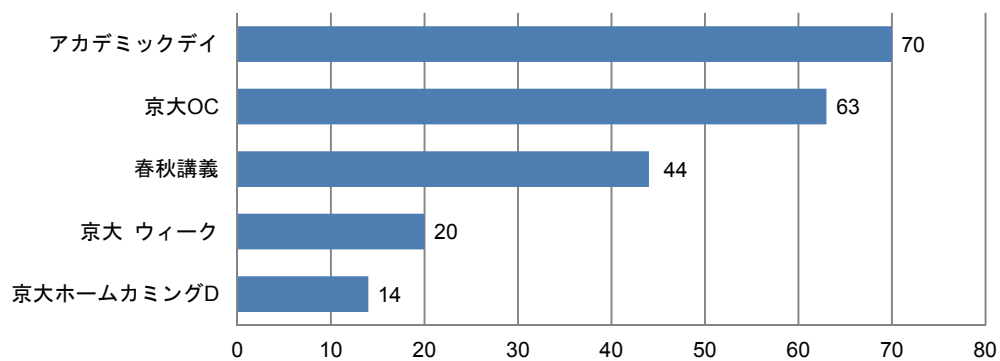
（単位：人）

紙媒体で知った人（市バス・地下鉄・公共施設・大学・高校）の所属

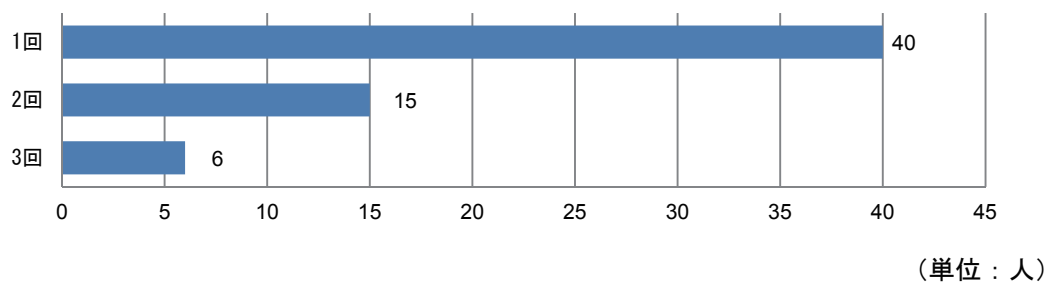


● 京大のイベントに参加したことはありますか？

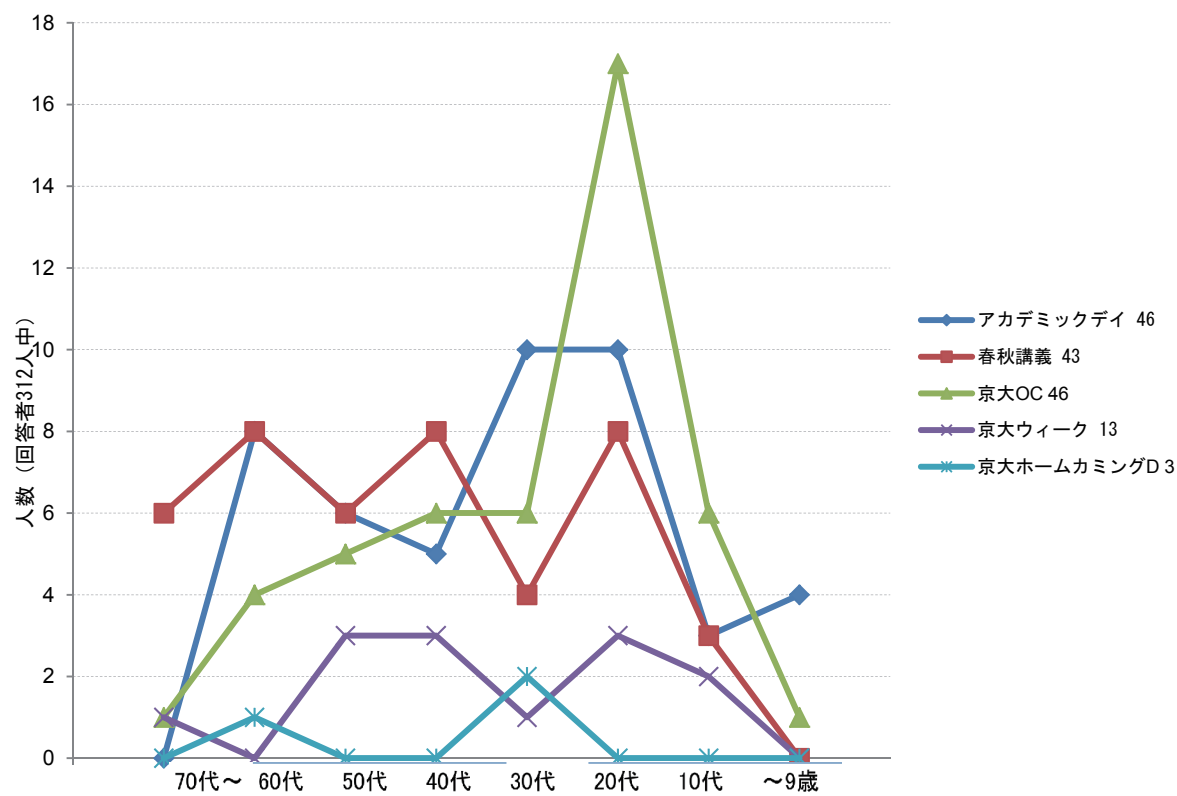
・参加したことのある京大イベントは何ですか？（複数回答可）



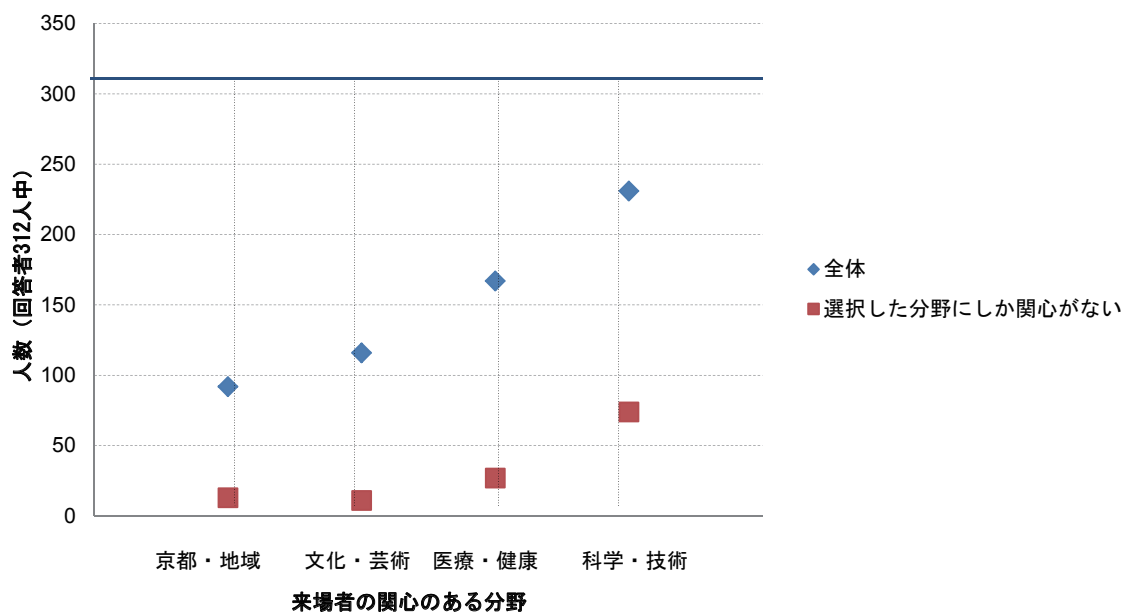
・アカデミックデイに過去に何回参加しましたか？



・京大イベント別リピーターの年齢層分布



● 日頃どんな分野に関心がありますか？（複数回答可）

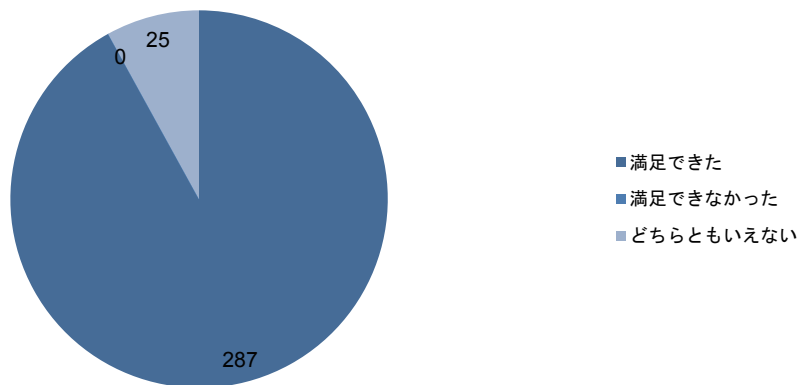


■ 3-1-3. 「記念品と交換アンケート」の結果

来場者 460 人

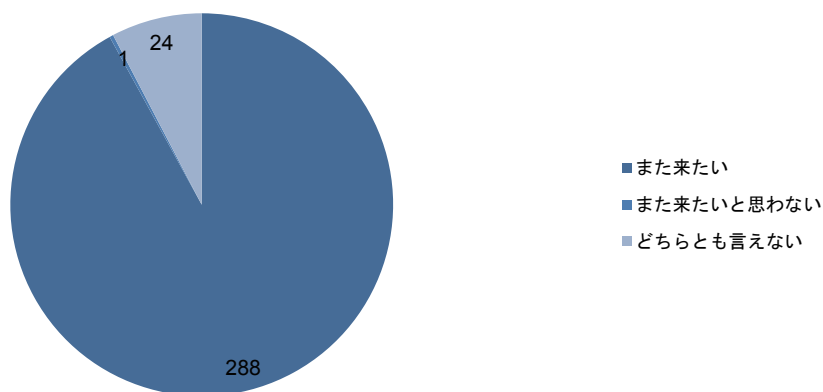
回答者数 337 人（回収率 73%）

● 本日の「京都大学アカデミックデイ」は、総合的にみて満足できましたか？



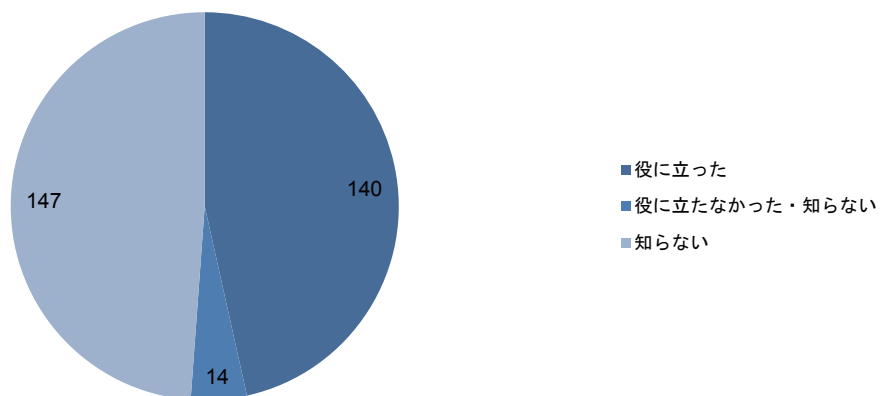
（単位：人）

● 来年の「京都大学アカデミックデイ」に、また来たいと思いますか？



（単位：人）

● 本日の「京都大学アカデミックデイ」のツイートブースからの情報は役に立ちましたか？



（単位：人）

●「京都大学アカデミックデイ」の、良かった点・悪かった点をおしえてください。

〈良かった点〉

- 研究者の本棚が興味深い、タイトルが工夫されていて興味を持ちやすい点（30代）
- 研究に携わっている方の熱い気持ちを感じることができ、日本の未来は明るいかも・・・（捨てたものではないのでは）と感じられた（40代）
- 1つ1つの説明がわかりやすかった！！（10代）
- いろいろな分野について学べた。新たな世界が広まりました！！（10代）
- いろいろな分野で難しい研究をされているのだとこの研究が人類に役立つのだと思うと、エールを送ります。（60代）
- オープンなところ。気軽に話が聞けるところ（50代）
- クラウドファンディングなどについても学べた点（20代）
- どのブースにも気軽に参加できるのがよかったです。（20代）
- それぞれの研究者と直に接することができ、詳しく丁寧に説明してくださったこと。（40代）
- テレビの科学番組を見るだけとは違って“なぜ？”の疑問に答えてもらえる（60代）
- ドリンクや企画など配慮がゆきとどいていてよかったと思います。フロアも活気があったように思いました。（20代）
- パンフレットが充実している（30代）
- 普段お話する機会のない分野の方々との会話は新鮮でした（？代）
- もっとかた苦しい感じがなと思っていただけ、大学の先生や研究している人たちがとても分かりやすく、かつ研究の内容を具体的に知れた気がします。ありがとうございました！（10代）
- 教授とスタッフとの会話、大変うれしかったです。日常生活において困っていることを伺って、ヒントをたくさんもらいました。（50代）
- 研究者と対話形式で触れ合えた。（学問だけでなく人という部分も肌で感じられた）（20代）
- 研究者の方の熱意が伝わってきました。よい刺激をいただきました。（40代）
- 素人にもわかりやすく魅力的な説明が多かった。（40代）
- 普段身近にはないものをとても分かりやすく親しみを込めて紹介してくださってよかったです（10代）
- 多様な研究背景をもつ研究者が出展しており多様性が確保されている。（20代）

〈悪かった点〉

- 人気があるブースはなかなかお話が聞けなくて残念でした。もう1日欲しいです。（40代）
- 待たねば話を聞けぬ事が多い。（10代）
- 明らかに人がいないブース、耳栓をして作業をしている方、対話する気がないとみられました。（30代）
- 話をしている人がポスター発表をしていることを専門としていない場合が有り、どう質問をすべきか（誰にきくべきか）が明らかでない（20代）
- 時間が短い。もっといろいろな人の話を聞きたかったけど、座談会でずいぶん時間を使ってしまった（30代）
- 参加者も名札ほしかった（20代）
- 隣との距離が近いと、時々声が聞こえにくかったです。（10代）
- 時間が短かすぎる（見たかったのが全部みられなかった）（40代）
- 混雑しすぎていた（50代）

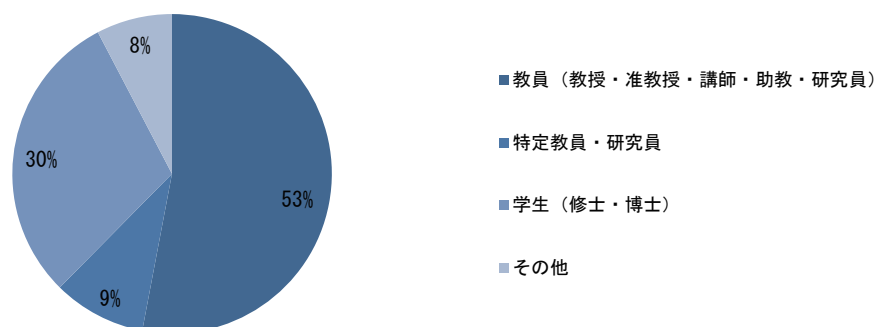
3-2. 出展者アンケート

3-2-1. アンケートの設計とねらい

「京都大学アカデミックデイ」では、京都大学の出展者のみなさまにもアンケートにご協力いただきました。「京都大学アカデミックデイ」に参加した感想、印象に残ったことをご記入いただきました。また、今後の開催にあたってのご意見・ご提案や、研究者による広報活動の本学での支援についての意見・ご提案もご記入いただきました。

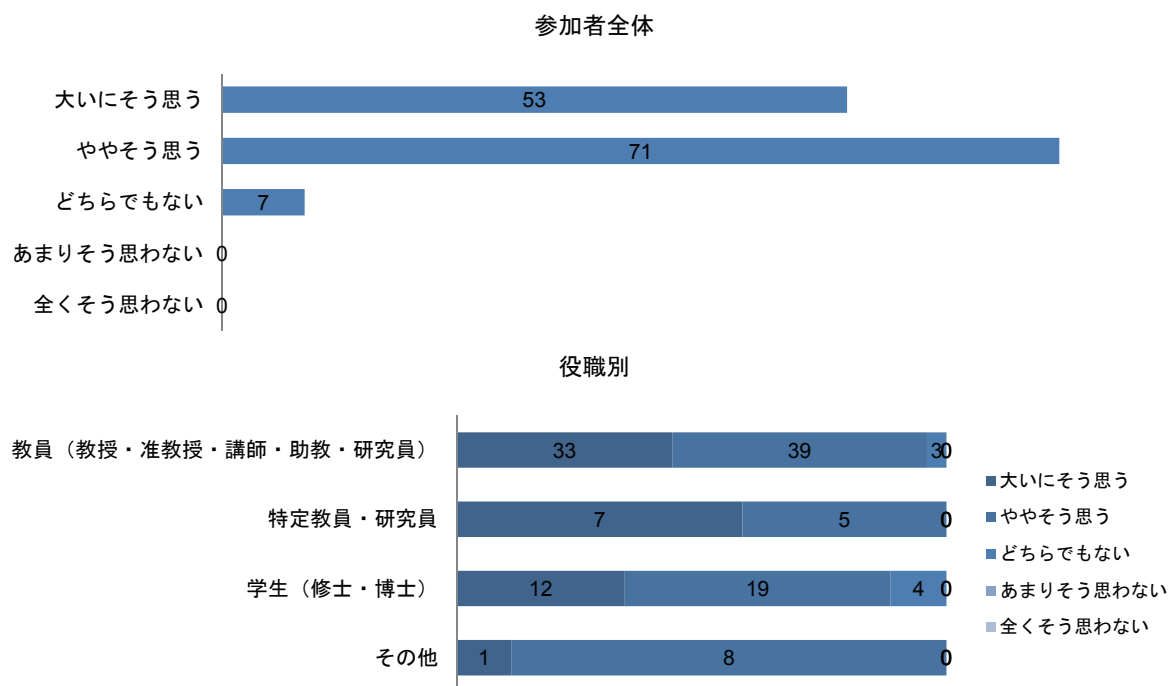
● 回答者の属性

参加研究者 224 名
回答者数 132 名（回収率 約 59%）



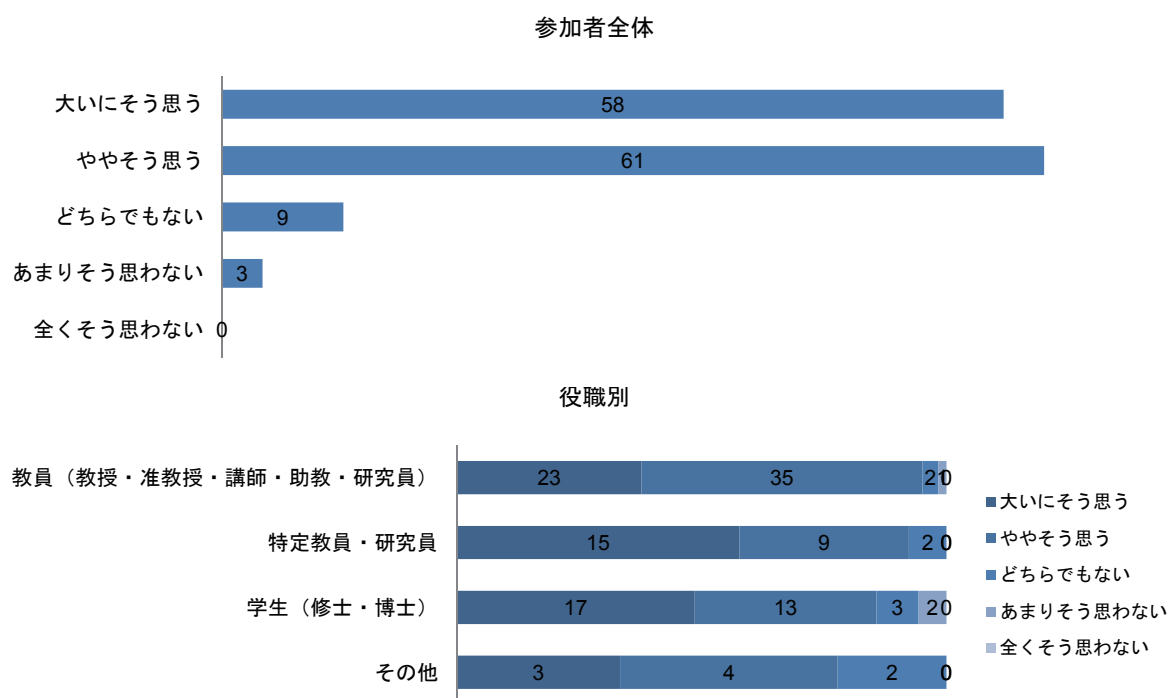
● 「京都大学アカデミックデイ」に参加した感想

(a) 専門外の人への自分の研究に対する興味・理解度などを把握することができた



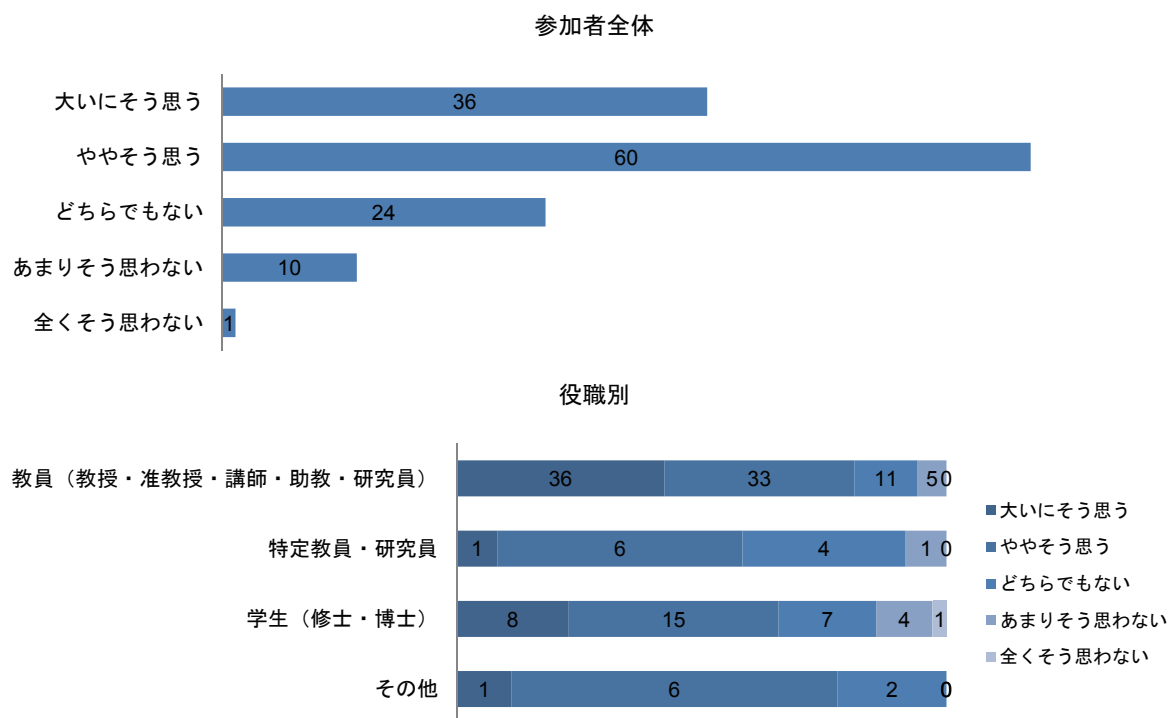
（単位：人）

(b) 専門外の人と話すことで、研究の意味や目的をあらためて考えるようになった



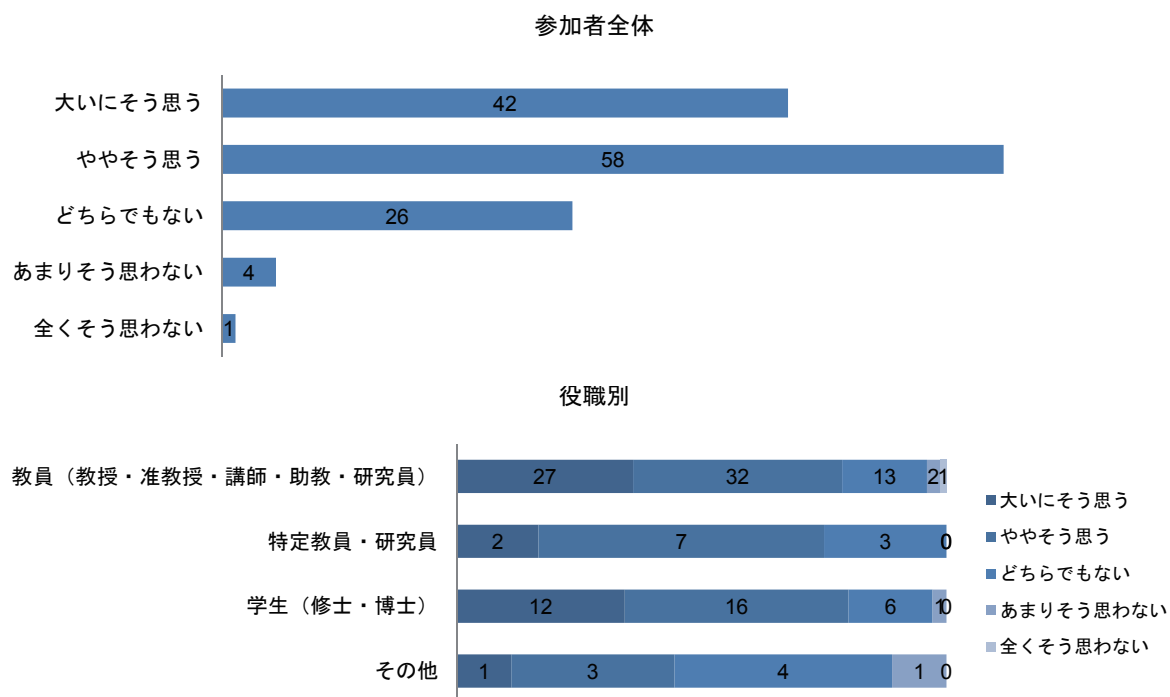
(単位：人)

(c) 自分の研究と人々の生活との関わりを意識するようになった



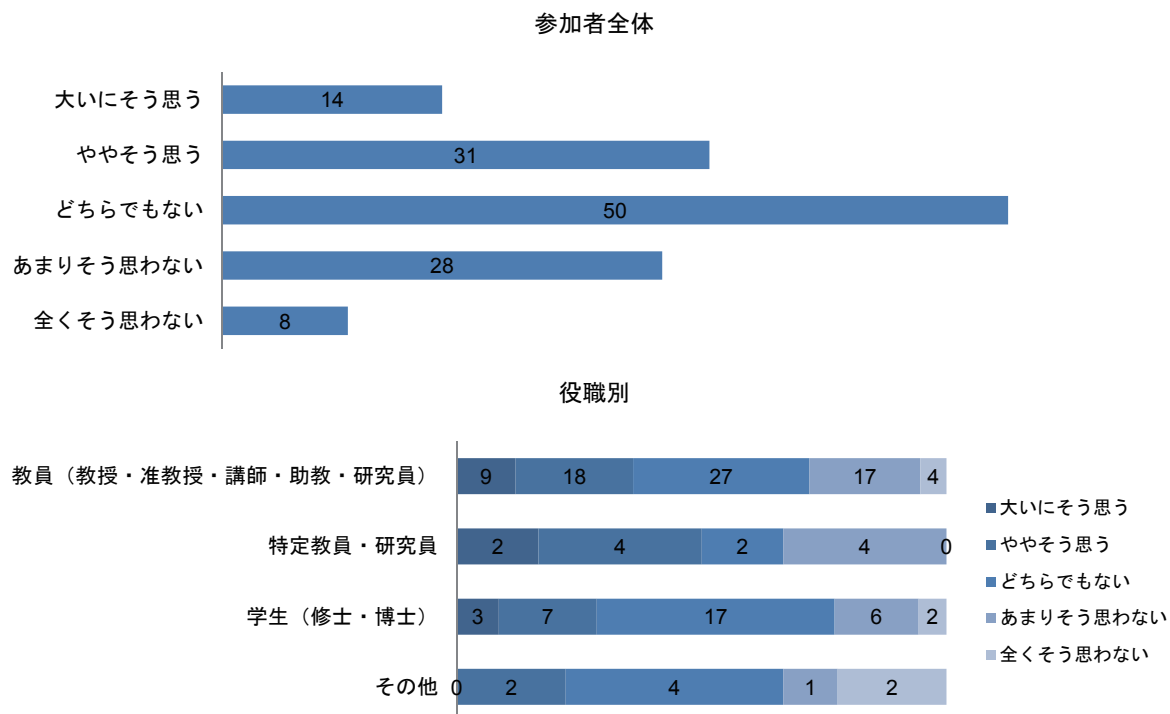
(単位：人)

(d) 自分の研究と人々の生活との関わりを意識するようになった



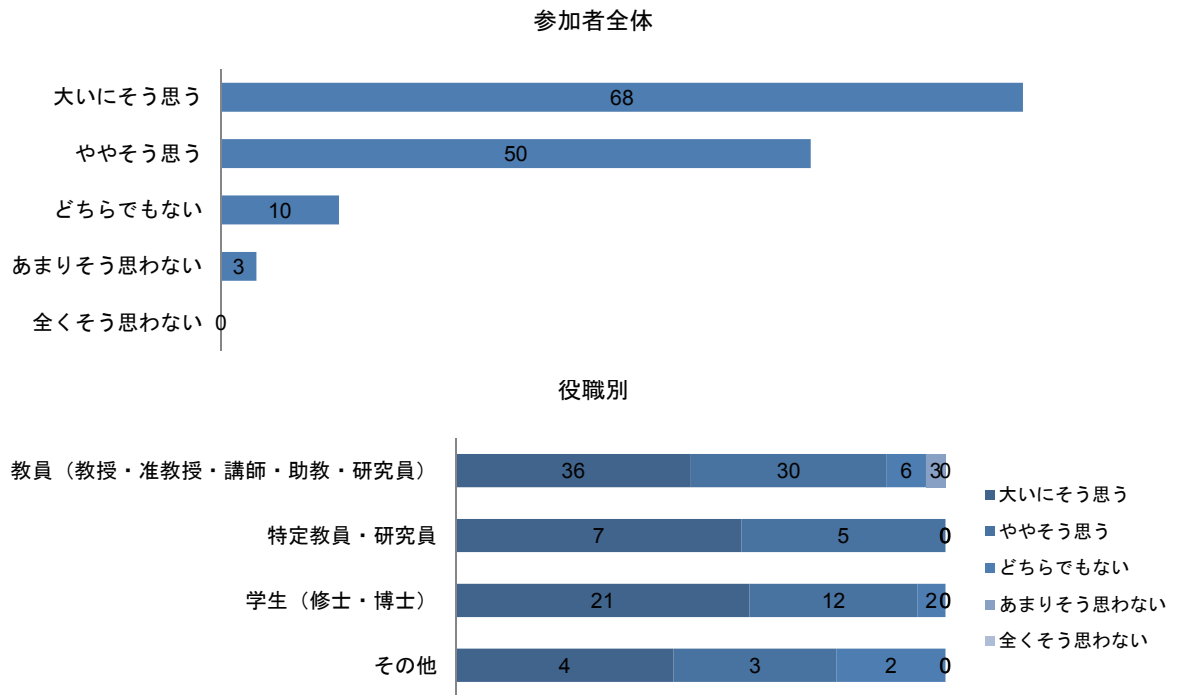
（単位：人）

(e) 他の研究グループから、今後の研究方針に関する示唆を得ることができた



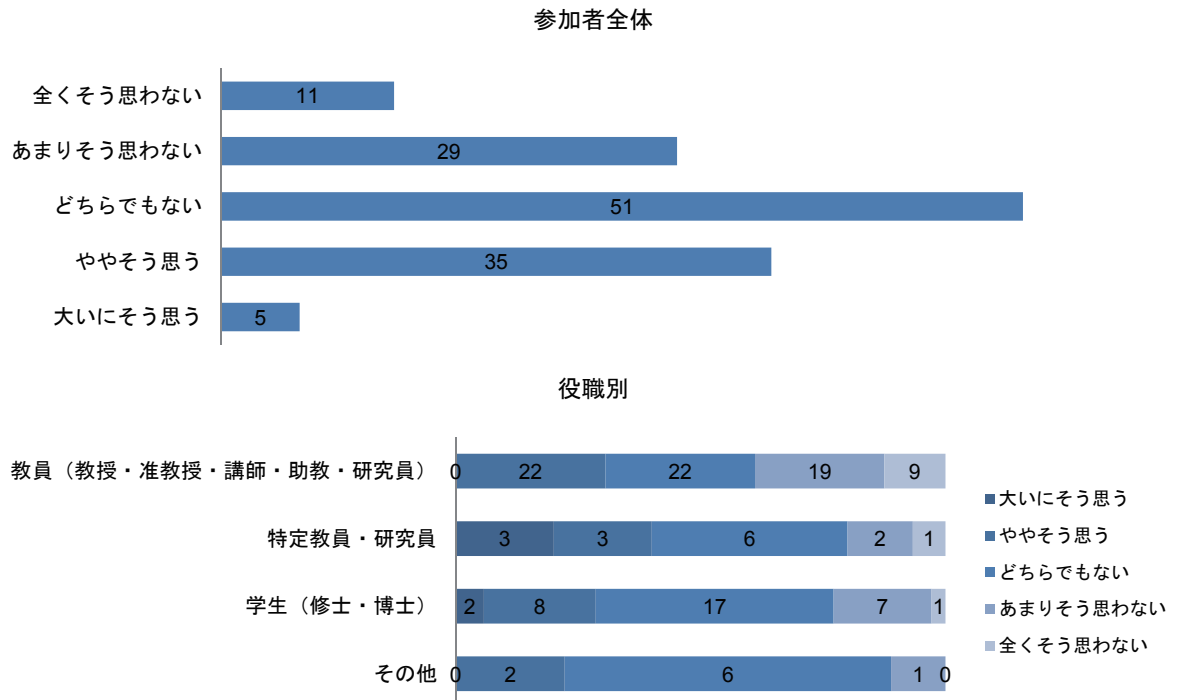
（単位：人）

(f) 研究内容を専門外の人に説明する訓練となった



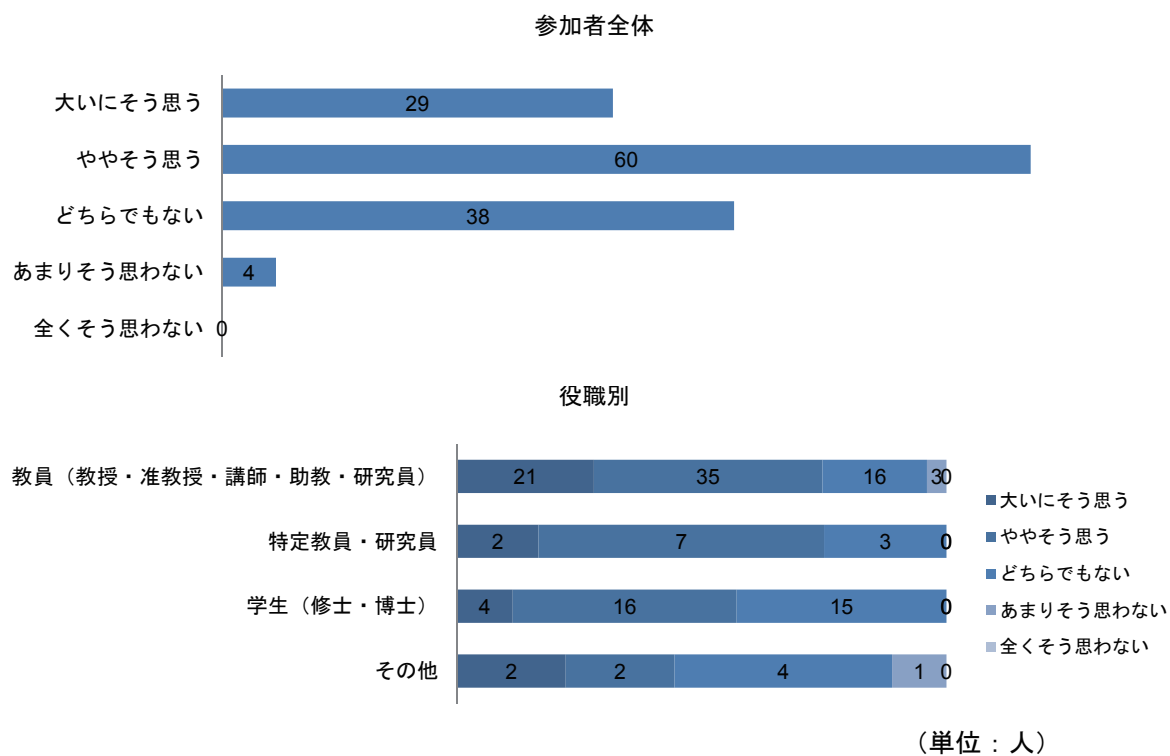
(単位：人)

(g) 参加は日々の研究活動の負担となった

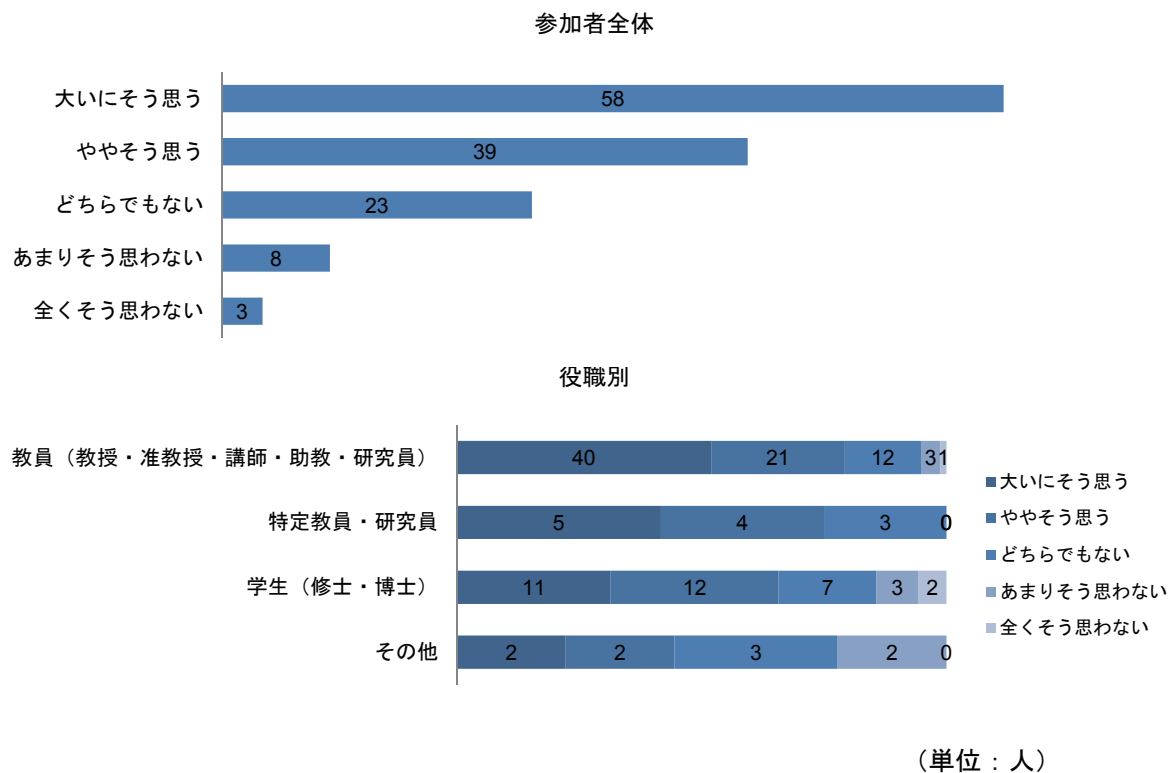


(単位：人)

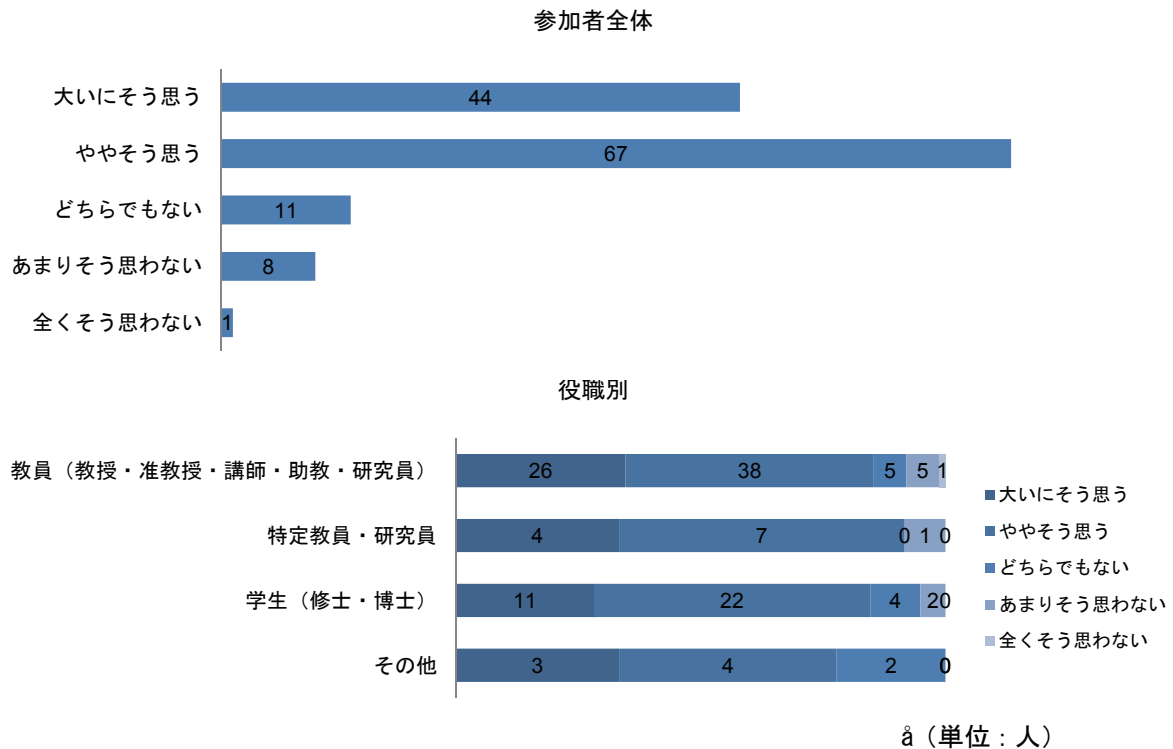
(h) また来年も参加したい



(i) このような活動への参加を研究業績として評価してもらいたい



(j) 他の研究者との交流の機会になった



● 来場者との対話でどのようなことが特に印象に残りましたか？

〈京都大学研究者の声〉

「伝える」ことに関して、困難を感じること

- 個人的な話が長くなる、対応が難しい来場者がいた。
- どうしてもこちらからの一方的な説明になってしまい、来場者の方の意見を聞くという形式にできなかったのも、そこに工夫が必要だと強く感じた。
- 話を聞きにきていただいた方に対して、最初にどのように語りかけるか。説明の途中で話を展開したくなった時に、我慢しなければいけない状況を把握すること。
- ポスターのタイトルと第一印象が重要だと感じた。少しでも難しいワードが目に入ると聞いてもらえないと感じた。
- 一部の来場者の方で、一度思い込んだらなかなかこちらの訂正を聞き入れてくださらないというか、ずっとご自身の主張を繰り返すばかりの方がいて、どうするのが最善なのか考えながらも、結局、「その通りですね」と肯定するしかできなかったこと。
- 悩み相談をされてしまったこと。威圧的に正論をぶつけてくる家族や同僚にはどう対処したらいいですかねえ？」と切実な悩みを打ち明けられたけれど、私にはお話を聞く意外、何もできることはなかった。
- 来場者の人と話をあわせるのが思ったよりも難しいと感じました。勉強になりました。
- わかりにくいことを、わかりやすく説明するのは、難しい。共通知がないと議論は難しいものだと思います。
- 研究の中で使う理論のひとつの説明でも他分野の方に正しく分かりやすく理解してもらえるよう説明するのはとても難しい。
- 薬や医療に対する不信感。病気への不安。「ビッグデータの利活用」促進は、文部科学省・経済産業省・総務省が実用化にどうつながっていくのかという素朴な質問が一番答えづらいところで、努力しているとしかいえませんでした。将来の展望をもう少し分かりやすく説明できるようにしたいと感じます。
- 研究内容を理解してもらるのが難しいこと
- 一般の人に自分の研究を説明する難しさ
- 専門外の人に自分の研究を説明することの難しさ、そして、上手く説明できた（理解し、理解してもらえた）ときのうれしさ。

来場者に関して、新鮮だったこと・気づいたこと

- 京大学部生の意識と関心が非常に高いこと。
- 来場者の知的水準が高い。非日常的なトピックについても、すでに意見を持っている。
- 年齢層が様々だったこと。
- 一般の人の中にもかなりレベルの高い人が混じっているなということ。
- アカデミア以外から参加者や分野外であっても、専門的なことを知っている方がそこそそいたということ。
- 医療関係者および研究者の中で常識となっている知識が、一般にはほとんど浸透しないということが印象に残った。
- 高校生の純正な研究に対する姿勢。
- 来場者の知識が非常に幅が広いことが印象に残った。特に、過去に自分の分野を他大学の大学院まで学んだ人や隣接した分野の深い知識を持っている人まで来ていたこと。
- 専門分野に精通している人もそうでない人も、一様に熱心に聞いてもらえ驚きました。
- 小学校4年生で相当な知識を持った子が、あちこち幅広い研究を聞きに回っていたのが印象的。
- 我々のところは年配の方が結構多くこられて意外でした。
- 知的好奇心の強い中高年の方が多いこと。
- 中性子星人。
- 将来の夢をはっきりと持てず思い悩んでいる高校生との対話において、「海外に短期でもよいので出てみよう」と話したことが印象に残りました。その子はまだ海外に渡航したことがなく、自身の経験や体験から、もし仮に高校では難しい場合で、現時点で解決できないことでも、大学になれば留学等を含め海外経験を得ることは自らの判断で出来ることであり、何か変わるきっかけになるだろうという話をしました。思い悩みこと自体は素晴らしいことなので、是非それを糧に頑張ってもらいたいというような話をしました。
- 高校生がずっと3Dプリンターに興味津々だった。
- どの方も思ったより学術的な知識をお持ちだった。
- 参加者のなかで、小学生（おそらく3、4年生くらい）の意見が最も堅実でしっかりしたものだったことが印象的だった。
- 学生さんしかこなかったこと。ま、年配者の方々にうけるよりも10倍いいことだとおもってますが：笑
- 遠くから来た来場者があったこと。また、示してくれた関心度
- 来場者は一般の市民というよりは、一般市民のある特定のグループの人たちのように感じた。
- 当然のことだが、金属について詳しく知っている人はほとんどいないこと。
- 来場者の幅広さ
- 来場者の皆さん、意識が高い方ばかりで、専門の違う研究者に説明しているような錯覚を思えることが多々ありました。

国民への発信などに関して、気づいたこと

- 来場者と出展者との研究内容に関する認識の違い。アカデミックな関心と社会的な関心の差がよくわかった。
- いろんな方が、いろいろな興味を持ってこられているのが印象に残りましたが、中には分野に大変詳しい高校の先生もおられ、会話を楽しましました。
- 一般の人々がどのようなことに知識、関心があるのかそしてあまり無いのかを自分があまり把握していない事に気づけた。
- 予想もしていなかった質問がきたこと。
- 「研究成果や新しい技術について紹介されるときは、いつもメリットしか紹介されないこと。」という来場者のコメント。
- 職業などで（研究内容に対する）考え方・理解の仕方に偏りがあること。そのような方々の中でも、研究の発展として希望する方向性は少しずつ違っていた。
- 他の分野での応用を希望されることが多かった。
- ポスターの内容ではなく、研究分野そのものの意義に関する根本的な疑問を提示された。はじめてその分野に触れはじめてその分野に触れる方にどう説明するのがわかりやすいかを考えるきっかけになった。
- 心理学系の研究だったのだが、文学研究科でこのような研究ができるのかと数回たずねられたこと。文学部というと、文学の研究というイメージが強いのだなと思った。
あとは「何の役に立つのか」という質問が多かったこと。事前に答えを考えておいたが、やはり説明責任がある

- 多くの人は表面的なことしか気づかないことが大変意外でした。自分の気になるキーワードしか反応せず、全体を読まないか、読んでも分かったつもりで実は自分の思っているように勝手に解釈している、という人間性を見れて面白かったです。これはたとえ研究者であってももありうるかといういろいろ考え、参考になりました。
- 「知らないこと」を「難しいこと」と感じていること。
- 多様な方がいらっしやることを改めて感じました。また、毎年いらっしやる方がいて、昨年からの進捗について話げできた。
- 一般の人々の我々の研究に関する興味関心は高く、大学に所属する研究者として説明責任の大きさにわずかながら気づくことができました。自分が次回も参加するかはわかりませんが、大学としては、非常に重要な催しのように思います。
- わたしの専門はアフリカ研究だが、来場者には、アフリカに対するステレオタイプなイメージがつよいことを予想していたが、さらにそれを感じた。そうしたイメージがまちがっていることを伝えるには、相当に時間がかかることを、あらためて実感した。アフリカに関する正確な認識を伝えることは、わたしの研究の重要な目的のひとつであるため、その意味で今回は、よい機会になった。
- 理系に興味のある来場者と占領期のことを対話すること自体、とても貴重な体験でした。

嬉しかった・励みになった、と感じたこと

- 姿勢やバックグラウンドについて理解してもらえたこと。
- 観測の仕組みなどを説明して、来場者の方が納得される時が印象に残りました。
- 女子高生に「なにこれ、めっちゃ面白〜い！」と口を抑えながらすごく喜ばれたこと。
- 一般市民の方に「水素と聞いて何を思い浮かべますか？」と聞いて「未来！」と即答してくれたこと。
- 「おもしろい」と言ってもらえたこと。
- たいへん熱心に質問される方が多かったと思います。
- 全く知識のない方に簡単に説明することの難しさや、説明して理解してもらえたときの喜びが印象に残りました。
- 高校生が教科書で学ぶことと、実際に研究の世界で行われていることとのつながりに気づけないでいることを残念に感じ、少しでもそれを解消する手助けができたなら幸いであった。具体的には、「環境問題に関心が持てない」という学生に、教科書で習う「同位体」という道具を用いると、環境を見ることができて、環境とは自分の身近にあるものだとして少しでも感じてもらえたのならうれしい。
- 最初はそもそも話を聞いてくれる人がいるか不安だったが、丁寧に説明すれば一般の方でも興味を持てただけなこと。
- 分野に大変詳しい高校の先生もおられ、会話を楽しました。
- 予想以上に熱心に説明を聞いた下さり、質問も多くこちらも進めやすかった。
- 皆さん、本当に楽しみに来ておられました。
- あとは、研究プロジェクトの意義に当たる部分を多くの来場者の方に賛同していただけたので、励みになりました。
- 一般入場者が facebook でパネル内容を発信してくれたこと
- 研究の意義を説明し、それをきいて納得した来場者の顔をみて、こちらもうれしくなりました。思いが通じ合えた瞬間がとても印象に残っています。
- 自分たちの研究している分野に対して期待されていることに対して、自分の研究の価値を理解してくれる人が多かったこと。

研究に関して、ヒント・気づきを得たこと

- 自分が用意したクイズに対して、全く予想していなかった答えやアイデアをもらい、自分の視野が広がったこと。
- 専門的な議論ができた来場者もあり、研究のヒントが得られた。
- 日々の生活の視点から応用の可能性のヒントがもらえる点
- 地球環境と生態系への理解をもってもらえたことが印象に残っている。同僚ではあっても専門の異なる先生方にも関心をもってもらえたことは、専門に近い人の集まりである学会等ではあり得ないことで、良い機会であった。
- 論文などから研究に関する情報を得て、今のはやりなどを考慮しながら今後の方向性などを検討するため、現場（市民など）の方が求めてものは何か？に触れ合う機会も考える機会もない。また、研究は非常に専門的になってくるため視野も自然と狭くなってくる。現場の人の意見を取り入れ、自分の視野を広げる必要があるなど実感するいい機会になった。

- 「地震予知は信用ならないと言われたこと」（そういうのを待ってました。）
「地震予知はできると思ってますか？」と問われたこと。それぞれの経験にもとづいたコメントや質問をして下さったこと。
- 日本史とひきつけて興味を持つ人が多い印象を受けました。対話の中で、私自身も考えていなかった疑問を提示してもらったこと。
- 研究の質問にとどまらず、その活かし方や産業への波及のさせ方等の議論にまで至ったことがあったこと。
- 自分がどうしてその企画・研究を行っているかなどを来場者から聞かれたこと。立ち返るいい機会になったと思う。
- 医師や弁護士など、学外の専門職の方がご来場されていたこと。専門職ならではのコメントをもらえたことは印象に残りました。
- 私はなぜその問題が生じるのかを検討する基礎研究の立場だが、来場者は生じた問題の解決策を聞きたいのだということが良く分かった。また、自分の研究について哲学的な視点から意見を述べて下さった方の考えが非常に印象深かった。
- 生物学などの研究者や学生から実際に使用したい、などのコメントを頂き、ニーズがあることを再確認できたこと。
- 意外な仕事の人が興味を持ってくれたり、想像していなかった、研究の出口に気づかされる事が印象に残りました。
- 医療のトピックということもあり、来場者の中には何らかの形で実生活で関連のあった方も多かったようです。そのため、こちらからお話する以上に、来場者の体験や思いをうかがうことが多く、まさに対話形式だったかと思えます。こうした感心層住民を集めて、議論する場を設けてみたいと感じました。

● 今後「京都大学アカデミックデイ」開催にあたってのご意見

〈京都大学研究者の声①よかった点〉

一般人との関わり・全体の雰囲気

- 一般の方々が専門的研究のどのような点に興味を持つのかを窺い知れた点。
- 学問の価値や意義、面白さを多くの来場者に伝えることができた点。
- 全般的によかった。参加して良かったと思える企画だった。
- 明るい雰囲気で、よい学的交流の場になっている。
- アットホームな感じで良かったと思う。
- 京大の学生／他大学の学生／違う分野の研究者／企業の人などなどの多様な属性の人と話しをすることができたところ。
- 人手が多くやる気がわきました。
- 小学生から大人まで幅広く参加できるような雰囲気があった点
- 予想よりも来場者が多く、幅広い年齢層の人が興味をもってくれた点
- 来場者は、日曜日にわざわざ難しい話を聞きに来るだけあって、非常に意欲があり、質問も積極的で、その能動的な参加態度に感銘を受けた。
- たくさんの方に来場いただき、たいへん盛況だったと思う。
- 自分の専門についてまったく知らない人に説明することが難しいことが分かってよかった。
- なんとなく、どういう方が研究に興味を持てくださるのが分かった（気がする）こと。
- 十分にぎわった
- 思ったよりも多くの方が訪れてくれたことから、休む間もなく（想定よりも休憩時間を削って）対応することになった。来場者は最先端の科学技術を目当てに来ているのだと考えていただけに意外であり、興味をもってもらえたことは大変嬉しく思った。
- 専門的な知識を持たない方々に説明する非常に良い機会だった。
- 異なる専門の研究者や一般の方々に対して研究内容を紹介するという機会はなかなかなく、貴重な経験ができた。
- ことしも大勢のいろんなひとがきてよかった。
- 様々な世代の人達が集まる場となっていたこと。
- 一般の方に自身の研究を説明する機会がなかなか無いので、ブースの出展側としてもメリットがあった。

企画運営に関すること

- スタッフの熱心な運営

- 本の紹介コーナー
- アンケートとドリンクの仕組みがとても上手いと思った。
- 余計なイベントがほとんどなくて、じっくり話す時間がとれた点。
- ポスターが十分大きかったのがよい。
- 託児室を利用できたところ。
- 報告書に書くことができた。
- 展示スペースに十分余裕があったこと。
- 2012年3月のアカデミックデイに参加しましたが、その時と比べて、事前の説明会や、会場での整理が行き届いているように思いました。特に、アルバイトの方のてきぱちした案内が印象に残りました。
- こちらの負担を軽減できるように様々な工夫をしてくださってとても助かりました。
- 運営側がツアーを組んで、一般参加者を連れて回ったところ（カラスマ大学？）
- 3件の表彰があったこと
- 3年前に参加したが、来場者がずいぶん多くなっていた
- 役員の方が皆親切で丁寧な対応でした。
- また、発表者にドリンクを無制限に提供していただけたのは、非常に助かりました。思いのほか来場者の方が多く、ドリンクがなければ、厳しかったと思います。ブースのスペースもちょうどよかったです。
- 公募制であったので参加することができた。
- 前回参加したとき（2012年2月）よりもポスター数も来場者数も増えて、より盛会になっていると感じました。コンセンサスが用意されて、デモ機を出すことができました。
- 大学のみならず様々なところの研究発表の機会があったこと。
- ちゃぶ台で、タイムキープしてくださったこと。つい夢中でしゃべり続けそうなのを、冷静に交代のタイミングを作ってくださった。
* 客引き？の学生さんもうまくちゃぶ台にひとを誘ってくださったこと。
- 控え室があったのはありがたかったです。
- 飲み物が提供されたり、本の販売を行っているところ。
- 去年より、ポスター間のスペースが十分あったように感じましたが、気のせいでしょうか？説明をしやすかったです。
- 面白い機会でした、ありがとうございます
- 説明会には、わたし自身は出席しなかったが、出席した研究員から、よい説明会であったと報告を受けた。
- 発表の数がかなり多く、様々な分野の発表があり来場者が何かしらの興味を持てる内容になっていた。
- 大枠でいうとお陰様で順調に進むことができたと思います
- 当日は搬入から撤収まで時間に無駄が無く、よく練られたスケジュールだと思いました。
- 素晴らしいイベントだと思います。
- 準備が周到で困ったと感じた事がなかったこと。
- 飲み物を提供していただけるのは、本当に助かりました。
- いろいろな手を使ってPRを行っていた点。
- オープンな雰囲気、スタッフの動きも含め、よく組織化されていて、アウトリーチイベントとして非常に質の高いものだった。
- 給水コーナーは助かりました。
- 机やすい、テーマが貼られたボードが既に準備されており、自分たちは自分たちの持ち物だけ準備・後片付けしたので良かった点。
- 多様な分野から発表を集めることができていた点。
- 事前の宣伝に力を入れていたのが良かった。来場者が興味を持ちそうなチラシやインターネットのサイトが良く作りこまれていたのが良かった。
- スタッフの方の事前準備、発表者への説明が非常に丁寧に行われており、スムーズに運営されていたこと。深く感謝します。
- 世話役の方々がよく頑張ってくれた素晴らしい運営をして頂いた
- 京都大学の研究の多様性を表すいろいろな展示が印象的でした。

研究・研究者との関わり

- 京都大学の研究の多様性を表すいろいろな展示が印象的でした。
- 分野の違う研究者どうしの交流の場でもある点
- 他学部の研究内容を知ることができた点
- 家族が見に来て、研究内容を多少理解してもらえる機会があったこと
- 未知の分野の方の展示などがとても勉強になりました。
- 開催前に他のブースを見る時間があるのはよかった。自分の研究と関連するものについて紹介できた。
- 文系・理系問わず、様々な分野の方が集まって行うことはとても興味深かった。
- 大学院生に発表補助として同席してもらったが、就職活動を控えた彼らにとって非常にいい経験になったと思われる。
- 広報活動の一環としてこの京都大学でのこのイベントはありがたいことだと考えております。
- 水素エネルギーが広く認知され一般に浸透していつてることを確認でき、将来性を感じた。
- 理系の観点から、中国史にアプローチされている方と知り合うことができ、非常に興味深かったです。普段の研究の場では他の研究室の人とほとんど知りあうことがないので、とてもよかったと思います。
- ゲノムという言葉のつながりで設定していただいたのだとおもいますが、ちょうど、ゲノム編集に関しての話題と向かい合わせの展示であったことは、お互いの交流、ならびに、来場者に、そちらの展示を紹介することもできたりして、良かったと思います。
- 普段交流のない様々な方々と交流できたことは、自身の研究の意義を再認識するのにとてもよかったと思います。また交流することで、研究について知ってもらうことが出来るとともに、将来研究したいと思っている学生の皆さんの糧になったのではないかと考えています。
- 上記と同じことになりますが、参加する学会や研究会では、絶対に出会わないかたがたと交流できた点が良かったです。
- 異分野の研究内容を基礎から聞けたことがよかった。
- 多分野が集まっていること。
- 自分の研究の目的・意義を改めて考えるいい機会になった。

〈京都大学研究者の声②改善点〉

駐車場について

- 展示物搬入で車を使うので、駐車場の情報を事前に通知して欲しかった。
- 展示物搬入のため車を利用したが、構内駐車料金のサポートが欲しい。

会場について

- 廊下も利用してもっと活発に出来たらいいですね。
- もう少し会場が広いと良いかもしれませんが、歩くのもやつの場所が結構ありました。
- 場所の広さに比べて出展数が多すぎたと思う。ブース同士が近い＆うるさすぎて、説明がどうしても聞こえにくくなった。
- ちゃぶ台に出た加納先生が、「ちゃぶ台として机を使うときには、四角じゃなくて丸いテーブルがいいかもな～」と言っていました。たしかに、その方が、話に入りやすいかもしれないですね。
- 「ちゃぶ台囲んで膝詰め対話」での参加だったが、混雑してくると、話が聞きづらい場面もあった。かといって、パーティションなどで区切ることで、あのオープンで活気のある雰囲気は損なってしまうのはもったいない。悩ましいところだと思った。
- 本の紹介や販売会場は同一会場内の方が見てもらえるかもしれない。
- 中央部を広く取ったせいか、部屋の両端(西側と東側)の部分は非常に狭く、来場者の通行の妨げになっていたように思う
- ポスター会場は今の形でもいいのですが、ちゃぶ台の会場はもっと参加者間で聞き取りやすい静かな所でできないのでしょうか
- 出展者が多かったのではなかなか難しいとは思いますが、ポスターのレイアウトをなんとか工夫してほしい。壁際に設置場所となっているポスターの前で、通行者との関係でスペースが十分確保できていないところがあった。

- やや混雑した感じがありました。賑やかな雰囲気が出てよいとは思いますが、参加された方の疲れを増したかもしれません。参加者が増える傾向ならば開催場所を考えたほうがいいかもしれません。
- 開催部屋に入ればアカデミックデイが開催していることがわかるが、一般の人から見て開催している場所がわかりにくいと思った。少し敷居が高いかと。
- 多少出店数を絞ってでも、もう少し来場者の方々がゆったりと見て回れるようにポスターを広々と配置した方が良かったと感じた。
- ちゃぶ台に関しては、できれば掘りごたつにしていただけると、ちゃぶ台に集まる方の人数（一度に集まる方の人数）を多くできるように思いました。
- 中央のパネルでしたが、少し、転じスペース等が壁際と比べ、狭く感じた気がします。もう少し、ゆったりしていたら良いのですが、展示が多いと、難しいのですね。あくまで、感想です。
- 出展者がおおくスペースが多少狭く感じた。
- 大勢の人が一堂に会するので、部屋の空調・温度を考えて欲しい。

時間について

- お互いの研究を知るための時間が少なかった
- ちゃぶ台対話において、およそ 30 分ごとと伝えられていた時間の区切り方が、実際には非常に曖昧だった点。おそらく来場者には時間の区切りの目安が伝えられておらず、その結果、聞きたくても話の途中から入ることをためらい来場者が去ってしまったり、逆に話の途中から来場者が参加して時間内に伝えたいことを伝えきれない、といった事態が生じてしまった。もちろん自分の能力不足が主たる要因であるが、主催者側でも何らかの工夫をしていただけだと、より効率的に対話できると思う。
- ぼくだけかもしれませんが、大変疲れました。一人で 30 人も対応したので、来てくれてうれしかったのですが、その後喉の痛みは三日も続きました。4 時間に短縮してほしいです。
- 9 時の会場からの準備の時間がやや短い。
- 開催時間が長く、二人だけで運営していたため、ほとんど休みが取れませんでした。
- 休み時間を設けてくれればと思います。
- 発表者向けの集合時間は 9:00 ではなく 9:20 あるいは 9:30 でもよかったのでは。
- 9:00 には発表者受付もほとんど用意されておらず何もできない状況であった。
- 建物を解錠する時間がもう少し早ければ有り難い。
- お昼休憩時間は統一して 12 時から 13 時まで、会場を閉めるなどの形できちんとした方が良い。来場者が来ても発表者がいなかったり、ひっきりなしに来場者の対応をして発表者がお昼ご飯を食べる時間がなくなったりということはない方が良いので。
- ポスター発表の時間が長すぎるのではないか。
- 時間が長い。
- 時間が長いというか、途切れないために、非常に疲れる。グループで参加していたとしても、かなりつらい。
- 研究者本人がいないと説明できないものもあり、休憩時間がほとんど取れなかった（盛況だったのはよかったのですが）課題があります。
- 昼食休憩はとりましたが、それ以外にもコーヒープレークタイムと称して明示的に休憩タイムを挟んでももらえれば、休憩しやすいなあと思いました。適宜休憩とっても間断なくこられると取りづらいので。
- ポスター発表時間が、やはりあまりにも長すぎて、少人数の発表体制では、相当に疲労する。この辺り、個人や少人数の分野では参加しにくくなるのではないかと思う。昼食時間は全員で一斉に取るなどして、もう少し休憩時間を明確にしたほうが良い。現状では、他の発表の中自分のところだけ休憩というわけには行かず、非常にとりにくい。
- 建物を解錠する時間がもう少し早ければ有り難い。

来場者について

- 来場者の方にも名札があるといいなと思った。
- もっと高校生・中学生に来てほしい。そのための広報をすべき。
- 政策的内容を含む展示だったため、面倒な一般来場者が来られて（右翼的な方、韓国の犯罪（慰安婦問題）について糾弾すべきだと強く主張された）、ヘルプを求めるために手を挙げたのですが、助けてもらえなかった（幸いにもその方は早く去られたので良かったのですが）、もう少し見回りの担当者を増やすなり、そういった方が来そうなブースは見張りがしやすい場所に配置するなりしたほうが良いかもしれません。

- 高校生や中学生の来場者が少ないように感じた。市内の学校への宣伝活動をさらに積極的に行ったほうが良いと思う。

展示コンテンツについて

- 参加者へ持ち帰ってもらえるような展示品を出せるよう、展示者への予算的措置（数万円程度）を考慮しても良いかと思えます。
- 学内で A0 のカラーコピーは可能だったのでしょうか。もし、無料のカラーコピーができたのであれば、説明会の時点で場所なども含め、レジュメで明示していただけたらありがたい。
- 個人的にもう少し大きなモニターが必要だったかもしれない
- 事務局で用意してくれたタイトルの色調（今回は橙色）を予め教えて頂いていると、自分たちのポスターを作る時の色調を合わせるのに役立つと感じた
- ポスター印刷に苦労した人（普段ポスター発表を行わない分野の人）がいたようなので、印刷のやり方についても案内したほうが良い。

賞について

- 大学のイベントで高校生が大賞というのはどうかと思うので、高校生の参加をもう少し増やして、高校生部門の賞を作ったらいと思う。
- 発表賞は、高校生を別に設けた方がよいと思う。
- 賞の選出方法（3 つの内 2 つが高校生の受賞であった）
- 京大アカデミックデーなのに、高校生が賞を取っていく点に違和感を覚えた
- 高校生は高校生の中でコンペをすべきではないか
- 表彰システムが、ちゃぶ台班に不利なものになっているかもしれない。
- ちゃぶ台対話企画は受賞のチャンスがなさそうなのが残念。

広報について

- アカデミックデー開催を知らない人が周りにたくさんいました。インターネット、新聞折込など多様な広報が必要かも。
- 時計台の入口にはもう少し派手な立て看板があっても良いと思う。
- ウェブそのほかによる、広報をもっと早くから始めた方がよい。ウェブ上では、発表者募集のページが目立ちすぎ、メインページが目立っていないように感じた。
- 11 月祭のようにほかの大学全体の催しと同時開催した方が宣伝費や動員数で効果が高い。
- サイトに発表の情報が載るさい、順次増えていくののだが、一挙に公開したほうが良い。最初の方にサイトを見た人は発表数を少なく見積もってしまうし、発表者にとっても宣伝時間で差がつくのでアンフェアに感じる。

参加者について

- ごく一部ですが、いやいや出ているような院生が目につきました。これは指導にかかる問題と思いますが、そうした構造
- 出展参加者に入っていない人が発表しており、本人はいないというポスター発表がみられた。アカデミックデイとしてどのように考えるかは分からないが、一般には宜しくない状況だと感じる。発表自体は面白いものだと思うものの、学生の研究を教員の名前のみで発表することにも違和感があった。共著のルールと同様に発表の連名のルールも参加希望者に説明すべきだと考える。
- 写真を撮影し、SNS で広めたいと仰るおご年配の来場者がいて、対応に困った。

撤収について

- ブースの撤収がまちまち

飲み物などについて

- 最後にビールをいただけるのはありがたいのですが、他のお酒も用意していただけるとありがたかったです
- 飴や小さなお菓子があると、ちょこちょこつまめてありがたいです（次回は持参しようっと）。

- 給水コーナーに、飴やプチお菓子があるとありがたいです。
- ランチを採るのを忘れて話し続けるくらい盛り上がりまして、のどをやられました…。

企画形態について

- コストパフォーマンスはすごく悪い。かなり見てもらったとはいえ、5人で対応して話せたのは、せいぜい50名というところではないか。研究者の時間を1日拘束する発信方法としては効率が悪いというべきだ。
- 話せる人数が限られてしまうので、講演会のような形の方がやりがいがあるという感じはあります。発信の形態のひとつとしてはよいのですが、立ち止まってくれた人にだけ語りかけるところに限界を感じます。
- 家族に連れられ小学生も来ていたので、この年齢対象の何かがあるとよりよいかもしれません。
- 展示パネルの数が多く、全てを拝見することができませんでした。外観からの推測ですが、研究成果はまだ紹介ができず研究紹介にとどまっている場合は、別途、「ご紹介コーナー」を設置してはどうでしょうか？「京都大学では、こんな研究にも取り組んでいます」というアピールになるでしょうか？

パネルについて

- 掲示の壁に画鋸が非常に刺さりにくかったように思います。
- ボードへのピンの差し込みが硬い。

開催日時について

- 今回の開催日時は妥当だったのか？と思っています。10月に入ると、とたんに運動会等の活動が週末にあるので、来場者の層が制限されるように感じます。開催日の吟味をお願いしたいと思います。

〈京都大学研究者の声③このような来場者ともっと話したい〉

外国人

- 外国の方にも来やすいイベントですね。院生には英語の鍛錬にもなろうかと思っています。
- 外国の方は、日本人とは異なる視点、感覚、アイデア等を持っているので、外国の方との対話に興味がある。
- 京都の在住の外国人にもアピールしてもいいのではないのでしょうか。
- 外国のかたにも来やすいイベントを希望します。
- 海外の人や、大学生以外の人にもっと来てほしい。
- 外国の人とも交流できれば尚良い。
- 異文化交流もできたらいいなと。

大学生

- あと、優秀な大学院生への周知のきかいとして、大学生がもっときてくれるとよいです。
- 大学生、大学院生に来てもらいたい
- 学部生にもっと参加してもらいたい。
- 京大の学部生の方に来てもらいたい。
- 特に、京都大学1～2年生にむけて、周知してもらえれば、ありがたいです。
- また大学生には先端の研究を知る非常に貴重な機会であるから、全学的なあるいは他大学へのポスター配布など宣伝も必須と思う。
- 学生さんも、何名かきてもらいましたが、意外とすくなくとかんじました。本来は、学外のかたが中心とはおもいますが、もっと内部の大学生の方も、きてくれるとよいなとは、感じました。
- 京都市内の大学を巻き込んでいいのではないかなと思う。
- 本学の学生にもう少し来て欲しい。
- 若い人は京大生が多い印象だったので、他の大学の学生や、高校生、中学生などがもっと来てくれると良いと思います。
- 大学生、高校生。
- 京大生にもっと多く来てもらいたい

- 開催時期に変更がないなら、次に院試を受ける学部3回生に来てもらいたい。
- 大学生は多く来てもらったと思う。

中高生

- 中学・高校生に、もっときてもらいたい。そのための広報をすべき。
- 中高生。
- 高校生の割合がもう少し増えると良い
- 中学生、高校生に今以上に来てもらえるようになればよりいいのでは、と思います。
- オープンキャンパス並みに高校に宣伝してもいいのでは？ある意味、オープンキャンパスよりわかりやすいイベントになっている。
- しかしながら、大学での研究ですので教育への普及は全員共通のテーマでもあると思うので、高校生や大学生の来場者も増やして良いと思います。
- 高校生がもう少しきてくれたらよかったな、と思いましたが、我々のポスターが難しそうだったからかもしれません。
- 京大に興味のある高校生に来てもらいたい。
- 中学・高校生も来てくれたらいいなと。

関心層

- ぱりぱり関心層です！じゃない人も巻き込みたいけれど、きっとこれからも難しいですね。きっと。

小・中学生

- 近辺の小中学校に呼びかけて欲しい
- 小中学生に京都大学への魅力をより感じてもらえるようにして、将来の人材育成に生かせればいいのではと考えます。

現状維持

- いまのままでいいのではと思います。

社会人

- 社会人の人（30～40代）。
- 政治家
- 同世代（30-40代）の方（研究者でない方）
- 小中高校の先生方
- 20-40歳代で、研究者以外の人、とくに男性に来てほしい。対応していて感じたのは、リタイヤ世代や女性が多い感じがする

研究者

- 他の大学の研究者

その他

- 研究テーマによって、「来てほしい」あるいは「聞いてほしい」来場者の対象が異なると思います。
- 酒を飲みながらお互いに話せるようなイベントがあると嬉しい
- 私たちが一番関心があるのは、知識がない人に対してどれだけアピールできるかであると思うので。
- 一般の人との交流イベントの経験豊富な人がどのようにやるのかを知りたい。
- 小さな子供や子供連れ向けであることを明確にした出展形式があってもよいと思った。
- 小学生くらいが親子連れで楽しめる企画や場所があっても良いかもしれない。

3-3. 京都大学アカデミックデイ賞

「京都大学アカデミックデイ」では、出展研究者に贈られる「京都大学アカデミックデイ賞」を設けています。賞を設けた理由は、こういった活動に参加し、さらによりよい対話を目指した研究者が評価される（価値をつけられる）仕組みを作ることです。今後、研究活動の一環として「国民との科学・技術対話」活動が普及・定着すること、また活動が研究者にとって負担にならないことを目指し、試みを始めた企画です。

来場者アンケートの中に、こんな質問を設けました。「本日の『ちゃぶ台囲んで膝詰め対話』と『研究者と立ち話』の中で、あなたがよかったと思うのはどの出展ですか？もしその出展になにか「賞」をプレゼントするなら、どんな名前の賞にしますか？」この質問で一番コメントを多く集めた出展研究者が、今年度の「京都大学アカデミックデイ大賞」の受賞者です。また二番目、三番にコメントを多く集めた出展研究者には「京都大学アカデミックデイ賞」が送られました。

■ 3-3-1. 2015 年度「京都大学アカデミックデイ賞」受賞者

● 京都大学アカデミックデイ大賞

出展名：「毒キノコはお暑いのが好き！？」

兵庫県立御影高等学校 環境科学部生物班



受賞者へのインタビューと出展ポスターを以下のサイトで公開しています。

<http://research.kyoto-u.ac.jp/academic-day/2015/20/>

● 京都大学アカデミックデイ賞

出展名：「いい対話ってどんな対話？」

出展代表者：水町衣里（京都大学物質－細胞統合システム拠点）



出展名：「クマムシの肢は歩くためのものか？」

京都府立木津高等学校 科学部



■ 3-3-2. アンケートの上位の展覧

来場者からの賞についてのアンケートでコメント数の多かった上位 12 件は以下の展覧でした。

「毒キノコはお暑いのが好き!？」兵庫県立御影高等学校 環境科学部生物班	
・たくさんのキノコをよく集めたで賞	・たくさんのキノコを見せてくれてありがとう賞
・標本が充実してたで賞	・若い人の将来に期待がもてたで賞
・高校であんなことをやってみたい!賞	・これからも研究をがんばって欲しいで賞
「いい対話ってどんな対話？」出展代表者 水町衣里（京都大学物質－細胞統合システム拠点）	
・ステキな対話でしたで賞	・いい対話とは何か考える機会をくれたで賞
「クマムシの肢は歩くためのものか？」京都府立木津高等学校 科学部	
・クマムシ愛があふれていたで賞	・仮説をもっと世間へ公開してみてもうで賞
「重力波がひらく新しい物理 2015」出展代表者 田中貴浩（理学研究科）	
・人類の英知で賞	・無限の夢にあこがれる賞
「ニュートリノで解く宇宙の謎」出展代表者 潘晟（理学研究科）	
・宇宙の根源がわかるで賞	・宇宙の神秘を解明するのは君達で賞
「水と環境をまもる森の働き」出展代表者 谷誠（農学研究科）	
・水は大切に賞	・お水おいしく飲めるで賞
「イワガキの赤ちゃん捕まえる大作戦!!」京都府立海洋高等学校 海洋科学科	
・イワガキブランディング戦略賞	・京都の水産業をまかせた!で賞
「赤ちゃんを産む!魅惑の胎生魚ワールド」出展代表者 飯田敦夫（再生医科学研究所）	
・生命の不思議で賞	・胎生魚!新しい発見でしたで賞
「バルクナノメタル:常識を覆す構造材料」出展代表者 辻伸泰（工学研究科）	
・新素材開発頑張ってるで賞	・丈夫なアルミを作りま賞
「アフリカと共に生きる」出展代表者 重田真義（アフリカ地域研究資料センター）	
・アフリカに行ってみたくなったで賞	・アフリカと共に生きま賞
「バイオナノトランスポーター」出展代表者 秋吉一成（工学研究科 ERATO 秋吉バイオナノトランスポータープロジェクト）	
・未来を感じたで賞	・実用化期待してるで賞
「経験・信頼価値の脳科学的アプローチ」出展代表者 原良憲（経営管理研究部）	
・脳の可能性は∞で賞	・経験の可視化は大変面白かったで賞

4. 出展者情報

以下、各出展の「〇〇〇で賞」は、来場者のアンケート用紙に設けた質問「あなたがよかったと思うのはどの出展ですか？もしその出展になにか『賞』をプレゼントするなら、どんな名前の賞にしますか？」の回答の中から特徴的なものを標記しました。各出展のポスターやその他の写真はアカデミックデイ 2015 のWEBサイトでもご覧になれます (<http://research.kyoto-u.ac.jp/academic-day/2015/>)。

4-1. 研究者と立ち話（ポスター／展示）

01

「ニュートリノで解く宇宙の謎」

潘晟（京都大学大学院理学研究科）



宇宙の根源がわかるで賞

なぜ現在の宇宙に反物質がほとんど存在せず、物質だけが残っているのでしょうか？これは現在の物理学における最大の謎の1つです。そして、“お化け粒子”ニュートリノの性質を調べることがこの謎を解く鍵になるだろうと考えられているのです。



02

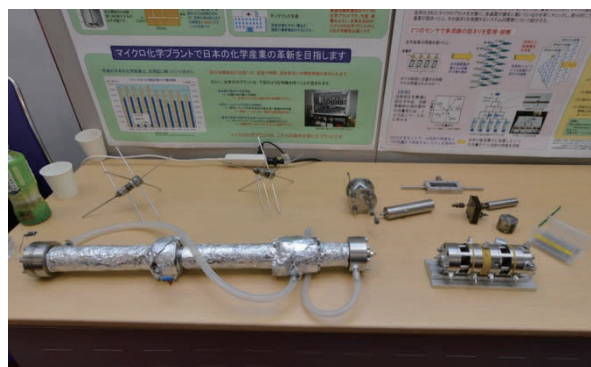
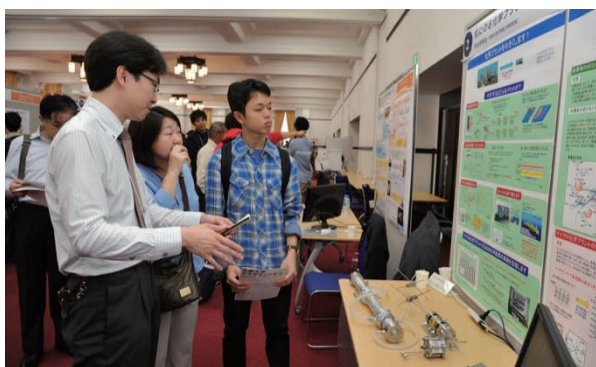
「机にのる化学プラント」

長谷部伸治（京都大学大学院工学研究科）



たくさん気づきがあったで賞

現在、日本の化学産業は構造改革を迫られています。私たちは、製品品質を厳密に制御しつつ飛躍的に高効率な生産ができるマイクロプラントが、次世代の化学産業を担う技術と考え、その設計法や操作法に関する研究を行っています。



03

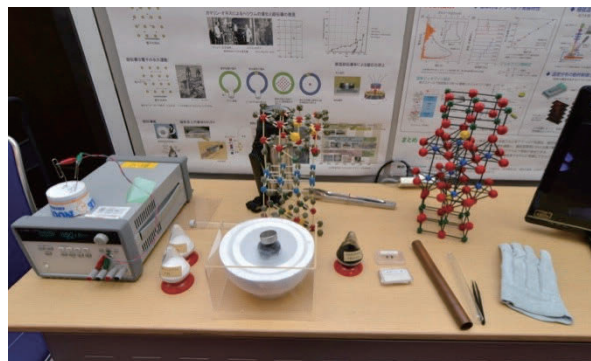
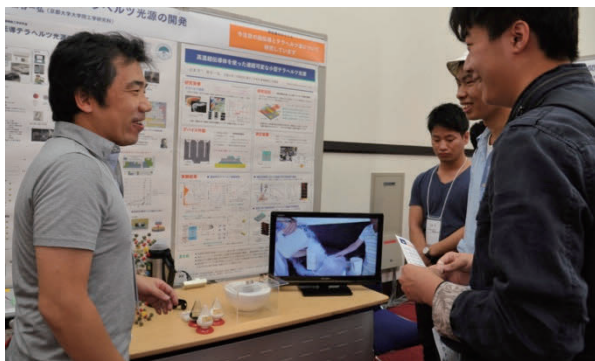
「高温超伝導テラヘルツ光源の開発」

掛谷一弘（京都大学大学院工学研究科）



超伝導目の前で見られて嬉しかったで賞

私たちは、超伝導体を用いて、テラヘルツ波が発振するデバイスを作成しています。この開発の背景と応用先には、様々な自然現象が含まれています。リニアモーターカーに使われている超伝導、ホタルが一齐に明滅する同期現象、非接触の超高速通信などです。いずれも、未来の生活を便利にできる不思議な現象です。これらの現象について、興味のある方をお待ちしております。



04

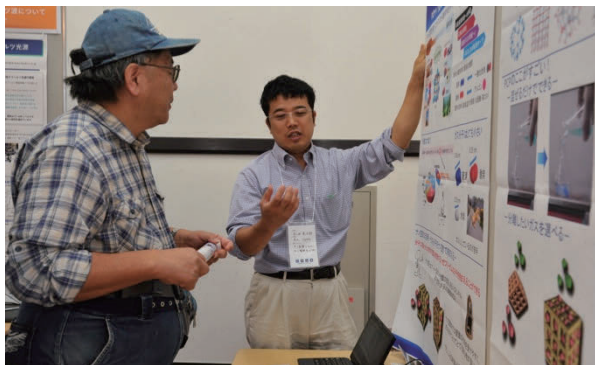
「ナノ空間の世界と化学」

北川進（京都大学物質－細胞統合システム拠点）



将来有望で賞

物質に囲まれた空間をナノサイズまで小さくすると、どうなるでしょうか？実は目で見える空間とまったく性質の異なるナノ空間の世界があります。私たちは、化学の力を使って、自在にナノ空間の世界を作ることができるにしました。ナノ空間の世界を活用し、環境やエネルギー分野に貢献する物質を作る研究をしています。



05

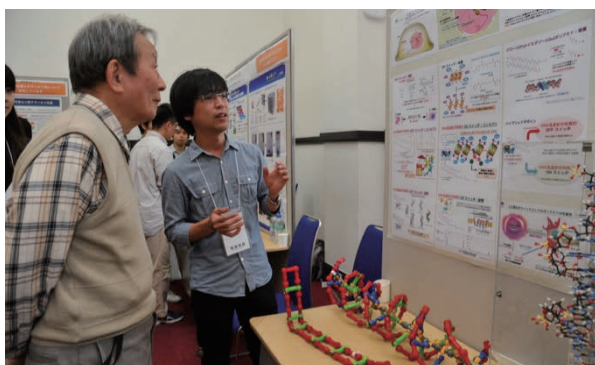
「人工遺伝子スイッチを創る」

杉山弘（京都大学物質－細胞統合システム拠点）



このような研究がしたいで賞

私たちのグループでは、DNAの塩基配列を認識するN-メチルピロール-N-メチルイミダゾール(Py-Im)ポリアミドと様々な分子のコンジュゲートを用いて、任意の遺伝子の発現を制御する人工遺伝子スイッチの開発を目指しています。



06

「酵素反応はどこまで正確か？」

滝田 禎亮（京都大学大学院農学研究科）



教授（？）が酵素を最も愛しているで賞

我々が日常生活でおかすミスに比べれば、酵素反応はきわめて正確です。しかし、ミスが全くないわけではありません。酵素反応の正確性をテーマにした基礎研究と応用研究を紹介したいと思います。



07

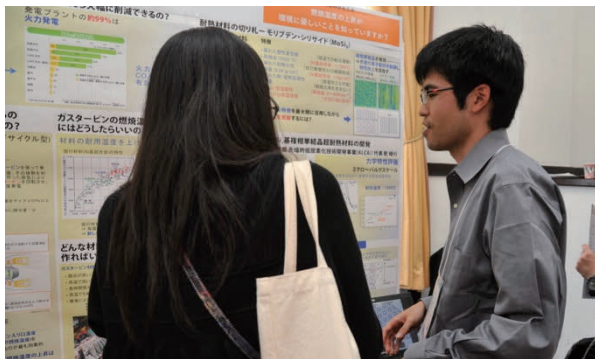
「炎を制する一超耐熱構造材料」

乾 晴行（京都大学大学院工学研究科）



がんばれがすタービン賞

高融点、高温強度に優れた MoSi₂ 基軸材料と他のシリサイドからなる Brittle/Brittle 複相材料(融点約 2000℃)中の界面の高機能化により、高温高強度、高靱性を兼ね備えた 1800℃級ガスタービンで使用可能な超耐熱材料の開発を目指しています。



08

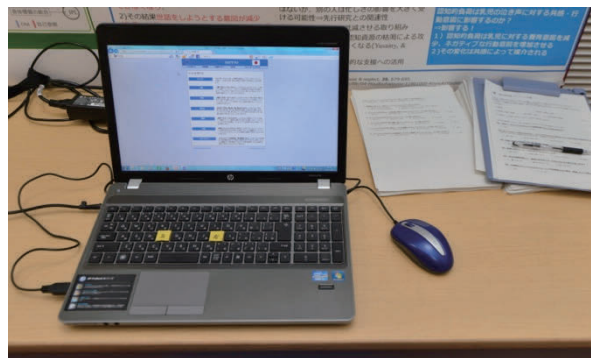
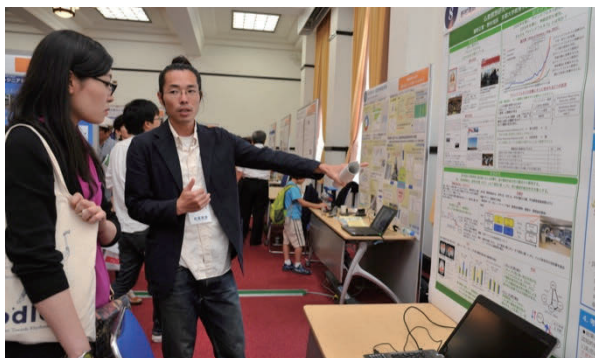
「紛争の解決にむけた心理学のアプローチ」

野村 理朗（京都大学大学院教育学研究科）



人間は環境と意識で変わるで賞

心理学の英知は多くありますが、これを紛争の予防・解決に活かせるのでしょうか？例えば、夫婦間の軋轢、人種間の葛藤、それらを乗り越えるべく私たちにできることは何か？心理学を中心に、神経科学、遺伝学も手がかりとしながら、人間を総合的に捉え、考えてゆきます。



09

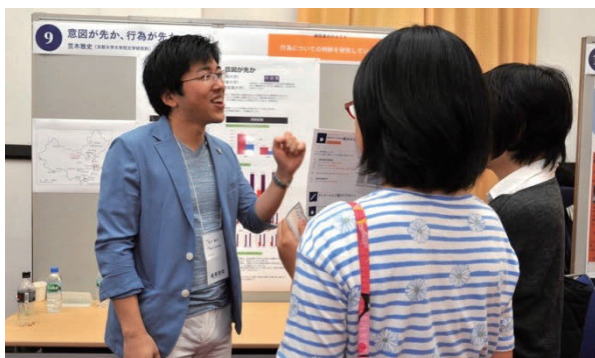
「意図が先か、行為が先か」

笠木雅史（京都大学大学院文学研究科）



その分かりやすさ意図的で賞

ある行為が意図的だという判断を我々はどのように行っているのでしょうか。この研究では、意図と行為の関係について、どのように西洋人と東洋人が判断しているのかを調べて、比較します。



10

「目を背けたい世界の大規模犯罪のその後」

越智萌（京都大学大学院法学研究科）



もっと世界に目を向けよう賞

世界では、ジェノサイド、テロ、人身売買といった大規模犯罪が、国境を越えて行われてきました。普通の犯罪とは違う、さらにおぞましい犯罪に立ち向かう、処罰や被害者救済の国際的な制度の発展等について紹介します。



11

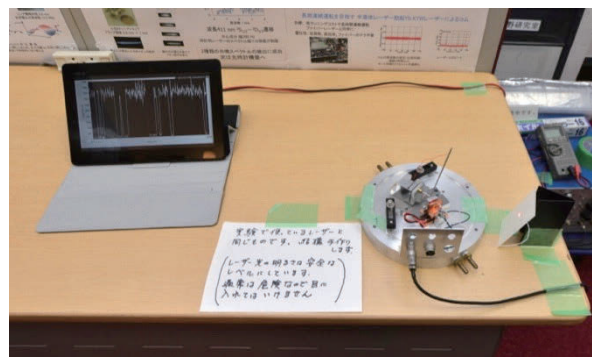
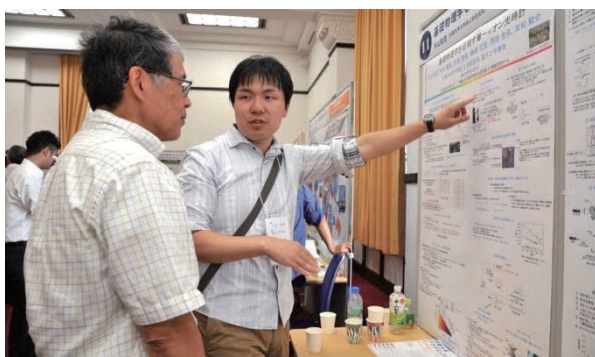
「基礎物理学を目指す単一イオン光時計」

杉山和彦（京都大学大学院工学研究科）



1秒は奥が深いで賞

現在最も正確な時計は、原子が共鳴する光の周波数を1秒の基準とするものです。しかし、現在の物理理論では説明できない現象をも説明可能とする新しい理論では、その基準が時間変化する可能性が指摘されています。私たちはきわめて正確な原子時計を複数作って進み具合の違いを精密に測定し、時間変化検出を目指します。



12

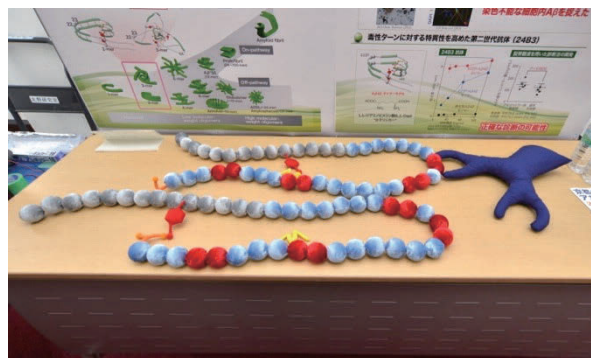
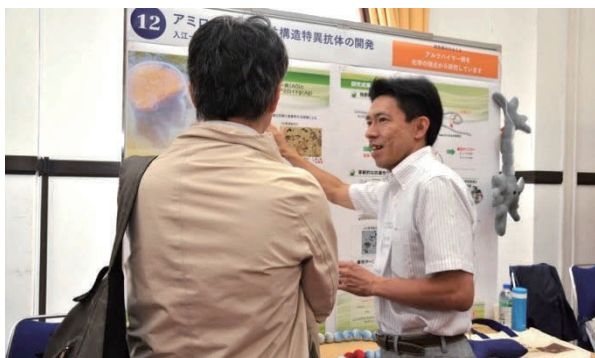
「アミロイドβの毒性構造特異抗体の開発」

入江一浩（京都大学大学院農学研究科）



役に立っているで賞

アルツハイマー病の原因物質であるアミロイドβは、凝集することによって神経細胞毒性を示す。本研究代表者は、アミロイドβの毒性を示す立体構造を化学的手法によって明らかにし、その毒性立体構造を特異的に認識する抗体を開発した。本抗体は、アルツハイマー病の診断・予防に役立つ可能性がある。



13

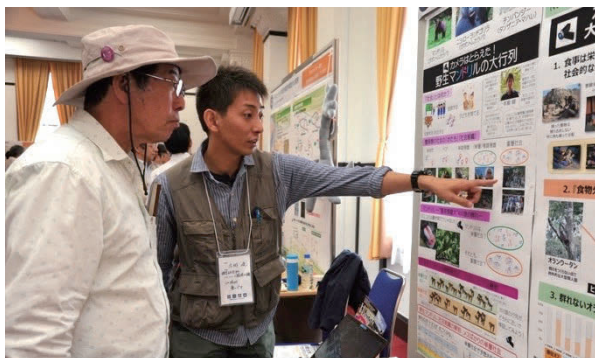
「映像が捉えた野生霊長類の変った生態」

中川尚史（京都大学大学院理学研究科）



猿人類おもしろい賞

1948年に京都大学で始まった日本の霊長類学。以来、世界各地で様々な野生霊長類を対象に調査が行われてきましたが、まだまだ新しい発見があります。今回は、われわれの研究室の最近の発見のうち、いっぷう変わった彼らの生態について、映像記録のあるものを中心に披露したいと思います。



14

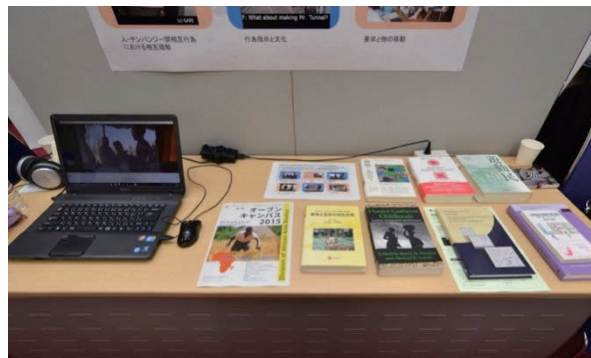
「教えること、学ぶこと：人類学の挑戦」

高田明（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科）



「へえ！」がたくさんあったで賞

本研究は、「相互行為の人類学」というアプローチからアジア・アフリカ諸国で（1）リズム、（2）模倣、（3）交換に関する養育者－子ども間相互行為のデータを収集し、子どもの教育・学習が成立する基盤を再考するものである。



15

「顕微鏡と数学で生命の謎に挑む」

松田道行（京都大学大学院医学研究科）



数学と生物つなげたで賞

最先端の顕微鏡を使用して見えてきたダイナミックな細胞や組織の様子を紹介します。また、顕微鏡のデータをもとに細胞をコンピューターシミュレーションし、薬の評価をする研究も紹介します。



16

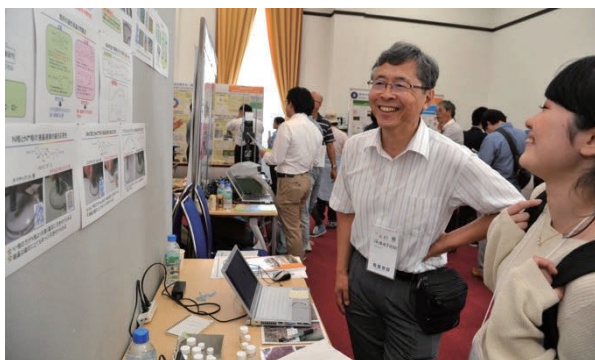
「磁石に応答して動く有機液晶物質の発見」

田村類（京都大学大学院人間・環境学研究科）



磁石に応答して動く有機液晶物質の発見賞

弱い永久磁石に応答して水面上を自由に動く一連の有機ラジカル液晶物質の合成に世界ではじめて成功した。この物質が液晶状態の時にのみ、低磁場中で大きな強磁性的相互作用が発現することを明らかにし、この複雑系現象を「磁気液晶効果（Magneto-LC Effects）」と命名した。



17

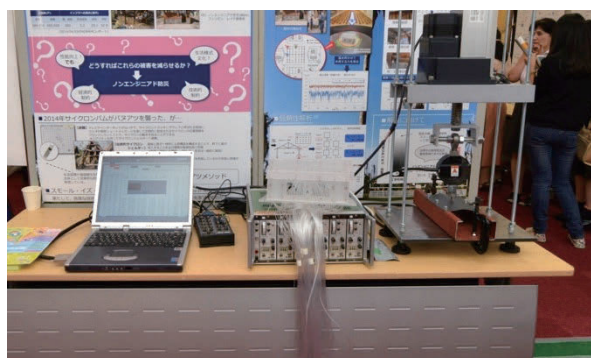
「ノンエンジニアド防災って何？」

西嶋一欽（京都大学防災研究所）



意外な防災術賞

世界中で自然災害に見舞われている建物の多くは、きちんと設計や施工されずに建てられた住宅です。このような建物をノンエンジニアド建築といいます。世界レベルで災害を低減するためには、ノンエンジニアド建築の被害をいかに低減するかが重要な課題です。



18

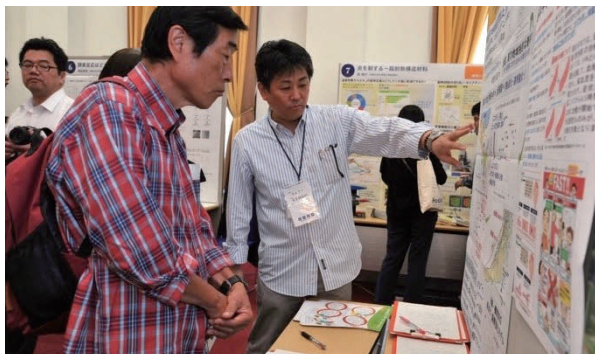
「医療の質の地域格差を考えよう」

今中雄一（京都大学大学院医学研究科）



医療格差をなくしま賞

わが国では、皆保険制度により、いつでもだれでも等しく医療を享受することが出来ると考えられています。実際には、医療の地域格差は歴然として存在することがデータにより明らかになってきました。こうした問題に対し、どうあるべきか、どんな解決策や障壁があるかについて、みなさんと一緒に考えてみたいと思います。



19

「果樹のライフサイクル研究の最前線」

田尾龍太郎（京都大学大学院農学研究科）



温暖化に負けないで賞

果実生産に深く関わる果樹のライフサイクルと生殖生理機構について、特に京都大学農学研究科果樹園芸学研究室で研究テーマとして取り組んでいる自家不和合性や雌雄異株性、そして冬芽の休眠性を取り上げて、ポスター等を用いてわかりやすく説明したい。



20

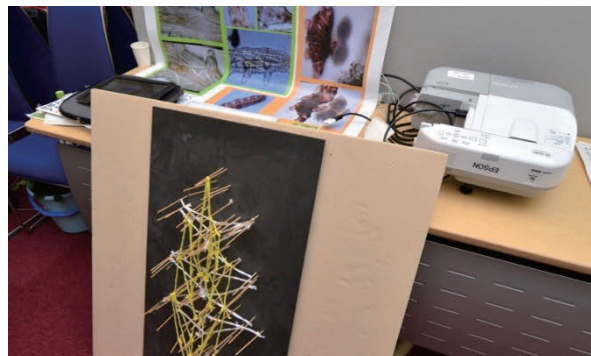
「クマムシの肢は歩くためのものか？」

京都府立木津高等学校 科学部



クマムシ愛があふれていたで賞

クマムシの肢は歩行以外の役割があると仮説した。肢内は体液で満たされ、体軸方向へ伸縮を繰り返し、肢を起点とする体液流動も確認した。この体液流動が、乾燥耐性獲得の際に体内水分量を調節する重要なポイントを握っていると考えている。



21

「ゲノム編集の倫理について考える」

児玉聡（京都大学大学院文学研究科）



答えのない問題は難しい賞

このごろ、「ゲノム編集」という言葉が新聞やテレビでよく取り上げられています。この技術は今後われわれの食べる物や医療のあり方などに大きな影響を与えることが予想されます。いったい、どのような倫理的問題があるのでしょうか。また、どのような規制が必要となるのでしょうか。国民の合意をとるのが難しいこれらの問題についてわかりやすく解説し、みんなで一緒に考えてみたいと思います。



22

「ゲノムの中から薬づくりの道具を探す」

佐藤文彦（京都大学大学院生命科学研究科）



光る DNA 賞

植物は、様々な薬用成分を作っています。昨年は、植物細胞や、微生物で効率的につくる方法について紹介しました。今回は、効率的に作るための道具（合成酵素遺伝子）を見出す方法について紹介します。



23

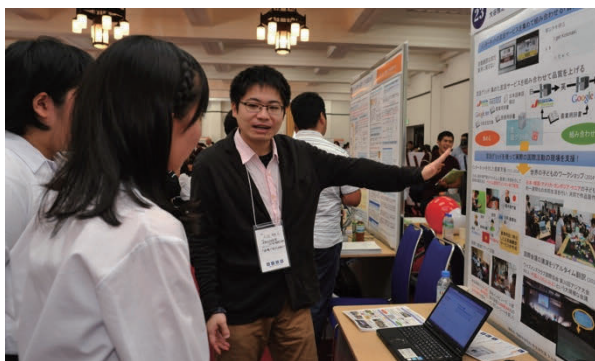
『言語グリッド』で国際協力！

大谷雅之（京都大学大学院情報学研究科）



これから世界へはばたいていくで賞

インターネット上の翻訳機や辞書を組み合わせる「言語グリッド」は国際化社会における言葉の壁の問題を解決するために開発されました。この発表では、実際の国際協力の現場で言語グリッドを利用した研究事例を紹介します。



24

「多言語 DB で日本と ASEAN を結ぶ」

大野美紀子（京都大学東南アジア研究所）



言語もっと知りたいで賞

新聞、雑誌は、その国の社会を映し出す貴重な資料です。この取り組みでは、日本と ASEAN 諸国の図書館員・研究者が機関や国を超えて協力し、東南アジア地域の新聞・雑誌目録データベースを構築し、資料情報を共有するシステムを起ち上げようとしています。



25

「骨は水から作られる～生物の営みに学ぶ」

数塚武史（京都大学大学院エネルギー科学研究科）



高齢者社会に役立つで賞

自然界を見渡すと、セラミックスの中には高温を必要とせず、骨や貝殻のように水から作られるものがあります。私たちはこのような生物の営みに学んだ手法で、骨に含まれるセラミックス成分を人工的に作り、骨と強く結合する人工骨や、からだになじみやすい薬のカプセルを開発しています。



26

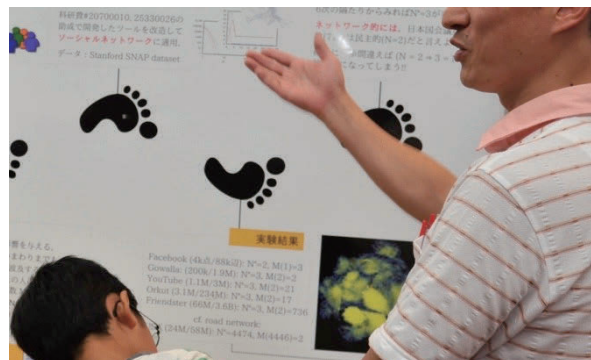
「ネットワークで見る独裁と民主の差」

趙亮（京都大学大学院総合生存学館）



人の影響力の大きさにビックリ！賞

人がまわりの人に影響を与える。波及でまわりのまわりまでも影響を及ぼす。一般に N 隔たりまで波及すると仮定し、50%以上の人に影響を与えるために必要最小限の人数 $M(N)$ を調べる。 $M(N)=1$ 、つまり独裁の時の N をネットワーク科学のツールで求め、民主主義 ($N=1$) との差を比べる。



27

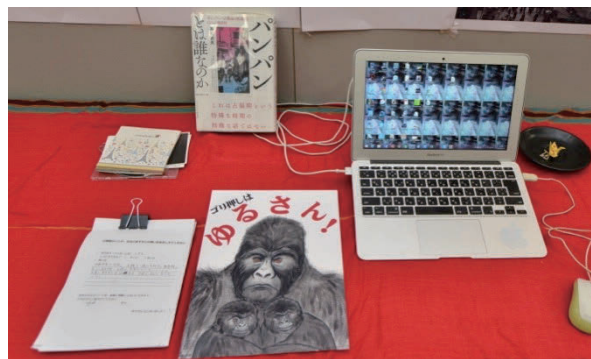
「占領期二都物語京都・神戸の平和と人権」

茶園敏美（京都大学アジア研究教育ユニット）



普段自分では考えにくいだけに重要な研究で賞

かつて京都と神戸に米軍基地があったことをご存じですか？たとえば京都大学周辺の占領期のお話。神戸のルミナリエの開催場所周辺の第2次世界大戦中と占領期のお話。戦後70年。今一度平和と人権を共に考えましょう。



28

「小さな磁石を用いたメモリーデバイス」

キムカブジン（京都大学化学研究所）



説明が丁寧で賞

情報の記録のためには、メモリーデバイスが必要である。現在までは、ハードディスクなどが大容量のメモリーとして使われていた。しかしながら、技術の発展とともに、超高容量、超高速のメモリーデバイスが必要となっている。本ポスターでは、次世代メモリーデバイスの一つである、新規磁壁メモリーデバイスを紹介する。



29

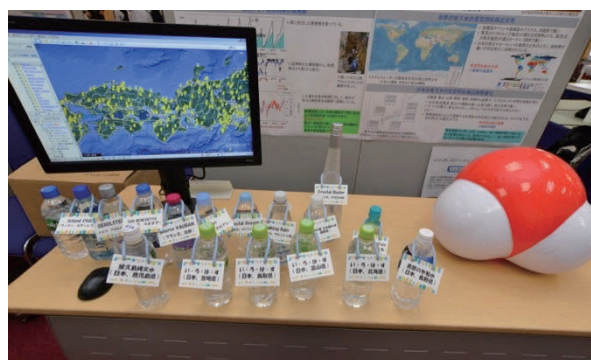
「水と環境をまもる森の働き」

谷誠（京都大学大学院農学研究科）



水は大切に賞

森林には水や環境をまもる働きがあると言われていますが、科学的にこれらの働きや限界を調べるのが大切です。タワーを使って森林が大気と水蒸気や二酸化炭素を交換する様子をモニタリングしたり、ミネラルウォーターを集めて地下水のルーツを探る研究を紹介します。



30

「京大での学びをより充実させるために！」

前田有輝（京都大学工学部物理工学科／京大生協学生会）



一緒に学びま賞

「X-academy～一緒に学ぼう！プロジェクト～」は2014年から始まった京大生協の新入生向け企画です。この企画は先輩の「もっとこうしておけばよかった・・・」という経験をもとに、年7回のイベントを通じて様々な「ヒト・モノ・コト・知識」に出会い、「みんなで一緒に」京大での学びを充実させることを目的としています。「京大での学び」に関する意見交換、企画へのご意見、はたまたご登壇のお願い、様々な点で交流をしたいと思っています！



31

「アフリカと共に生きる」

重田真義（京都大学アフリカ地域研究資料センター）



アフリカに行ってみたかったで賞

アフリカで研究をするということとはどのような意味があるのか。実践的な地域研究という方法を通じて、研究者がアフリカの人びとと関わり、「共に生きる」ことは可能なのだろうか。地域にある在来の資源を活用して、外からの支援に頼らずに発展をめざすことにはどのような困難があるのだろうか。これまでエチオピアの農村で10年にわたって実施してきた地域研究の成果をみなさんと共有したいと思います。



32

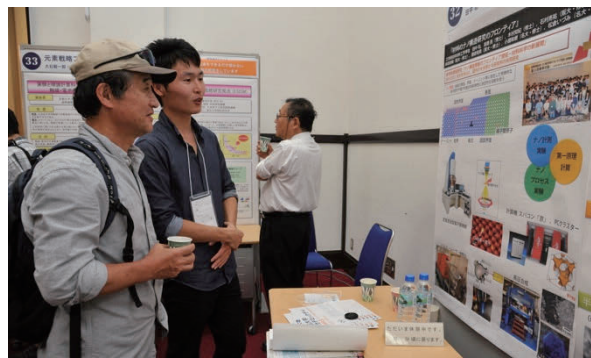
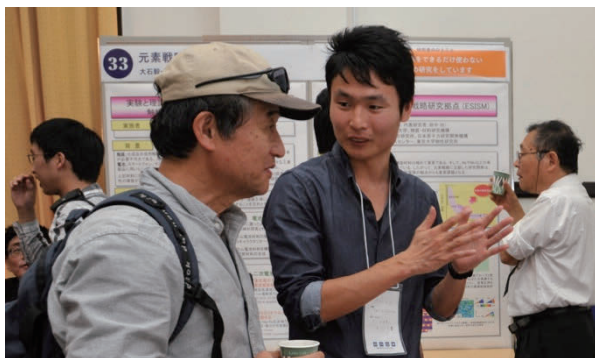
「材料のナノ構造研究のフロンティア」

田中功（京都大学大学院工学研究科）



ていねいな説明でわかりやすかったで賞

結晶のなかで原子は整然と並んでいますが、ところどころで原子レベルでの乱れが生じています。これを的確に利用すると、環境やエネルギー問題を解決する革新的な材料開発が可能になります。その最先端をお見せします。



33

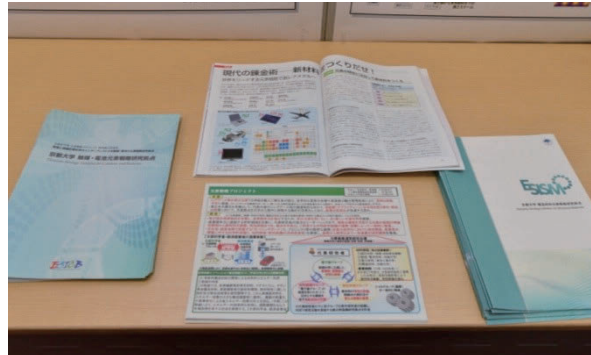
「元素戦略プロジェクト」

田中庸裕（京都大学実験と理論計算科学のインタープレイによる
触媒・電池の元素戦略研究拠点）
田中功（京都大学構造材料元素戦略研究拠点）



世の中のためになるで賞

「元素戦略」耳慣れないことばだと思いますが、今、世界中から注目されているプロジェクトです。京都大学では2つの研究拠点を設置し、産官学が密接に連携して研究を行っています。その取組みについてお話しします。



34

「バブルテクノロジーによる淡水化革新」

河原全作（京都大学大学院工学研究科）



応援しています頑張ってください賞

中東地域では、大量のエネルギーによる海水淡水化を行っており、水問題はエネルギー問題そのものである。マイクロバブルの基礎研究など、本学での混相流研究を中東での水問題に生かすため、サウジアラビアの海水淡水化技術研究拠点との研究交流協力体制を構築した。



35

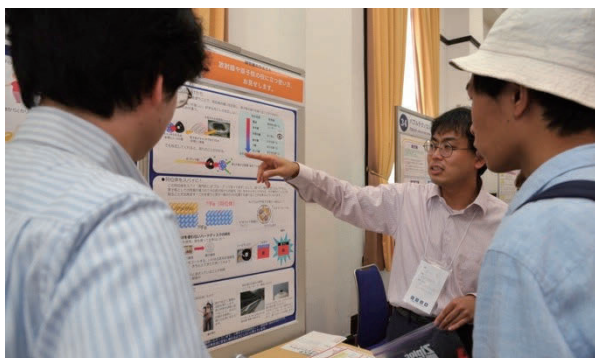
「放射線と原子核は使いよう」

増田亮（京都大学原子炉実験所）



平和利用を進めてください賞

怖いものと思われがちな放射線や原子核も、うまく使うことによって、極微の世界を調べることができます。放射線や原子核を使って0.00000000001の精度で、未来のための新材料の仕組みを調べた研究についてご紹介します。



36

「バルクナノメタル：常識を覆す構造材料」

辻伸泰（京都大学大学院工学研究科）



新素材開発頑張ってほしいで賞

構造材料は、我々の社会を支える縁の下の力持ちです。単純な化学組成で従来材の4倍以上の強度を示すなど、常識を覆す力学特性を示す新しい金属材料・バルクナノメタルを紹介します。



37

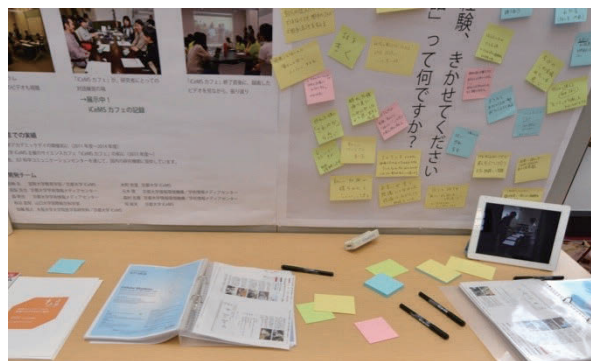
「いい対話ってどんな対話？」

水町衣里（京都大学物質－細胞統合システム拠点）



ステキな対話でしたで賞

私たちの研究プロジェクトでは、「若手研究者のための対話力トレーニングプログラム」を開発しています。伝え上手になるのも大事だけれど、聞き上手になるのも大事。そんなコンセプトのプログラムです。



38

「ICT が守るビッグデータ応用の創薬」

江谷典子（京都大学大学院医学研究科）



もっと活躍してほしいで賞

現在、遺伝子と病気の関係が解明されつつあり、創薬は、巨大なデータの中で、病気の原因となる遺伝子と結合できる化合物を薬候補として探し出します。そこで、ICT が得意とする情報処理技術による薬候補の発見とその副作用予測を、統計・機械学習・データベースを用いて実現しました。



39

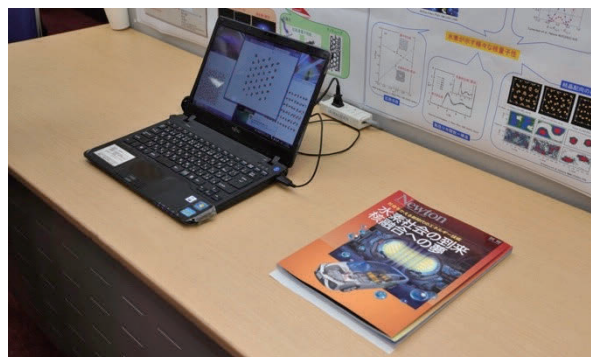
「水素分子のミクロなおしくまんじゅう」

金賢得（京都大学大学院理学研究科）



シンプルなのに謎だらけ賞

水素分子は最もシンプルな分子であるにもかかわらず、水素核が持つ特殊性から、その液体・固体・ガラスなど集合状態の全容はいまだに解明されていません。本研究では、水素核の特殊性である強い核量子性（核の振動と広がり）を取り入れた分子シミュレーション法を確立し、その特異な集団的性質を計算科学的手法によって解明していきます。また、そこでの結果をもとに、クリーンエネルギーとしての水素エネルギー利用を目的とした水素貯蔵材料の設計と開発を目指しています。



40

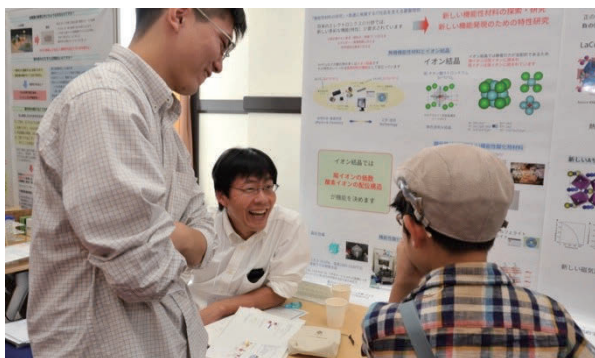
「新材料を創る」

市川能也（京都大学化学研究所）



地道な研究をがんばってほしいで賞

今までになかった新しい物質をちょっと変わった方法で創り出します。地表から下ること 400km の世界に相当する、ダイヤモンドも合成できる高圧力を使った手法と、分子を数個積み上げた程度の、ナノメートルの厚さの薄膜試料を合成する手法とを駆使して、新しい機能をもつ酸化物を創ります。



41

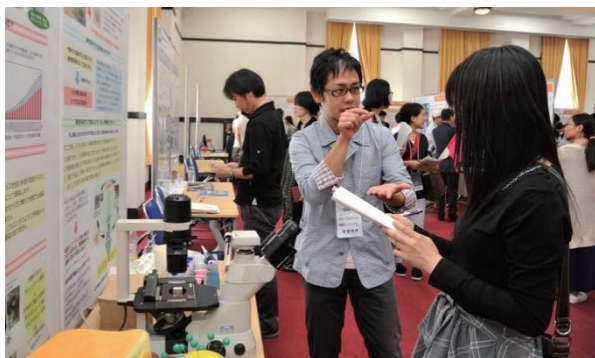
「人類はエイズを克服できるか？」

明里宏文（京都大学霊長類研究所）



理学的にも精神的にも感謝したいで賞

近年の優れた抗 HIV 薬の開発により、HIV に感染しても AIDS を免れることが出来るようになりました。しかし、これは人類と HIV の戦いの序章に過ぎなかったのです。真に HIV/AIDS を克服するために、何が必要なのでしょう？一緒に考えてみましょう。



42

「映像で東南アジアの魅力を発見しよう！」

直井里予（京都大学東南アジア研究所）



ドキュメンタリーで環境にせまったで賞

東南アジア諸国で制作（撮影・編集）されたドキュメンタリー映像作品をとおして、東南アジア地域の現状を捉え、諸問題の解決へとつなげることを試みます。東南アジアの人々は一体どのような暮らしをしているのか、異文化を理解し自らの固定観念を崩すことで、世界の見方や自分自身の生き方が少しかわるかもしれません！



43

「三国時代前夜：後漢王朝崩壊に至る過程」

平松明日香（京都大学大学院文学研究科）



いますぐ小説化してほしいで賞

三国時代の淵源となった後漢王朝崩壊の過程について考える。後漢政治を支配した宦官や外戚が、皇帝を中心とする王権にどのような影響を及ぼし、王朝を滅亡させたのか。



44

「内陸巨大古地震による長江文明の滅亡」

林愛明（京都大学大学院理学研究科）



まだまだいろんな文明が埋蔵されているで賞

活断層による内陸大地震は文明社会に大きい被害をもたらしたことがよく知られている。内陸長大活断層により引き起こされた巨大古地震は、四大文明に並ぶと近年注目を浴びている長江文明（三星堆と金沙文明）の滅亡を引き起こしたことが最近の調査研究により明らかにされた。



45

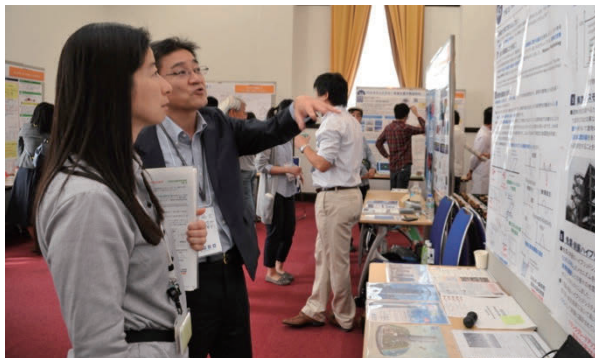
「建物の地震時レジリエンス向上にむけて」

竹脇出（京都大学大学院工学研究科）



日本を守ってほしい賞

地震動には様々なタイプのものがあり、いつどこで起こるかを建物の設計段階で予測することは困難です。このような難しい問題を解決する有力な方法として、「最悪地震動による方法」があります。このテーマについて、どのような建物が優れているかを交えて説明します。



46

「バイオナノトランスポーター」

秋吉一成（京都大学大学院工学研究科
ERATO 秋吉バイオナノトランスポータープロジェクト）

未来を感じたで賞

バイオナノトランスポーターとは、目に見えないほど小さなドラッグキャリア（薬剤の運び役）です。我々は、高分子化学やバイオテクノロジーを駆使して、医療に役立つバイオナノトランスポーターの開発を行っています。



47

「毒キノコはお暑いのが好き！？」

兵庫県立御影高等学校 環境科学部生物班



たくさんのキノコをよく集めたで賞

選好指数の分析から、毒キノコは高温を好み、初夏には可食キノコと同じ割合で出現します。また菌根菌は多雨、高温環境を好み、腐生菌のように気象条件に対する多様性はありませんでした。宿主の光合成が活発な時に活動するためだと考えられます。



48

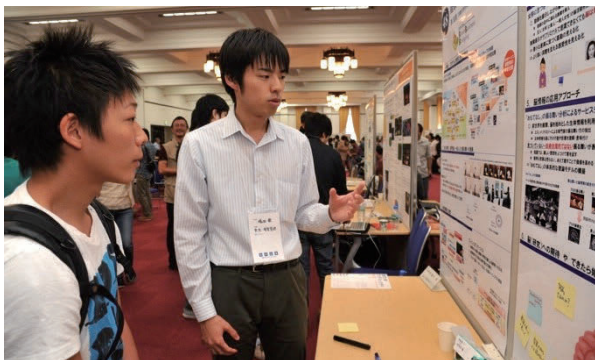
「経験・信頼価値の脳科学的アプローチ」

原良憲（京都大学大学院経営管理研究部）



脳の可能性は∞で賞

脳情報のビッグデータ化を通じて、サービス経済における高度専門職人材教育を対象に研究開発を進めています。サービス科学・情報学・脳科学の学際融合的アプローチのもと、経験・信頼価値を活用した学習支援を行います。



49

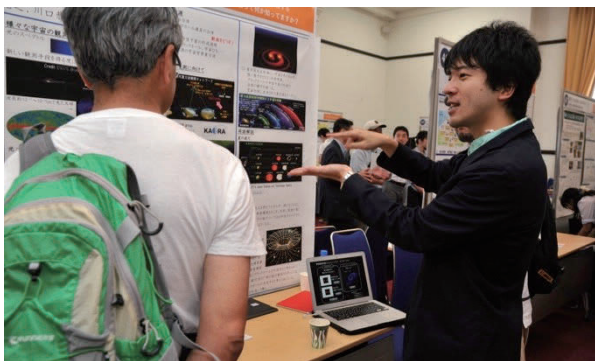
「重力波がひらく新しい物理 2015」

田中貴浩（京都大学大学院理学研究科）



人類の英知で賞

今年100年を迎える一般相対論は、重力にも電磁波のように伝わる波が存在することを预言します。この重力の波である重力波が、今まさに、直接検出されようとしていると期待されています。この研究課題では、観測から得られる情報を最大限引き出すべく、重力波に関わる多様な物理を理論的に研究しています。



50

「アフリカの潜在力とは何だろう？」

太田至（京都大学アフリカ地域研究資料センター）



人間らしく生きよう賞

現代アフリカは、紛争によって疲弊した社会秩序をいかに修復するかという課題に直面しています。この課題に対して本研究では、西欧の制度や価値観—民主主義や人権思想など—を移入して対処するのではなく、アフリカ人が創造し、運用してきた知識や制度（＝潜在力）を解明し、それを活用する道を探求しています。



51

「産学連携の原形」

宮野公樹（京都大学学際融合教育研究推進センター）



がんばって賞

確かに学問というものは、世のため人のためにある。ただし、その有用の中身は社会的課題解決や産業競争力強化と同意味ではない。何かにつけてイノベーションなるものを指標として持ち出す今日は、本来的な学問の精神にとって果たして健全と言えるだろうか。



52

「哲学的説明－現代形而上学の観点から」

北村直彰（京都大学大学院文学研究科）



納得させられたで賞

哲学的な探究では、科学とは異なる独特のしかたでさまざまな事柄が「説明」されます。しかし、なにかを哲学的に説明するとはそもそもどういうことでしょうか。哲学の根幹にかかわるこの問いに、現代形而上学の観点から取り組んでいます。



53

「パーキンソン病をモデルする」

上村紀仁（京都大学大学院医学研究科）



今後どうなっていくのかとても気になるで賞

パーキンソン病は運動障害を起こす神経難病です。私達はパーキンソン病を再現するモデル動物を作製し、この病気の克服に取り組んでいます。マウス、ラット、ユニークなメダカモデルなど、我々の取り組みを紹介します。



54

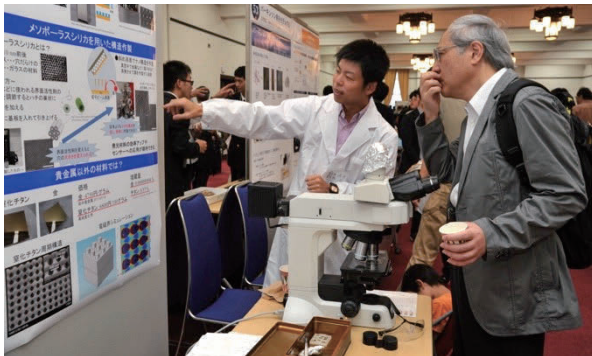
「ひと桁小さなモノづくり」

村井俊介（京都大学大学院工学研究科）



先端分野でおもしろかったで賞

金塊は金色ですが、ナノサイズにまで小さくすると赤色を示します。近年のナノテクノロジーの進歩に伴い、ナノサイズの金を精度よく作り、並べる技術が発展するとともに、光センサーなど、その応用の可能性が調べられてきました。私はこれまでより一桁小さいスケールで金ナノ粒子を並べ、新たな機能を生み出すことに挑んでいます。



55

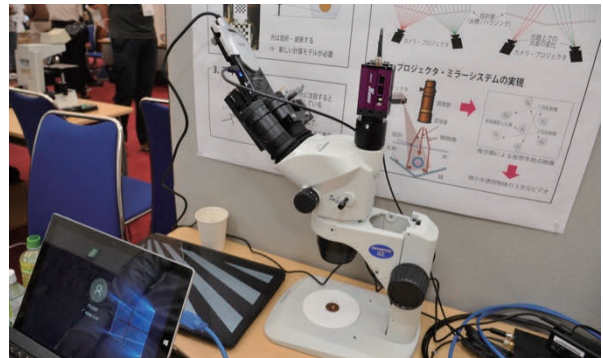
「お魚モーションキャプチャ」

延原章平（京都大学大学院情報学研究科）



魚の動きが見えるで賞

人の運動計測ツールとして、モーションキャプチャと呼ばれる技術が映像制作やスポーツなどの分野で広く使われています。もし水中を泳ぐ魚の運動が計測できるなら、どのようなことが実現できるでしょうか。実際の計測技術の紹介と、将来の応用例について紹介します。



56

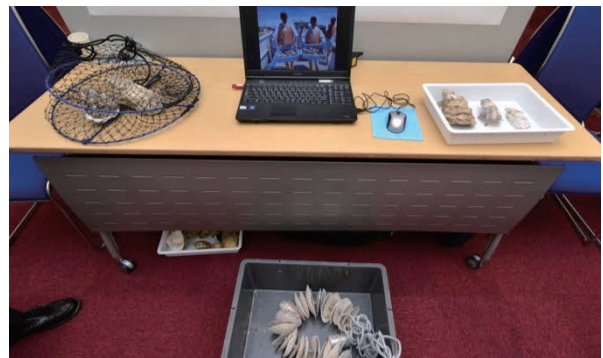
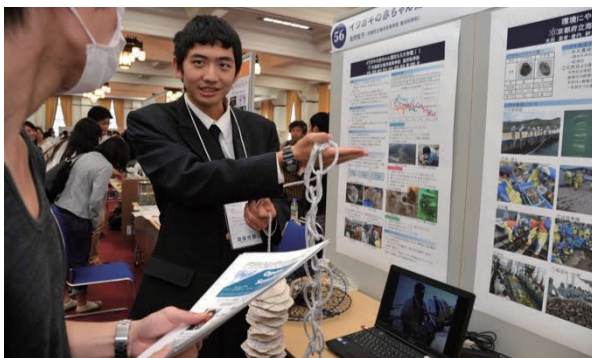
「イワガキの赤ちゃん捕まえる大作戦！！」

京都府立海洋高等学校 海洋科学科



イワガキブランディング戦略賞

京都府がブランド化を目指す「イワガキ」の天然採苗から育成、出荷に取り組んでいます。地元栗田湾でもイワガキ育成を始める漁業者が増えています。種苗を安定的に供給し、地元水産業活性化を目指します。



57

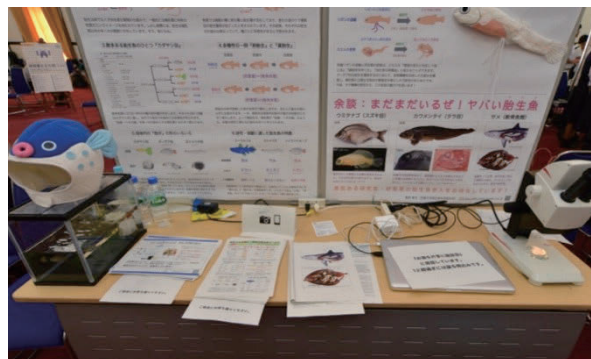
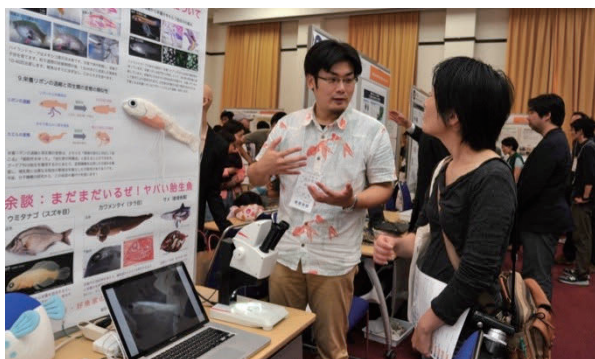
「赤ちゃんを産む！魅惑の胎生魚ワールド」

飯田敦夫（京都大学再生医科学研究所）



生命の不思議で賞

魚なのに卵を産まず、赤ちゃんを出産する『胎生魚』。彼らは「赤ちゃんを産む」という目的のために、実に多彩な「育てる仕組み」を備えています。カダヤシの仲間を中心に、魅惑の胎生魚ワールドを紹介します。



58

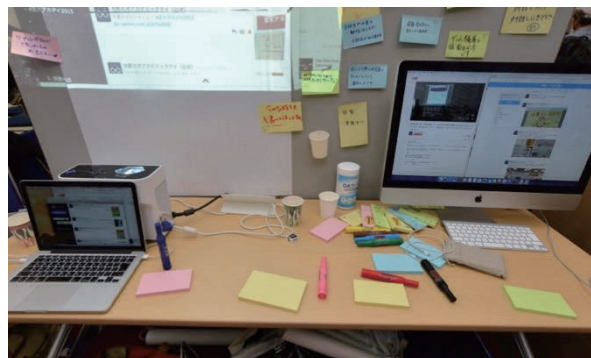
「京大アカデミックデイなう」

京都大学学術研究支援室



たくさんつぶやいた賞

Twitter を使った初の企画。研究者や来場者が気軽にアカデミックデイに参加できる「つぶやきブース」です。Twitter アカウントがない方も参加できるよう工夫しています。ハッシュタグ「#京大アカデミ 2015」を活用します。



4-2. ちゃぶ台囲んで膝詰め対話（サイエンスカフェ）

59

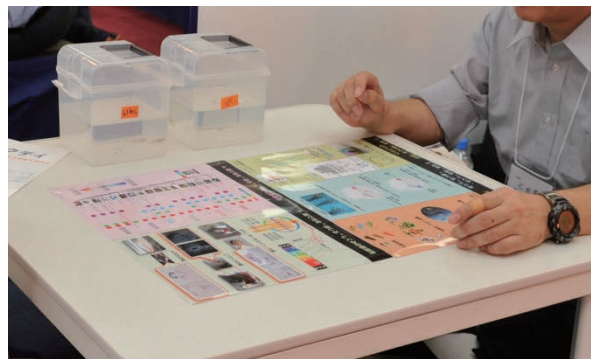
「脳で感じる光」

七田芳則（京都大学大学院理学研究科）



目からうろこで賞

私達は眼に入ってくる光を利用して、周りに何があるかなどの情報を得ています。最近、眼ではなくて直接脳で光を感じて体のリズムなどを整えていることがわかってきました。眼と脳で感じる光について、最先端の研究を紹介します。



60

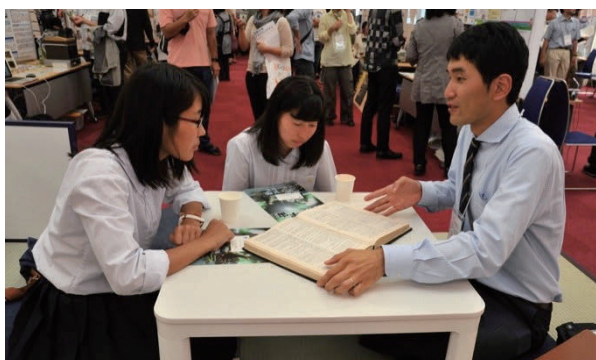
「古典サンスクリット詩の樹海一美の探訪」

川村悠人（京都大学大学院文学研究科）



ことばの美しさをもっと極めたいで賞

言葉の美しさとは何か。この問題は遥か昔から洋の東西を問わず議論されてきた。本出展では、高雅にして詞藻に富む古典サンスクリット詩を例にとり、インドの詩人、詩論家、文法家が残した記述を手掛かりにその答えを探ってみたい。



61

「ひとは宇宙へ飛び立つべきか？」

呉羽真（京都大学宇宙総合学研究ユニット）



おもしろかったで賞

映画や漫画の作品（例：『インターステラー』や『宇宙兄弟』）をとり上げ、宇宙開発の正当性をめぐる「宇宙倫理学」の問いについて来場者と議論を交わし、日常とかけ離れていると思われがちなテーマを身近に感じてもらう。



62

「なつかしさの心理学：思い出ときづな」

楠見孝（京都大学大学院教育学研究科）



新しい物の見方を教えてくれたで賞

昔聞いた音楽を久しぶりに耳にしたとき、なつかしさとともに昔の友だちのことを思い出すことはありませんか。また、はじめての場所なのに、なぜか懐かしさを感じるデジャビュを経験したことはありませんか。こうした体験をもとに、記憶の不思議について語り合いたと思います。



63

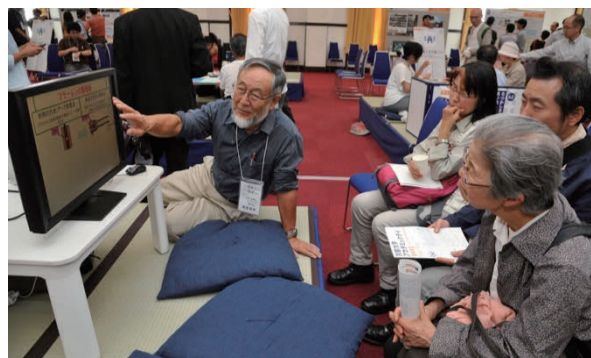
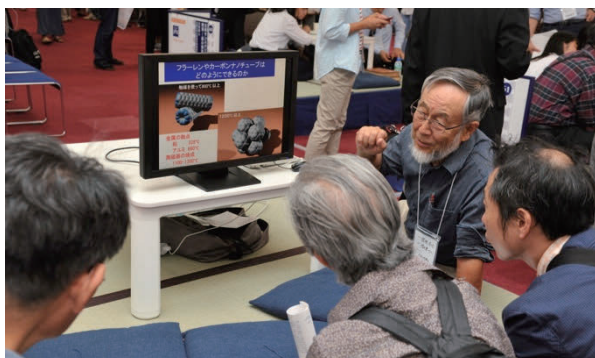
「コンピュータで化学反応の世界を探る」

諸熊奎治（京都大学福井謙一記念研究センター）



最先端の話をありがとう賞

コンピュータの進歩により、分子の世界で起こる化学反応の様子が量子力学を使った計算によって目で見たようにわかるようになってきています。このような例を、一緒に探しに行きましょう。



64

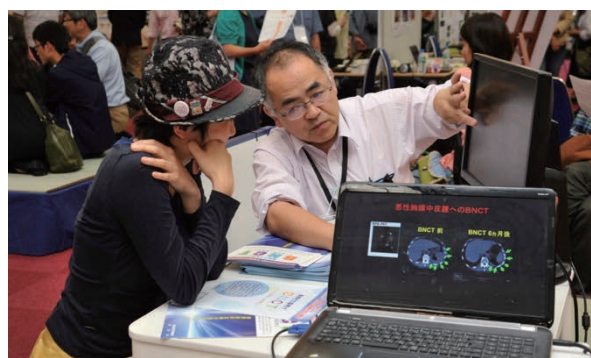
「がん細胞を狙い撃つ BNCT」

鈴木実（京都大学原子炉実験所）



おねがいたい賞

私たちは、中性子という放射線を使ってホウ素中性子捕捉療法（Boron Neutron Capture Therapy、以下 BNCT）というがんの放射線治療の研究を行っています。BNCT は、がん細胞選択的重粒子線治療という特長をもっており、様々な難治性がんの治療応用にむけて研究を進めています。



「キリスト者賀川豊彦と京都」

Stig Lindberg（京都大学大学院文学研究科）



しっかりお話できたで賞

賀川豊彦の公共哲学の肝心な一面を言い表す語句が、次の引用にある通りです。「しかし、近代のごとく科学文明が高度に進歩した以上は社会科学においても発明と発見がなければならぬ。この社会科学における発明と発見を、私は、社会科学意識的、道徳的自覚にその基準を求めんとするものである。すなわち、宇宙観的にも目覚めた霊魂が他人の欠点を互いに、補修し合い一創造的にまた再創造的に（宇宙修繕の原理に基づき）贖罪愛的精神を以って結合して行くところに真の社会が、経済的にも生まれ得ると云ふことを考へているものである。」これは、現在、安倍首相の人文教育に対する減縮提案に反して、社会科学（人文を含む）を犠牲にして準科学ばかりを重要と考えた時に生じる、人間文明における歪みを言い表すものです。この主張をたたき台にし、一緒に現在の日本の社会の様々な課題を検討していきたいと思います。



「リズムでつながる脳」

水原啓暁（京都大学大学院情報学研究科）



今後の展開にワクワクしました賞

ホタルは明滅のタイミングをシンクロさせることで、ホタル同士のコミュニケーションを実現していると考えられています。我々の脳も、脳のリズムのシンクロによりコミュニケーションを実現していることがあきらかになりつつあります。脳のリズムのシンクロに着目した最新のコミュニケーションの脳科学研究を紹介します。



67

「歴史にまなぶ大地震」

加納靖之（京都大学防災研究所）



もっと勉強したいで賞

過去に発生した地震について、むかしのひとが書いた文書や日記などを読むことにより調査する「歴史地震研究」について紹介します。また、地震の予知のために行われている研究について、来場者の皆さんと議論したいと思います。



68

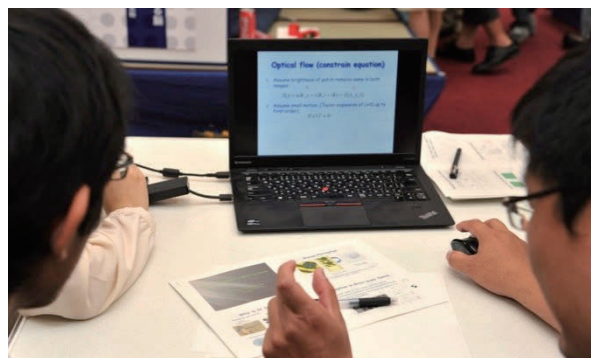
「ロボットがどうやってものを見分けるの」

梁雪峰（京都大学大学院情報学研究科）



頭が良くなったで賞

ロボットがどうやってものを見るか知ってる？カメラで撮った動画だけではなにが写ってるのか分からない。物体を認識しなければならないのだ。でもこれは簡単なことではない。特に移動中の物体の認識が難しい。カメラが動いている場合はなおさらだ。本研究はこの難題にチャレンジする。



4-3. 出展参加者一覧

ブース 番号	代表者 ○	氏名・所属	職名又は学年等
1	○	潘晟・京都大学大学院理学研究科 柳田沙緒里・京都大学大学院理学研究科 田中駿祐・京都大学大学院理学研究科 芦田洋輔・京都大学大学院理学研究科 平本綾美・京都大学大学院理学研究科	修士課程 2 年 修士課程 2 年 修士課程 1 年 修士課程 1 年 修士課程 1 年
2	○	長谷部伸治・京都大学大学院工学研究科 殿村修・京都大学大学院工学研究科 永木愛一郎・京都大学大学院工学研究科 牧泰輔・京都大学大学院工学研究科	教授 助教 講師 准教授
3	○	掛谷一弘・京都大学大学院工学研究科 辻本学・京都大学大学院工学研究科	准教授 日本学術振興会特別研究員 (SPD)
4	○	北川進・京都大学物質－細胞統合システム拠点 松田亮太郎・京都大学物質－細胞統合システム拠点 細野暢彦・京都大学物質－細胞統合システム拠点 日下心平・京都大学物質－細胞統合システム拠点 大場惟史・京都大学物質－細胞統合システム拠点 Ko Nakeun・京都大学物質－細胞統合システム拠点 堀彰宏・京都大学物質－細胞統合システム拠点	拠点長／教授 特定准教授 特定助教 特定助教 特定研究員 特定研究員 特定研究員
5	○	杉山弘・京都大学物質－細胞統合システム拠点 板東俊和・京都大学大学院理学研究科 Ganesh N Pandian・京都大学大学院理学研究科 佐藤慎祐・京都大学大学院理学研究科 谷口純一・京都大学大学院理学研究科 Tingting Zou・京都大学大学院理学研究科 Yulei Wei・京都大学大学院理学研究科	教授 准教授 助教 技術補佐員 博士課程 1 年 博士課程 1 年 博士課程 1 年
6	○	滝田禎亮・京都大学大学院農学研究科	助教
7	○	乾晴行・京都大学大学院工学研究科 岸田恭輔・京都大学大学院工学研究科 岡本範彦・京都大学大学院工学研究科 松野下裕貴・京都大学大学院工学研究科 丸山拓仁・京都大学大学院工学研究科	教授 准教授 助教 博士課程 2 年 修士課程 1 年
8	○	野村理朗・京都大学大学院教育学研究科 藤野正寛・京都大学大学院教育学研究科 平岡大樹・京都大学大学院教育学研究科 藤田弥世・京都大学大学院教育学研究科	准教授 修士課程 2 年 修士課程 1 年 博士課程 1 年
9	○	笠木雅史・京都大学大学院文学研究科 周艶・京都産業大学	日本学術振興会特別研究員 (PD) 特約講師
10	○	越智萌・京都大学大学院法学研究科 山下朋子・京都大学大学院法学研究科	日本学術振興会特別研究員 (SPD) 日本学術振興会特別研究員 (PD)
11	○	杉山和彦・京都大学大学院工学研究科 今井康貴・京都大学大学院工学研究科 三滝雅俊・京都大学大学院工学研究科 藤崎広豊・京都大学大学院工学研究科 西田圭佑・京都大学大学院工学研究科 友松駿介・京都大学大学院工学研究科	准教授 博士課程 博士課程 博士課程 博士課程 博士課程

12	○	入江一浩・京都大学大学院農学研究科 久米利明・京都大学大学院農学研究科	教授 准教授
13	○	中川尚史・京都大学大学院理学研究科 田島知之・京都大学大学院理学研究科 本郷峻・京都大学大学院理学研究科	教授 博士課程 博士課程
14	○	高田明・京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科	准教授
15	○	松田道行・京都大学大学院医学研究科 青木一洋・京都大学大学院医学研究科 小松原晃・京都大学大学院生命科学研究科 三浦晴子・京都大学大学院生命科学研究科 真流玄武・京都大学大学院生命科学研究科	教授 特定准教授 博士課程 2 年 博士課程 1 年 修士課程 2 年
16	○	田村類・京都大学大学院人間・環境学研究科 武元佑紗・京都大学大学院人間・環境学研究科	教授 日本学術振興会特別研究員(DC1)
17	○	西嶋一欽・京都大学防災研究所 西村宏昭・京都大学防災研究所	准教授 研究員
18	○	今中雄一・京都大学大学院医学研究科 大坪徹也・京都大学大学院医学研究科 國澤進・京都大学大学院医学研究科	教授 助教 講師
19	○	田尾龍太郎・京都大学大学院農学研究科 山根久代・京都大学大学院農学研究科 赤木剛士・京都大学大学院農学研究科 森本拓也・京都大学大学院農学研究科 杉本綾香・京都大学大学院農学研究科 竹内貴規・京都大学大学院農学研究科	准教授 講師 助教 博士課程 2 年 博士課程 2 年 博士課程 2 年
20	○	伊勢昌宏・京都府立木津高等学校 科学部 宮崎真衣・京都府立木津高等学校 科学部 北澤美天・京都府立木津高等学校 科学部 那波和志・京都府立木津高等学校 科学部	教諭 3 年 2 年 教諭
21	○	児玉聡・京都大学大学院文学研究科 田中創一朗・京都大学大学院文学研究科 佐藤恵子・京都大学医学部附属病院 鈴木美香・京都大学 iPS 細胞研究所	准教授 修士課程 1 年 特定准教授 特定研究員
22	○	佐藤文彦・京都大学大学院生命科学研究科 山田泰之・京都大学大学院生命科学研究科 堀健太郎・京都大学大学院生命科学研究科	教授 特定研究員 博士課程 3 年
23	○	大谷雅之・京都大学大学院情報学研究科	特定研究員
24	○	大野美紀子・京都大学東南アジア研究所 木谷公哉・京都大学東南アジア研究所 設楽成美・京都大学東南アジア研究所	助教 助教 助教
25	○	藪塚武史・京都大学大学院エネルギー科学研究科 福島啓斗・京都大学大学院エネルギー科学研究科 田村明寛・京都大学大学院エネルギー科学研究科 城所泰孝・京都大学大学院エネルギー科学研究科 松永孝彦・京都大学大学院エネルギー科学研究科 鍛冶宗騎・京都大学大学院エネルギー科学研究科 阪口通昭・京都大学工学部工業化学科	助教 修士課程 2 年 修士課程 2 年 修士課程 1 年 修士課程 1 年 修士課程 1 年 学部 4 回生
26	○	趙亮・京都大学大学院総合生存学館	准教授
27	○	茶園敏美・京都大学アジア研究教育ユニット	研究員

28	○	キムカブジン・京都大学化学研究所 吉村瑠子・京都大学化学研究所 谷口卓也・京都大学化学研究所 東野隆之・京都大学化学研究所	助教 博士課程 3 年 博士課程 1 年 修士課程 2 年
29	○	谷誠・京都大学大学院農学研究科 小杉緑子・京都大学大学院農学研究科 勝山正則・学際融合教育研究推進センターグローバル生存学大学院 連携ユニット	教授 助教 特定准教授
30	○	前田有輝・京都大学工学部物理工学科／京大生協学生員会	学部 3 回生
31	○	重田眞義・京都大学アフリカ地域研究資料センター 田中利和・京都大学アフリカ地域研究資料センター 金子守恵・京都大学大学院人間・環境学研究科 有井春香・京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科	教授 研究員 助教 一貫制博士課程 5 年
32	○	田中功・京都大学大学院工学研究科 高橋亮・京都大学大学院工学研究科 他 3 名	教授 博士課程 2 年
33	○	田中庸裕・京都大学実験と理論計算科学のインタープレイによる触媒・電池の元素戦略研究拠点 田中功・京都大学構造材料元素戦略研究拠点 太田浩二・京都大学学際融合教育研究推進センター触媒・電池ユニット 細川三郎・京都大学学際融合教育研究推進センター触媒・電池ユニット 落合庄治郎・京都大学学際融合教育研究推進センター構造材料ユニット 大石毅一郎・京都大学学際融合教育研究推進センター構造材料ユニット	拠点長 拠点長 特定教授 特定准教授 特任教授 特定准教授
34	○	河原全作・京都大学大学院工学研究科	講師
35	○	増田亮・京都大学原子炉実験所 瀬戸誠・京都大学原子炉実験所 北尾真司・京都大学原子炉実験所 小林康浩・京都大学原子炉実験所 齋藤真器名・京都大学原子炉実験所 黒葛真行・京都大学原子炉実験所	研究員 教授 准教授 助教 助教 研究員
36	○	辻伸泰・京都大学大学院工学研究科 柴田暁伸・京都大学大学院工学研究科 坪井瑞記・京都大学大学院工学研究科 勝野友之・京都大学大学院工学研究科 北村裕樹・京都大学大学院工学研究科 佐治奈萌子・京都大学大学院工学研究科	教授 准教授 博士課程 2 年 修士課程 2 年 修士課程 1 年 修士課程 1 年
37	○	水町衣里・京都大学物質－細胞統合システム拠点 城綾実・京都大学物質－細胞統合システム拠点 加納圭・京都大学物質－細胞統合システム拠点 森幹彦・京都大学学術情報メディアセンター 元木環・京都大学情報環境機構／学術情報メディアセンター	特定研究員 特定研究員 特任准教授 助教 助教
38	○	江谷典子・京都大学大学院医学研究科	特定研究員（JST CREST）
39	○	金賢得・京都大学大学院理学研究科	助教
40	○	市川能也・京都大学化学研究所	助教

41	○	明里宏文・京都大学霊長類研究所 関洋平・京都大学霊長類研究所 渡部祐司・京都大学霊長類研究所	教授 特定研究員 特定研究員
42	○	直井里予・京都大学東南アジア研究所 川村藍・京都大学東南アジア研究所	機関研究員 日本学術振興会特別研究員（PD）
43	○	平松明日香・京都大学大学院文学研究科 野口優・京都大学大学院文学研究科	日本学術振興会特別研究員（PD） 非常勤講師
44	○	林愛明・京都大学大学院理学研究科	教授
45	○	竹脇出・京都大学大学院工学研究科 藤田皓平・京都大学大学院工学研究科	教授 助教
46	○	秋吉一成・京都大学大学院工学研究科 ERATO 秋吉バイオナノトランスポータープロジェクト 澤田晋一・ERATO 秋吉バイオナノトランスポータープロジェクト 向井貞篤・ERATO 秋吉バイオナノトランスポータープロジェクト 奥村成和・ERATO 秋吉バイオナノトランスポータープロジェクト 野田佳菜子・ERATO 秋吉バイオナノトランスポータープロジェクト	教授（研究総括） 助教（研究総括補佐） 特定准教授 研究推進主任 研究推進員
47	○	河合祐介・兵庫県立御影高等学校 環境科学部生物班 中村雄太郎・兵庫県立御影高等学校 環境科学部生物班 阿波田みのり・兵庫県立御影高等学校 環境科学部生物班 新保悠里乃・兵庫県立御影高等学校 環境科学部生物班 高岡まりあ・兵庫県立御影高等学校 環境科学部生物班 林真理菜・兵庫県立御影高等学校 環境科学部生物班	主幹教諭 2年 2年 2年 2年 2年
48	○	原良憲・京都大学大学院経営管理研究部 嶋田敏・京都大学大学院経営管理研究部 山本祐輔・京都大学大学院経営管理研究部	教授 特定助教 特定講師
49	○	田中貴浩・京都大学大学院理学研究科 中野寛之・京都大学大学院理学研究科 川口恭平・京都大学大学院理学研究科／基礎物理学研究所	教授 PD 研究員 博士課程 2 年
50	○	太田至・京都大学アフリカ地域研究資料センター 大山修一・京都大学アフリカ地域研究資料センター 市野進一郎・京都大学アフリカ地域研究資料センター	教授 准教授 研究員
51	○	宮野公樹・京都大学学際融合教育研究推進センター	准教授
52	○	北村直彰・京都大学大学院文学研究科	日本学術振興会特別研究員（PD）
53	○	上村紀仁・京都大学大学院医学研究科 畑中悠佑・京都大学大学院医学研究科 生野真嗣・京都大学大学院医学研究科 中西悦郎・京都大学大学院医学研究科	特定助教 特定助教 大学院 3 年生 大学院 2 年生
54	○	村井俊介・京都大学大学院工学研究科 宇野翔馬・京都大学大学院工学研究科 鎌倉涼介・京都大学大学院工学研究科	助教 修士課程 2 年 博士課程 1 年
55	○	延原章平・京都大学大学院情報学研究科 川嶋宏彰・京都大学大学院情報学研究科 Rodrigo Verschae・京都大学大学院情報学研究科 川原僚・京都大学大学院情報学研究科 兼近悠・京都大学大学院情報学研究科	講師 准教授 特定助教 博士課程 1 年 修士課程 2 年
56	○	長岡智子・京都府立海洋高等学校 海洋科学科 光田里音・京都府立海洋高等学校 海洋科学科 倉内幹太・京都府立海洋高等学校 海洋科学科	教諭 3 年 3 年

		島田響・京都府立海洋高等学校 海洋科学科 西居希・京都府立海洋高等学校 海洋科学科 池内雨音・京都府立海洋高等学校 海洋科学科	2 年 2 年 2 年
57	○	飯田敦夫・京都大学再生医科学研究所 脇華菜・京都大学大学院理学研究科	助教 博士課程 2 年
58	○	京都大学学術研究支援室	
59	○	七田芳則・京都大学大学院理学研究科 山下高廣・京都大学大学院理学研究科 佐藤恵太・京都大学大学院理学研究科	教授 助教 特定研究員
60	○	川村悠人・京都大学大学院文学研究科	日本学術振興会特別研究員 (SPD)
61	○	吳羽真・京都大学学際融合教育研究推進センター 宇宙総合学研究ユニット 玉澤春史・京都大学大学院理学研究科 吉沢文武・千葉大学大学院人文社会科学研究科 清水雄也・一橋大学大学院社会学研究科	特定研究員 博士課程 3 年 特別研究員 博士課程 3 年
62	○	楠見孝・京都大学大学院教育学研究科	教授
63	○	諸熊奎治・京都大学福井謙一記念研究センター	FIFC リサーチフェロー
64	○	鈴木実・京都大学原子炉実験所 粒子線腫瘍学研究センター	教授
65	○	Stig Lindberg・京都大学大学院文学研究科	助教
66	○	水原啓暁・京都大学大学院情報学研究科	講師
67	○	加納靖之・京都大学防災研究所	助教
68	○	梁雪峰・京都大学大学院情報学研究科 何飛・京都大学大学院情報学研究科	准教授 修士課程 1 年

5. その他

5-1. 出展研究者向け事前説明会

■ 5-1-1. 概要

2015年9月7日に京都大学附属図書館のラーニング・コモンズで、9月10日に京都大学稲盛財団記念館1階の京都大学研究資源アーカイブ映像ステーションで、「京都大学アカデミックデイ」に参加予定の研究者を対象とした事前説明会を開催しました（参加は任意）。参加研究者の“負担感”を軽減し、事前準備をサポートすることがこの事前説明会の主なねらいでした。

学術研究支援室の白井哲哉より「京都大学アカデミックデイ」開催の目的や背景、前回の様子を紹介しました。どのような場で、どのような人たちと対話をするようになるのかを事前にお伝えすることで、準備がしやすくなることを狙っています。その後、専門外の人に研究を紹介する方法・対話のコツ・ポスター作りのポイントについてのレクチャーを行いました。学会発表との違いをもとに紹介をしました。



5-2. イベント終了後の学内限定タイム（出展者交流）

5-2-1. 概要

アカデミックデイ閉幕後、参加研究者どうしの交流の場として出展者や出展者の研究室の学生などを対象とした学内限定タイムを設けました。参加研究者どうしでポスターを見たり、対話したりするなど研究者間の異分野交流のほか、アカデミックデイ賞の発表も行いました。



5-3. 広報物

「京都大学アカデミックデイ」のポスターとチラシを作成し、京都市を中心に関西圏の教育関係機関及び公共機関等に配布を行いました。また、京都市バス・地下鉄及び京都新聞へ広告掲載を行いました。

■ 5-3-1. ポスター（A2 サイズ）

京都大学 アカデミックデイ 2015



みんなで対話する京都大学の日

開催日時 **2015年10月4日(日) 10:00-16:00**

会場 **京都大学吉田キャンパス 百周年時計台記念館**

参加費 **無料(申込み不要)**

1 研究者と立ち話 60件

10:00-15:30 *ガイドツアーあり(随時開催)

大学研究者、高校生による研究紹介です。
ポスターの前にいる研究者に話しかけてみてください。
気の向くまま、あちこちのぞくもよし。一人とじっくり語るもよし。

2 ちゃぶ台囲んで膝詰め対話 10件

10:30-12:00 | 13:30-15:00

ひとつのテーブルを囲んで研究にまつわるあんな話、こんな話。
お茶の間気分で、ほっこりお話ししましょう。

3 お茶を片手に座談会

① 11:00-12:00 | ② 14:00-15:30

異分野の研究者・専門家が各テーマについて話し合います。
①「100万円あったら、どの研究に投資する? 体験! クラウドファンディング」
②「研究の語って、いまも昔も身近な場所でもされているんじゃないの?」

4 研究者の本棚

10:00-16:00 京都大学研究者のお勧めの本を紹介・展示しています。
12:30-13:30 「東南アジア「人と自然」ドキュメンタリー」

お問い合わせ先：研究推進部「国民との科学・技術対話」担当/学術研究支援室 Tel: 075-753-5659 E-mail: kensyu-taiwa@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp
主催：京都大学学術研究支援室、研究推進部研究推進課、国民との科学・技術対話ワーキンググループ 後援：京都大学生協同組合、京都府教育委員会、大阪府教育委員会、奈良県教育委員会、滋賀県教育委員会

<http://research.kyoto-u.ac.jp/academic-day/2015/> (出展研究者・テーマ詳細公開中)



■ 5-3-2. チラシ (A4 サイズ)

● オモテ面



国民との科学・技術対話
Kyoto University

みんなで対話する京都大学の日

京都大学
アカデミックデイ
2015

開催日時 2015年10月4日(日) 10:00-16:00

会場 京都大学吉田キャンパス 百周年時計台記念館

参加費 無料(申込み不要)

主催：京都大学学術研究支援室、研究推進部研究推進課、国民との科学・技術対話ワーキンググループ
後援：京都大学生生活協同組合、京都府教育委員会、大阪府教育委員会、奈良県教育委員会、滋賀県教育委員会

<http://research.kyoto-u.ac.jp/academic-day/2015/>

京都大学アカデミックデイ 2015

2015年10月4日(日) 10:00-16:00 京都大学吉田キャンパス 百周年時計台記念館 無料(申込み不要)

プログラム



ポ
ス
タ
ー
/
展
示

1 研究者と立ち話 約60件

10:00-15:30 *ガイドツアーあり(随時開催)

大学研究者、高校生による研究紹介です。ポスターの前にいる研究者に話しかけてみてください。気の向くまま、あちこちのぞくもよし。一人とじっくり語るもよし。

出展予定タイトル：赤ちゃんを産む！ 魅惑の胎生魚ワールド／水と環境をまもる森の働き／机にのる化学プラント／アフリカの潜在力とは？／HIVと戦う：人類はAIDSを克服できるか？／原子配列の乱れ：新しい材料開発の鍵 ほか



サ
イ
エ
ン
ス
カ
フ
ェ

2 ちゃぶ台囲んで膝詰め対話 10件

10:30-12:00 | 13:30-15:00

ひとつのテーブルを囲んで研究にまつわるあんな話、こんな話。お茶の間気分で、ほっこりお話ししましょう。

出展予定タイトル：歴史に学ぶ地震予知／脳で感じる光／古典サンスクリット詩の樹海—美の探索／ひとは宇宙へ飛び立つべきか？ ほか



ト
ー
ク
ラ
イ
ブ

3 お茶を片手に座談会 2本

異分野の研究者・専門家が各テーマについて話し合います。

11:00-12:00

「100万円あったら、どの研究に投資する？ 体験！ クラウドファンディング」
研究資金の収集方法として注目されているクラウドファンディングを疑似的に体験できます！

登壇者：飯田敬夫（京都大学再生医科学研究所 助教／発生生物学）、榎戸輝揚（京都大学白眉センター・理学研究科学宇宙物理学教室 特定准教授／宇宙物理学）、鈴木純女（同志社大学法学部政治学科 准教授／政治学）、熊澤辰徳（大阪市立自然史博物館 外来研究員）

14:00-15:30

「研究の話って、いまでも身近な場所でもされているんじゃないの？ ～わざわざオープンって言わなくてもオープンなサイエンスについて考える～」
地域の人々と密接に関わりながら研究成果を蓄えていく博物館の話、はたまた専門家とアマチュアが混じり合う芸術分野の話まで。「誰にとっても研究や科学が当たり前」に身近にある日々」とは？

登壇者：山田光利（学問の箱庭管理人／Smips研究現場の知財分科会オーガナイザー）、藤井翔太（大阪大学未来戦略機構戦略企画室特任助教） ほか



特
設
図
書
室

4 研究者の本棚

10:00-16:00

京都大学研究者のお勧めの本を紹介・展示しています。

12:30-13:30

「東南アジア『人と自然』ドキュメンタリー」

登壇者：直井里予（京都大学東南アジア研究所 機関研究員／地域研究、映像人類学）



京都大学吉田キャンパス 百周年時計台記念館
アクセス：市バス「京大正門前」から東一条通りを東に徒歩5分。

お問い合わせ先
研究推進部「国民との科学・技術対話」担当／学術研究支援室
Tel: 075-753-5659
E-mail: kenkyu-taiwa@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp



<http://research.kyoto-u.ac.jp/academic-day/2015/> (出展研究者・テーマ詳細公開中)

みんなで対話する京都大学の日



開催日時 2015年10月4日(日) 10:00-16:00

会場 京都大学吉田キャンパス 百周年時計台記念館

参加費 無料(申込み不要)

1 研究者と立ち話 60分

10:00-15:30 ※ガイドツアーあり(随時開催)

大学研究者、高校生による研究紹介です。
ポスターの前にいる研究者に話しかけてみてください。
気の向くまま、あちこちのぞくもよし。一人とじっくり話さるもよし。

3 お茶を片手に座談会

① **11:00-12:00** | ② **14:00-15:30**

異分野の研究者・専門家が各テーマについて話し合います。
①「100万円あったら、どの研究に投資する?」体験「クラウドファンディング」
②「研究の語って、いまも昔も先進な場面でもされているんじゃないの?」

2 ちゃぶ台囲んで膝詰め対話 10分

10:30-12:00 | 13:30-15:00

ひとつのテーマを囲んで研究にまつわるあんな話、こんな話。
お茶の雰囲気、ほっこりお話ししましょう。

4 研究者の本棚

10:00-16:00 京都大学研究者のお勧めの本を紹介・展示しています。
12:30-13:30 「東南アジア(人)と自然」ドキュメンタリー

2015

京都大学
アカデミックデイ

お問い合わせ先: 研究推進部「国民との科学・技術対話」担当/学術研究支援室 Tel: 075-753-5659 E-mail: kenkyu-taisai@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp

主催: 京都大学学術研究支援室、研究推進部研究推進課、国民との科学・技術対話ワーキンググループ **協賛:** 京大大学生協同組合、京都府教育委員会、大阪府教育委員会、奈良県教育委員会、滋賀県教育委員会

http://research.kyoto-u.ac.jp/academic-day/2015/ (出席研究者・テーマ詳細公開中) 

ポスター 184x423 2015

■ 5-3-4. ウェブサイト、フェイスブック等

- 京都大学学術研究支援室ホームページ

<http://www.kura.kyoto-u.ac.jp/event/42>

<http://www.kura.kyoto-u.ac.jp/event/41>

開催案内とともに出展者決定のお知らせを掲載しました。

- 京都大学「研究大学強化促進事業」ホームページ (K. U. RESEARCH)

<http://research.kyoto-u.ac.jp/academic-day/>

本年度からアカデミックデイ専用サイトを開設しました。

- 京都大学「研究大学強化促進事業」ホームページ (K. U. RESEARCH) フェイスブック

<https://www.facebook.com/k.u.research>

座談会情報や連携企画のお知らせを掲載しました。

- 京都大学アカデミックデイ公式 (@KyodaiAcaDay) Twitter

<https://twitter.com/KyodaiAcaDay/>

本年度から「京都大学アカデミックデイ 2015」の情報を Twitter でも発信しました。

「研究者と立ち話」や「ちゃぶ台囲んで膝詰め対話」、「座談会」の詳細を、各研究の詳細ページと一緒に紹介しました。

本年度は「京都大学アカデミックデイ 2015」告知ならびに集客に向けにソーシャル・ネットワーキング・サービス (SNS) を利用しました。使用した SNS は、Twitter のアカデミックデイ公式アカウントと、Facebook の K. U. RESEARCH アカウントです。開催日前日までは開催情報や出展情報などを告知し、開催日当日は主に Twitter を使って会場の様子を伝えました。また開催日以降は、アカデミックデイに関するまとめサイトの告知や来場お礼などを流しました。

- Twitter

<https://twitter.com/KyodaiAcaDay>

ライブ感に重点を置き、拡散性を期待。ターゲットはスマートフォンユーザ。

公式アカウント設置日：2015 年 9 月 8 日

アカウント ID：@KyodaiAcaDay

ハッシュタグ：#京大アカデイ 2015

出展情報の詳細がウェブ(<http://research.kyoto-u.ac.jp/academic-day/2015>)にアップされた後、出展情報の URL と研究者名、研究者の Twitter アカウントが判明している場合はそのアカウントを含めて 1 出展につき 1 ツイートしました。また、説明会開催情報ならびに説明会の様子を、写真をつけてツイートしたほか、開催日前日までは準備の様子をツイートしました。開催日当日は、会場の様子などを写真付きでツイートしたほか、来場者に感想などのコメントをポストイットに書いてもらい、それを写真撮影してツイートしました。座談会では、インターネット中継を行い、その様子をツイートしました。

- ・公式アカウント開設から開催日までに同アカウントから流したツイート数：198

- ・総閲覧数：延べ 9 万 1800 人 (1 日あたりの閲覧数は平均 3400 人)

- ・Engagement 率：平均 2.5% (最高：16.42%)

● Facebook

<https://www.facebook.com/k.u.research/>

文字数制限がないので、じっくり読ませる想定。ターゲットはPCユーザ。

- ・ K. U. RESEARCH のアカウントを利用
- ・ ハッシュタグ（#京大アカデイ 2015）をつけて後の検索しやすさを向上

京都大学附属図書館や京都府立図書館など、外部との連携に活用しました。

- ・ K. U. Research のアカウントで流した件数：8 件
- ・ 流した内容ならびにリーチ数

投稿日	内容	リーチ	いいね！シェア等
2015 年 7 月 9 日	参加研究者募集！	879	54
2015 年 8 月 14 日	アカデミックデイ 2015 参加研究者が決定！	925	73
2015 年 9 月 8 日	アカデミックデイ説明会を開催	1051	92
2015 年 9 月 18 日	京都大学アカデミックデイの情報は Twitter でも	393	21
2015 年 9 月 30 日	研究者の本棚が京都府立図書館に	227	21
2015 年 10 月 1 日	京大附属図書館にアカデミックデイ「総長の本棚」	620	53
2015 年 10 月 4 日	11:00 から京都大学アカデミックデイ 2015 座談会の中継を実施します！	533	38
2015 年 10 月 6 日	つぶやきで回想！アカデミックデイ 2015	2288	148

5-4. 報道・開催報告等

■ 5-4-1. 新聞

- 読売新聞 2015 年 9 月 27 日（日）朝刊
- 日経新聞 2015 年 9 月 28 日（月）夕刊

■ 5-4-2. ウェブサイト

- 京都大学「研究大学強化促進事業」ホームページ（KU Research）
<http://research.kyoto-u.ac.jp/academic-day/>
アカデミックデイ 2015 に出展された研究者の出展概要や出展ポスター、開催時の写真、感想、お勧め本等の情報を掲載しました。
- 京大 Facebook
<https://www.facebook.com/Kyoto.Univ>
アカデミックデイ 2015 の開催報告を京大 Facebook に掲載しました。
- ツイートまとめサイト
<http://togetter.com/li/882752>
アカデミックデイ当日を中心にツイートで流れたアカデミックデイに関するつぶやきをまとめました。

■ 5-4-3. テレビ

- KBS 京都 2015 年 10 月 4 日（日）17:55「京都新聞ニュース」

6. 支援体制・準備スケジュール

6-1. 支援体制

「京都大学アカデミックデイ」は、京都大学による「国民との科学・技術対話」事業の一環として実施しています。支援体制は以下の通りです。

「国民との科学・技術対話」ワーキンググループ委員

楠見孝	教育学研究科 教授
中辻憲夫	物質－細胞統合システム拠点 (iCeMS) 特任教授
西村いくこ	理学研究科 教授
伊勢田哲治	文学研究科 准教授
磯部洋明	総合生存学館 准教授
塩瀬隆之	総合博物館 准教授
元木環	情報環境機構／学術情報メディアセンター 助教
水町衣里	物質－細胞統合システム拠点 (iCeMS) 特定研究員
一色博	総務部渉外課 課長
岡田智恵美	企画・情報部広報課 課長
林史晃	研究推進部研究推進課 課長
武藤誠太郎	学術研究支援室 室長

京都大学URAネットワーク

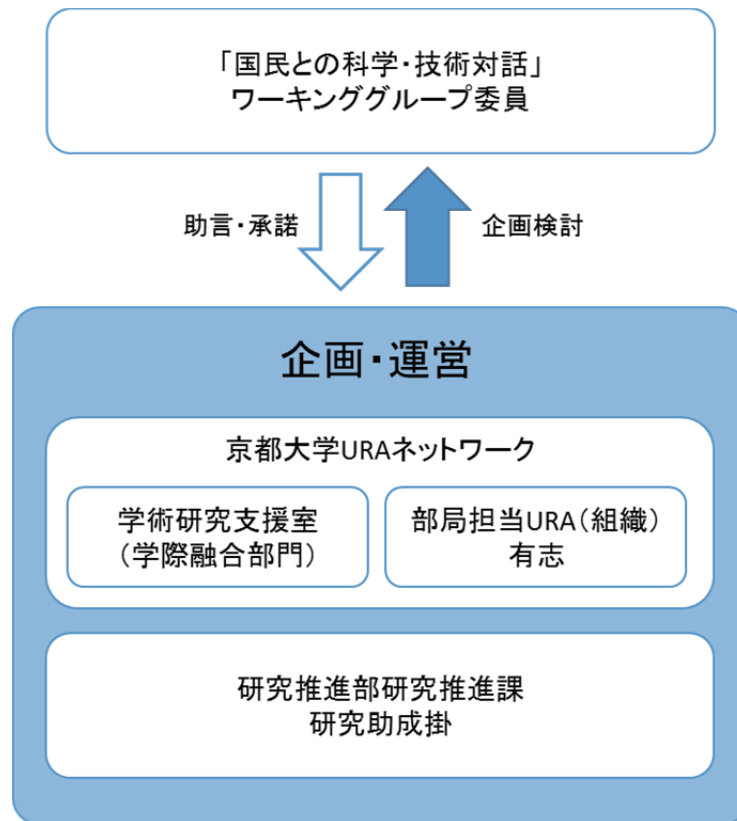
天野絵里子	学術研究支援室	URA
笠原のりこ	学術研究支援室	URA
白井哲哉	学術研究支援室	URA
仲野安紗	学術研究支援室	URA
森下明子	学術研究支援室	URA
小野英理	次世代研究創成ユニット	URA

研究推進部研究推進課

樺島彩波	研究推進部研究推進課研究助成掛
巴山涼子	研究推進部研究推進課研究助成掛
福元隆	研究推進部研究推進課研究助成掛
阪井利香	研究推進部研究推進課研究助成掛
時武広美	研究推進部研究推進課研究助成掛

6-2. スタッフリスト

企画	京都大学URAネットワーク 研究推進部研究推進課
デザイン（広報・サイン・記念品）	須山悠里（suyama design）
学生スタッフ	有限会社関西教育考学： 伊佐治俊策（京都大学農学部 3 回生） 金岡歩美（京都大学理学部 3 回生） 吉田雄介（京都大学工学部情報学科 3 回生） 倉田康平（京都大学農学部 4 回生） 楊木萌（京都大学農学部 4 回生） 松谷優樹（京都大学大学院理学研究科 修士 1 回生） 春木慶洸（京都大学大学院理学研究科 修士 1 回生） 吉田裕介（京都大学大学院農学研究科 修士 2 回生） 天野彩（京都大学大学院農学研究科 修士 2 回生） 秋柴美沙穂（京都大学大学院薬学研究科 修士 2 回生） 中村正裕（京都大学工学研究科 修士 1 回生） 由田拓真（京都大学文学部 3 回生） 藤田優希（京都大学教育学部 1 回生） 清水亮佑（京都大学法学部 2 回生） 村田政弥（京都大学工学部 3 回生） 春井理沙（京都大学医学部 1 回生） 伴野力斗（京都大学理学部 3 回生）
写真撮影	大森貴生
監修	「国民との科学・技術対話」ワーキンググループ



6-3. 準備スケジュール

2014 年	6 月	会場予約（京都大学百周年時計台記念館）
2015 年	6 月 上旬	第 1 回ミーティング（昨年度振り返り、今年度企画検討）
	中旬	第 2 回ミーティング、総長レク
	下旬	第 3 回ミーティング（企画決定）
	7 月 上旬	第 4 回ミーティング 京大生協・附属図書館・府立図書館打合せ 出展者募集チラシ作成・ウェブ作成・公募開始 後援依頼（教育委員会）、ウェブサイト・SNS 公募情報アップ
	中旬	出展要項作成 第 5 回ミーティング（各企画担当者決定）
	下旬	座談会タイトル決定 出展申し込みフォーム作成 プレスリリース・送り状作成
	8 月 上旬	出展公募締切、高校出展審査 学生アルバイト募集開始 プレスリリース送付
	中旬	第 6 回ミーティング（参加研究者決定、参加高校決定） 高校への結果通知、参加研究者・高校への出展要項・出展申込フォーム送付 京大 HP イベント告知掲載依頼
	下旬	アカデミックデイウェブサイト コンテンツ入力開始 推薦図書リスト作成開始 第 7 回ミーティング（進捗状況） チラシ・ポスター送付、学際センターML 等告知掲載依頼
	9 月 上旬	出展申込フォーム提出締め切り ポスター・ちゃぶ台の詳細決定 事前説明会・アルバイト説明会（7 日、10 日） アカデミックデイウェブサイト コンテンツ入力・SNS 発信 出展ブースの配置決定、最終案内作成 第 8 回ミーティング（進捗状況、最終案内確認）
	中旬	最終案内送付 会場レイアウト作成、参加研究者 WEB アンケートのデザイン作成 当日運営スタッフ人数・役割調整 記者クラブ訪問
	下旬	当日配布資料作成（諸注意事項、ドリンクチケット、名札） 第 9 回ミーティング（最終確認）
	10 月 1 日	中吊り開始（4 日まで）
	3 日	夕方設営準備
	4 日	京都大学アカデミックデイ 2015
	中旬	報告書たたき台作成開始、学生レポート提出、参加研究者 WEB アンケート
	下旬	アカデミックデイウェブサイト 事後コンテンツ入力開始 出展ポスター KURENAI 登録
	11 月	アカデミックデイウェブサイト 更新・公開
	12 月	WEB にて座談会レポート掲載（K. U. RESEARCH） 報告書送付

6-4. デザイン・制作物スケジュール

		出展募集チラシ	ノベルティ	開催チラシ・ポスター	会場配置案・会場サイン・当日プログラム	来場者アンケート
2015 年	7 月 上旬	作成 ↓				
	中旬	納品				
	下旬					
	8 月 上旬		検討開始 ↓	作成 ↓		
	中旬			入稿・印刷 (外部発注)	作成 ↓	
	下旬		外部発注 ↓	納品		
	9 月 上旬					作成 ↓
	中旬				入稿 ↓	入稿 ↓
	下旬		納品		納品	納品

京都大学アカデミックデイ 2015

『研究者の本棚』ブックリスト

〈目次〉

A 今の仕事（研究、進路）を選ぶきっかけになった本	p. 110
B 今ハマっている本（誰かこの本について話したい）	p. 116
C 若者にお勧めしたい本	p. 120
D 自分の研究に関連して紹介したい本	p. 128
山極総長の推薦図書	p. 137

後援：京都大学生協同組合

協力：京都府立図書館、京都大学附属図書館

A 今の仕事（研究、進路）を選ぶきっかけになった本

『書名』（著者名、出版社名）※京都府立図書館で貸し出し可能

①推薦者のコメント

②出展代表者（所属）「出展ブース番号：出展タイトル」

『力学 増訂第3版-ランダウ=リフシッツ理論物理学教程』（レフ・ダヴィドヴィッチ・ランダウ エフゲニー・ミハイロヴィッチ・リフシッツ 広重徹、東京図書）※

①有名なシリーズの第1弾。大学1年生のときは大学物理が難しすぎてもう無理だと挫折感を味わったが、気を取り直して2年生後半から1年ぐらいかけて頑張って読んだ本。難しかったがその分、物理学の面白さを垣間見れた。ランダウ&リフシッツのシリーズは他にも多数ある（もちろんもっと難しい）。

②潘晟（京都大学理学研究科）「No.1：ニュートリノで解く宇宙の謎」

『部分と全体』（ヴェルナー・カルル・ハイゼンベルク 山崎和夫、みすず書房）※

①哲学を勉強しているひとから勧められた一冊。ハイゼンベルクの自伝となっていて、偉大な物理学者たちの対話を垣間見ることができます。彼らがどんな景色を見て、なにを考えたのか、読むたびにあたらしい発見のある本です。読み応えはかなりのありますが、章ごとでも十分に読めると思います。

②潘晟（京都大学理学研究科）「No.1：ニュートリノで解く宇宙の謎」

『電子立国日本を育てた男-八木秀次と独創者たち』（松尾博志、文藝春秋）※

①理学部に在学していた時に読んだ分厚い本。研究ってなんて面白いんだろうと思いました。当時流行っていた「電子立国日本」の礎は、昭和の初めに活躍した八木秀次を初めとする研究者によって作られたという話。研究者が研究に命をかけている様子が感じられました。

②掛谷一弘（京都大学工学研究科）「No.3：高温超伝導テラヘルツ光源の開発」

『元素の小辞典』（高木仁三郎、岩波書店）

①個性豊かな100以上の元素をどのように組み合わせさせて使っていくか、それが化学の醍醐味。そんな元素達に纏わるエピソードをまとめた本です。小学生からでも手軽に化学を楽しめます。

②北川進（京都大学物質-細胞統合システム拠点）「No.4：ナノ空間の世界と化学」

『酵素反応解析の実際』（広海啓太郎、講談社）

①なし②滝田禎亮（京都大学農学研究科）「No.6：酵素反応はどこまで正確か？」

『耐熱合金のおはなし』（田中良平、日本規格協会）

①高温耐熱材料がいかにCO2削減、省エネルギーに寄与しているか、どのようにして材料設計が行われているのかなどについて初心者にもわかりやすく書かれた本で、非常に感銘を受けた。

②乾晴行（京都大学工学研究科）「No.7：炎を制する-超耐熱構造材料」

『マヤ文字解説』（マイケル・D. コウ 武井摩利 徳江佐和子、創元社）※

①マヤ文字は長い間純粋な象形文字で解説は不可能と考えられてきました。しかし、ひらがなと漢字のように表音文字と表語文字と組み合わせであることが分かり、最近解説が一気に進みました。学会の常識を若き研究者たちの努力が覆す過程は圧倒されます。

②笠木雅史（京都大学文学研究科）「No.9：意図が先か、行為が先か」

『人道的介入-正義の武力行使はあるか』（最上敏樹、岩波書店）※

①大規模暴力に苦しむ人民のために、武力で介入することは正当化されるかという問題について、考えるきっかけとなった本。

②越智萌（京都大学法学研究科）「No.10：目を背けたい世界の大規模犯罪のその後」

『クリティカル・シンキング練習帳』（M. ニール・ブラウン、PHP研究所）

①研究に必要な、批判的な見方の方法論について学べる本。常識や偏見にとらわれずに自分の意見を言うことなら、私にもできる、と思わせてくれた本。

②越智萌（京都大学法学研究科）「No. 10：目を背けたい世界の大规模犯罪のその後」

『旅をする木』（星野道夫、文藝春秋）※

①氷たちが沈黙する雪原の真中で、一本の老木が静かに折れた。氷河に落ちた老木はそのゆるやかな流れに乗り、アラスカの凜とした景色の中をカリブーの群れやオーロラのゆらめきと交感しながら旅を続ける。アラスカに魅せられた写真家、星野道夫が描く動物、植物、そして人々の苦労と喜び。彼の真直ぐで物静かな語り口は、遥か彼方の雪原を私の心に浮かび上がらせ、フィールドでの暮らしへの憧れを強めた。（本郷）

②中川尚史（京都大学理学研究科）「No. 13：映像が捉えた野生霊長類の変わった生態」

『チンパンジーの政治学—猿の権力と性』（フランス・ド・ヴァール 西田利貞、産経新聞出版）※

①ドラマ『半沢直樹』は好きですか？人間だけでなく動物の社会にも、権力をめぐるドロドロした争いとドラマがある。動物園のチンパンジーだって、毎日社会の荒波にもまれ、必死に生きている。ドラマのてん末に衝撃を受けること間違いなし！人間も動物の一種であることを、この本が気付かせてくれた。（田島）

②中川尚史（京都大学理学研究科）「No. 13：映像が捉えた野生霊長類の変わった生態」

『シンボル形式の哲学』（エルンスト・カッシーラー 木田元、岩波書店）※

①哲学者カッシーラーによる古典的名著。言語、神話的思考、認識の現象学というテーマに沿って、膨大な資料を駆使しつつ、人間精神の構造と普遍性に迫っていきます。作者と壮大な人類史をめぐる旅に出ているような感覚にとらわれました。すべてを知りたいが、なかなかそれがかなわない人類学に、1つの理想型を提供してくれているように思います。

②高田明（京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科）「No. 14：教えること、学ぶこと：人類学の挑戦」

『城砦』（アーチボルド・ジョーゼフ・クロニン 竹内道之助、三笠書房）※

①医者やって金儲けするするのも魅力的だけど、人生の最後に反省しようと思った→で、研究者になりました。

②松田道行（京都大学医学研究科）「No. 15：顕微鏡と数学で生命の謎に挑む」

『複雑系—科学革命の震源地・サンタフェ研究所の天才たち』（M. ミッチェル・ワールドロップ 田中三彦 遠山峻征、新潮社）

①2000年頃、何気なく購入して読んだこの本が、それまで自分が発見した不思議な化学現象が複雑系事象として理解できることを示唆してくれた。これにより、メカニズムの解明がおおいに進展した。

②田村類（京都大学人間・環境学研究科）「No. 16：磁石に応答して動く有機液晶物質の発見」

『シリーズ生命倫理学 第17巻 医療制度・医療政策・医療経済』（今中雄一 大日康史 今中雄一、丸善出版）※

①なし②今中雄一（京都大学医学研究科）「No. 18：医療の質の地域格差を考えよう」

『現代倫理学入門』（加藤尚武、講談社）

①学部生のときに読んで倫理学を学ぶことにしました。現代の社会的問題を考える上で哲学が重要であることを教えてくれる本です。

②児玉聡（京都大学文学研究科）「No. 21：ゲノム編集の倫理について考える」

『沈黙の春』（レイチェル・カールソン著、青樹繁一訳、新潮社）※

①低リスクであり、便利で使いやすいと考えられていたものが、場合によっては、生体濃縮され、人間を含めた生態系に毒性をもたらす可能性を示唆した歴史的な名著。自分自身の研究の方向を考える参考になりました。

②佐藤文彦（京都大学生命科学研）「No. 22：ゲノムの中から薬づくりの道具を探す」

『知的生活の方法』（渡部昇一、講談社）※

①渡部昇一氏の名著。知識人とはどのような人間なのか、そこに近づくにはどのような生活を送ったらよいのかを教えてくださいましたのが本書です。その領域にはまだまだ程遠い私ですが、数々の悩みをやり過ごしながらも、研究と知識で飯を食う生活に憧れを持ち続けることができたのは、本書のおかげだったと今にして思います。絶版ですが、本書の続編「続・知的生活の方法」（講談社現代新書）の方が個人的には好きで、こちらは古書で現在も流通しています。

②薮塚武史（京都大学エネルギー科学研究科）「No. 25：骨は水から作られる～生物の営みに学ぶ」

『医学生』（南木佳士、文藝春秋）※

①著者が秋田大学医学部で実際に医学生だったころをモチーフにして書いたとされる名作中の名作。私は医学部を志

したことはありませんでしたが、今にして思えば、本書が医学のお手伝いをする「生体材料学」という分野を志すきっかけの一つだったように思います。エリート養成機関が舞台の話にしては実に泥臭く、切ないエピソードが満載です。人の命をあずかる仕事に就くことの大変さが、内臓をえぐられるかのようなリアルな文章で描かれています。

②薮塚武史（京都大学エネルギー科学研究科）「No. 25：骨は水から作られる～生物の営みに学ぶ」

『青きドナウの乱痴気』（良知力、平凡社）※

①1948年ウィーン革命は、教科書で習う歴史からこぼれおちたひとびとの革命でした。おんなたちも含まれます。おんなたちはなぜ銃をとらなければならなかったか。緻密な下調べのもと、誰もが十分楽しめるスリリングな社会史の本です。こんな本を書きたい！

②茶園敏美（京都大学アジア研究教育ユニット）「No. 27：占領期二都物語京都・神戸の平和と人権」

『複合材料—強靱化の理論と応用』（アンソニー・ケリー 村上陽太郎、丸善出版）

①材料どうしを組み合わせると元の材料以上の性能が得られる仕組みが書かれている。

②大石毅一郎（京都大学学際融合教育研究推進センター）「No. 33：元素戦略プロジェクト」

『ドラえもん（1～45）』（藤子・F・不二雄、小学館）※

①振り返ってみると、科学へのあこがれは小さい時に読んだドラえもんが最初のような気がします。2112年のドラえもん完成までに、タケコプターは完成するのでしょうか？

②増田亮（京都大学原子炉実験所）「No. 35：放射線と原子核は使えよう」

『物理の散歩道』（ロゲルギスト、岩波書店）※

①日常の事象をさまざまな角度から考えることの面白さがわかります。お勧めです。

②増田亮（京都大学原子炉実験所）「No. 35：放射線と原子核は使えよう」

『TRONを創る』（坂本健、共立出版）

①企業に就職して、コンピュータ開発の夢を実現させている頃、アップルコンピュータのような統一感のある操作性を追求していました。MS-DOSマシンにBTRON仕様を実装した試作機も作っていました。技術立国日本と言われ、企業のコンピュータ開発は、大いなる夢と将来があった時代です。

②江谷典子（京都大学医学研究科）「No. 38：ICTが守るビッグデータ応用の創薬」

『Introduction to Superconductivity』（Michael Tinkham、Dover Publications）

①学部以上の知識を必要とするので推薦はしないが、今の仕事を選ぶきっかけになった本である。

②市川能也（京都大学化学研究所）「No. 40：新材料を創る」

『日常という名の鏡—ドキュメンタリー映画の界隈』（佐藤真、凱風社）※

①この本がきっかけで、映像を通して「日常」をみつめるとはどういうことか、考えるようになりました。今も繰り返し読み続けている本です。『阿賀に生きる』（映画）と一緒にぜひ手にとってみてください！

②直井里予（京都大学東南アジア研究所）「No. 42：映像で東南アジアの魅力を発見しよう！」

『森の回廊—ビルマ辺境民族開放区の1300日』（吉田敏浩、NHK出版）※

①ビルマの少数民族に興味を持ち始めるきっかけとなった本です。

②直井里予（京都大学東南アジア研究所）「No. 42：映像で東南アジアの魅力を発見しよう！」

『木簡・竹簡の語る中国古代：書記の文化史』（富谷至、岩波書店）※

①中国古代の甲骨や青銅器など書写材料の変遷を論じ、特に漢代で行政文書で用いられた竹簡について簡明に論じられています。発表分担者は学部三回生の時にこの本を読み、中国古代史のうち、竹簡を史料として用いた研究を志し、今に至るまでその研究を続けています。発表分担者の研究・進路に最も大きな影響を与えた本の一つです。

②平松明日香（京都大学文学研究科）「No. 43：三国時代前夜：後漢王朝崩壊に至る過程」

『シルクロード糸綯之路 第3巻 幻の楼蘭・黒水城』（NHK出版）※

①20世紀初頭、列強諸国は中央アジアにこぞって探検隊を派遣し、非常に多くの史料を収集するに至りました。発表分担者は中学時代にNHKのシルクロードシリーズを視聴したのですが、特に西夏の都市、黒水城の落城とそれにまつわる人物の悲哀を描いた回が印象的でした。問題点を指摘されることもあります、シルクロードロマンを描いたこの本は、中国史に興味を懷いた原点として紹介しておきたい本ではありません。

②平松明日香（京都大学文学研究科）「No. 43：三国時代前夜：後漢王朝崩壊に至る過程」

『学研の図鑑 宇宙 新訂版』（学研マーケティング）※

①宇宙すげー、ロケット格好良いなあ。小学校の理科の授業での太陽観測と合わせて、非常に刺激になった。天文ガイド（誠文堂新光社）を買うようになり、下手な天体写真を撮るようになった。

②田中貴浩（京都大学理学研究科）「No. 49：重力波がひらく新しい物理 2015」

『時空のさざ波—重力波を求めて』（坪野公夫、丸善出版）

①この本がきっかけで、大学院の入試の面接で重力波の話をしました。そのときは自分が重力波の研究をすることになるとは思ってもいなかったのですが。

②田中貴浩（京都大学理学研究科）「No. 49：重力波がひらく新しい物理 2015」

『ゴリラとピグミーの森』（伊谷純一郎、岩波書店）※

①日本の霊長類学の創始者のひとりである著者が、アフリカで実施したゴリラの現地調査を克明に描きつつ、同時にピグミーの人びととの交歓の日々とをあざやかに語った名著。

②太田至（京都大学）「No. 50：アフリカの潜在力とは何だろうか？」

『MASTER KEATON完全版（1～12）』（浦沢直樹 勝鹿北星 長崎尚志、小学館）

①なし②宮野公樹（京都大学学際融合教育研究推進センター）「No. 51：産学連携の原形」

『流れとよどみ—哲学断章』（大森荘蔵、産業図書）

①高校生のときにこの本を読んだことが、哲学を学びたいと考えるきっかけのひとつになりました。哲学的問題が日常生活の場で姿を現すさまが平易なことばで描き出されています。

②北村直彰（京都大学文学研究科）「No. 52：哲学的説明—現代形而上学の観点から」

『論理哲学論考』（ルードヴィヒ・ヴィトゲンシュタイン 野矢茂樹、岩波書店）※

①卒業論文でこの本について論じるなかで、より専門的に哲学を研究したいと考えるようになりました。思考可能性の限界についての鋭い洞察が独自のスタイルで凝縮されています。

②北村直彰（京都大学文学研究科）「No. 52：哲学的説明—現代形而上学の観点から」

『脳のなかの幽霊』（V. S. ラマチャンドラン サンドラ・ブレイクスリー 山下篤子、角川書店）※

①中枢神経の障害によって生じる奇妙で興味深い症状の実例を挙げつつ、脳の不思議について紹介・解説されている一冊です。著者自身が神経科学者でもあります。どちらかと言えば心理学的な切り口かつ平易な表現で書かれており、医学的な専門知識が無くとも楽しく読むことができると思います。

②上村紀仁（京都大学医学研究科）「No. 53：パーキンソン病をモデルする」

『宇宙からの帰還』（立花隆、中央公論新社）※

①小学生の自分にとって、ロボットが戦うSFアニメの世界でしかなかった宇宙という環境について、まったく異なる見方を与えてくれたことを強く覚えている。

②延原章平（京都大学情報学研究科）「No. 55：お魚モーションキャプチャ」

『モモ』（ミヒヤエル・エンデ 大島かおり、岩波書店）※

①時間とは何か、クロノスとカイロスの違い、など子供のころは子供なりに、大人になってからも改めて考えさせられる本。

②延原章平（京都大学情報学研究科）「No. 55：お魚モーションキャプチャ」

『海底2万マイル』（ジュール・ヴェルヌ 加藤まさし 高田勲、講談社）※

①未知の領域である海底世界を、リアルに描写された潜水艦で冒険するSF小説。後になって、約150年前に書かれた作品と知って驚いた。

②延原章平（京都大学情報学研究科）「No. 55：お魚モーションキャプチャ」

『利己的な遺伝子』（リチャード・ドーキンズ 日高敏隆、紀伊国屋書店）※

①遺伝子の多様化（進化）と生物の進化を考えさせるわかりやすい読み物

②七田芳則（京都大学理学研究科）「No. 59：脳で感じる光」

『神々の指紋 上』（グレーアム・ハンコック 大地舜、翔泳社）※

①その内容については批判もありますが、本書によりこれまでにないほどに知的好奇心を掻き立てられたことを覚えています。本書を読んだ後、古代の文明、遺跡、神話、言語等に大きな関心を抱くようになり、古典文献学の世界に足を踏み入れたような気がします。現在はサンスクリット美文学と文法学を研究領域としていますが、将来的に世界の古代文明研究に何らかの形で携わりたいと考えています。

②川村悠人（京都大学文学研究科）「No. 60：古典サンスクリット詩の樹海一美の探訪」

『宇宙兄弟（1～26）』（小山宙哉、講談社）

①2014年にわたしの所属している学会で、JAXA 筑波宇宙センターに行って宇宙開発について学ぶ、という企画がありました。わたしはただ、大好きなこの漫画の舞台を見てみたいというミーハーな動機でそこに参加したのですが、それが縁でいま宇宙総合学研究ユニットという部署に勤め、「宇宙の哲学」などという途方もない研究テーマに挑戦することになりました。

②呉羽真（京都大学宇宙総合学研究ユニット）「No. 61：ひとは宇宙へ飛び立つべきか？」

『知的好奇心』（波多野誼余夫・稲垣佳世子、中央公論新社）※

①内発的動機づけについて解説した本。この本を高校時代において感銘を受けました。

②楠見孝（京都大学教育学研究科）「No. 62：なつかしさの心理学：思い出ときづな」

『愛の科学』（賀川豊彦）

①私たちの生きている「科学主義」時代に、美学的な人間性を訴える

②Stig Lindberg（京都大学文学研究科）「No. 65：キリスト者賀川豊彦と京都」

『時代を超えた思想家賀川豊彦』（林啓介）

①読みやすい他、総括的

②Stig Lindberg（京都大学文学研究科）「No. 65：キリスト者賀川豊彦と京都」

『脳を究める一脳研究最前線』（立花隆、朝日新聞出版）

①私が脳の研究を始めた約20年前の最先端の（まじめな）成果が、一般の読者向けにわかりやすく書かれています。最近の脳科学の本と比べてみると、この20年間の脳研究の進歩を知ることができるかもしれません。

②水原啓暁（京都大学情報学研究科）「No. 66：リズムでつながる脳」

『黒い虹―阪神大震災遺児たちの一年』（あしなが育英会編、廣済堂出版）※

①兵庫県南部地震の被害を目の当たりにしたことは、地震の研究をすることへの大きな同期づけになりました。

②加納靖之（京都大学防災研究所）「No. 67：歴史にまなぶ大地震」

『地震と断層の力学 第二版』（クリストファー・H. ショルツ 柳谷俊 中谷正生、古今書院）※

①英語版はゼミで必死に勉強した。自分の指導教員だった先生が思いを込めて翻訳している。

②加納靖之（京都大学防災研究所）「No. 67：歴史にまなぶ大地震」

B 今ハマっている本（誰かはこの本について話したい本）

『書名』（著者名、出版社名）※京都府立図書館で貸し出し可能

①推薦者のコメント

②出展代表者（所属）「出展ブース番号：出展タイトル」

『罪と罰』（フォードル・ミハイロヴィチ・ドストエフスキー、新潮社）※

①文学部に文学（特にロシア文学）が大好きな友達がいて、彼が高校時代から絶賛おすすめしてきた本。最近、読み始めた。どぎつい印象とは違って意外と読みやすくてしかも面白い。

②潘晟（京都大学理学研究科）「No. 1：ニュートリノで解く宇宙の謎」

『ゼロ・トゥ・ワン-君はゼロから何を生み出せるか』（ピーター・ティール、NHK出版）※

①PayPalの創業者である著者が起業について書いた本。何に対しても、リスクを取って新しいことを始めなければならないという著者の姿勢は私たちに必要なことであるのは間違いないと思う。

②掛谷一弘（京都大学工学研究科）「No. 3：高温超伝導テラヘルツ光源の開発」

『元素戦略—科学と産業に革命を起こす現代の錬金術』（中山智弘、ダイヤモンド社）※

①「材料を制する者が世界を制する。」元素を原子スケールでマニピュレートすることで、これまでにない素晴らしい材料をいかに作り上げるかを考えさせられる。

②乾晴行（京都大学工学研究科）「No. 7：炎を制する—超耐熱構造材料」

『ジェノサイド（上・下）』（高野和明、角川書店）※

①SF小説と思いきや、詳細な取材や参考文献の検討を通じて、コンゴの密林で繰り広げられる児童兵をつかった虐殺やアメリカ軍による特殊作戦といった、世界の裏側を描いています。

②越智萌（京都大学法学研究科）「No. 10：目を背けたい世界の大規模犯罪のその後」

『13 階段』（高野和明、講談社）※

①メインは死刑執行までに冤罪を暴くという推理小説ながら、現代日本が抱える死刑制度における諸問題や、保護司や保護観察の制度など、刑事司法の制度について学べる本。

②越智萌（京都大学法学研究科）「No. 10：目を背けたい世界の大規模犯罪のその後」

『群れはなぜ同じ方向を目指すのか？：群知能と意思決定の科学』（レン・フィッシャー 松浦俊輔、白揚社）※

①群れることで、生物はひとりではできないことも成し遂げられる。「大群イナゴの長距離移動を可能にする単純なルール」「アリの最短ルート発見メカニズム」から、「多数派が正になる条件」「スタジアム内で火事に巻き込まれた時に取るべき行動」「100人の候補者から優れた社員を面接で選ぶには？」まで、人間を含めた様々な生物がいかに集団の力を用い、また用いるべきなのかについてのエキサイティングな良書。（本郷）

②中川尚史（京都大学理学研究科）「No. 13：映像が捉えた野生霊長類の変った生態」

『贈与論』（マルセル・モース 吉田禎吾 江川純一、筑摩書房）

①誰かに「プレゼント」をおくったり、もらったりした経験は誰にでもあるだろう。モースは膨大な文献を調べ、文化によらず人類社会には「贈り物」にまつわる共通点を発見し、背後で人を動かしている制度や原則をあぶり出した。私たちは、チンパンジーやゴリラ、オランウータンによる食物分配の研究を通して、人類の贈与の特徴について考えている。（田島）

②中川尚史（京都大学理学研究科）「No. 13：映像が捉えた野生霊長類の変った生態」

『私とは何か「個人」から「分人」へ』（平野啓一郎、講談社）※

①人間は「individual＝それ以上分けられない存在」と言われますが、矛盾に満ちています。私はそれが人間の幅を作っていると思っているのですが、「一貫しないことが同一人物の中に共存している」ことは、よくないことであり非難の対象になることもあります。なんか変だよなあと思っていたところ、平野さんは「10人の人と対応するとき、10通りの自分がいて、個人はその集合体である」と考えたそうで、思わず膝を打ちました。

②児玉聡（京都大学文学研究科）「No. 21：ゲノム編集の倫理について考える」

『世界で一番美しい元素図鑑』(セオドア・グレイ ニック・マン 武井摩利、創元社) ※

①TBS「マツコの知らない世界」でも取り上げられた、いま話題の一冊です。化学とは、物質の中身がどうなっているのかを学び、さらにそれを新しく生み出すための学問です。しかし高等教育では、実際の物質を見たりする機会がほとんどないまま、元素記号や化学式だけを頭に詰め込んで「化学を経験した」ことにしています。皆さんはカルシウムを実際に見たことはありますか？ネオンはなぜランプに使われているかご存知ですか？そのような諸々の欲求に、本書は膨大な数の写真を用いてわかりやすく答えてくれます。インテリアとしてもおすすめ。

②薮塚武史(京都大学エネルギー科学研究科)「No. 25: 骨は水から作られる～生物の営みに学ぶ」

『升田幸三の孤独』(河口俊彦、マイナビ) ※

①最近、将棋を指さずに観て楽しむ「観る将」と呼ばれる将棋ファンが、若い女性を中心に増えています。河口俊彦八段は将棋界きっての文筆家として長年活躍していました(2015年1月逝去)。本書は小説新潮に連載されたエッセイをまとめたもので、大山・中原・谷川・羽生といった棋界のスーパースターに焦点をあてたものではなく、覇道を歩んだ異能派の棋士や、才能は認められながらもトップに立てなかった棋士の悲哀などに焦点が当てられており、興味深い一冊となっています。

②薮塚武史(京都大学エネルギー科学研究科)「No. 25: 骨は水から作られる～生物の営みに学ぶ」

『あな』(谷川俊太郎(著)、和田誠(イラスト)、福音館書店) ※

①この絵本に出てくる主人公の男の子が、なんだかとても研究者っぽい、と思いながら読みました。出展代表者の水町より。

②水町衣里(京都大学物質－細胞統合システム拠点)「No. 37: いい対話ってどんな対話？」

『差異とつながりの民族誌—北タイ山地カレン社会の民族とジェンダー』(速水洋子、世界思想社) ※

①研究の際に調査対象者を「見知らぬ他者」としてではなく、自分自身の日常の生の実践とのつながりを見出しながら理解することの大切さをこの本から教えてもらいました。

②直井里予(京都大学東南アジア研究所)「No. 42: 映像で東南アジアの魅力を発見しよう！」

『民族を読む—20世紀のアボリア』(徐京植、日本エディタースクール出版部)

①「祖国というのは人間の生き方の態度のことなのだ」という著者の言葉が響きます。

②直井里予(京都大学東南アジア研究所)「No. 42: 映像で東南アジアの魅力を発見しよう！」

『支那の体臭』(後藤朝太郎、バジリコ)

①戦前の日本で、中国の大衆文化に興味を持ち、中国大陸津々浦々を旅してまわった一人の研究者がいました。中国の銭湯体験、尼寺での接待、中国宿での宿泊などなど、一般の旅行者ではとても回れないようなマイナーな場所を次々と紹介してくれています。それも、学術研究などという固い視点ではなく、著者が自分の興味と好奇心を原動力に書いているためか、非常に読みやすいです。

②平松明日香(京都大学文学研究科)「No. 43: 三国時代前夜: 後漢王朝崩壊に至る過程」

『双書哲学塾 共生から』(川本隆史、岩波書店)

①ケア、教育、臨床、エコロジーなどの問題群をとりあげて、人間が共生するとはいかなる事態であるのかという哲学的課題を、倫理学の立場から平易な言葉で説きおこしています。

②太田至(京都大学)「No. 50: アフリカの潜在力とは何だろうか？」

『あるようにあり、なるようになる—運命論の運命』(入不二基義、講談社)

①「すべてのことは必然的に起こっている」という主張(運命論)のまったく新たな姿を浮かび上がらせようとする本です。きわめて強靱でスリリングな思考の展開を味わうことができます。

②北村直彰(京都大学文学研究科)「No. 52: 哲学的説明—現代形而上学の観点から」

『うんこがへんないきもの』(早川いくを てらにしあきら、角川書店)

①かねてから「動物の珍しい生態を擬人化したら面白いのではないか？」と思っていたら、この本が既にやっていました。

②飯田敦夫(京都大学再生医科学研究所)「No. 57: 赤ちゃんを産む！魅惑の胎生魚ワールド」

『はたらく細胞』(清水茜、講談社)

①細胞を擬人化して、からだの仕組み（1巻は免疫系）を描写しています。1巻は血球や免疫系の比較的「よく動く」細胞が登場しましたが、他の「動かない」細胞が登場するであろう続刊の描写にも大いに期待しています。

②飯田敦夫（京都大学再生医科学研究所）「No. 57：赤ちゃんを産む！魅惑の胎生魚ワールド」

『インダス—南アジア基層世界を探る』（長田俊樹編、京都大学学術出版会）※

①読み始めたばかりなので語弊があるかもしれませんが、多くの謎を残すインダス文明について、多様な視点からの最新の研究成果が集約されたものと考えます。昔から古代文明に興味があった私にはたまらない一書です。日本語で読めることに感謝します。

②川村悠人（京都大学文学研究科）「No. 60：古典サンスクリット詩の樹海—美の探訪」

『今世紀で人類は終わる？』（マーティン・リース 堀千恵子、草思社）

①終わっちゃうかもしれないらしいです。大変だ。宇宙物理学者が書いた本なのですが、21世紀の人類に襲いかかる（かもしれない）カタストロフについて、とてもわかりやすく解説しています。

②呉羽真（京都大学宇宙総合学研究ユニット）「No. 61：ひとは宇宙へ飛び立つべきか？」

『パンダが来た道—ひとと歩んだ150年』（ヘンリー・ニコルズ 池村千秋 遠藤秀紀、白水社）※

①研究とは（今のところ）関係ありませんが、最近読んで面白かった本です。パンダというのきな動物が人間の都合に翻弄されてきた経緯を、パンダの生息地である中国の浮沈や保護活動の歴史・現状と合わせて解説しています。はたしてパンダは哲学のテーマになるのでしょうか？宇宙の哲学が一段落したら（いつになるやら……）、ぜひ考えてみたいです。

②呉羽真（京都大学宇宙総合学研究ユニット）「No. 61：ひとは宇宙へ飛び立つべきか？」

『天人五衰 改版 豊饒の海 第4巻』（三島由紀夫、新潮社）

①輪廻転生をテーマにした緻密な構成と文体の物語の中で、なつかしさ、デジャビュが描かれています。

②楠見孝（京都大学教育学研究科）「No. 62：なつかしさの心理学：思い出ときづな」

『英知の教育』（Jクリシュナムルティ、春秋社）

①なし②Stig Lindberg（京都大学文学研究科）「No. 65：キリスト者賀川豊彦と京都」

『わたしは「いま、この瞬間」を大切に生きます』（エックハルト・トール、徳間書店）

①非常に現実的・進歩的なアドバイス

②Stig Lindberg（京都大学文学研究科）「No. 65：キリスト者賀川豊彦と京都」

『日本の地震予知研究130年史 明治期から東日本大震災まで』（泊次郎、東京大学出版会）※

①分厚いけれど、各時代の背景や、研究の方向性の変更が結局は繰り返しているという指摘が鋭い。（服装の流行などとも似てるかも。）

②加納靖之（京都大学防災研究所）「No. 67：歴史にまなぶ大地震」

C 若者にお勧めしたい本

『書名』（著者名、出版社名）※京都府立図書館で貸し出し可能

①推薦者のコメント

②出展代表者（所属）「出展ブース番号：出展タイトル」

『イシューからはじめよ—知的生産の「シンプルな本質」』（安宅和人、英治出版）※

①この本で言っていることはどんな分野・仕事でも使える（使うべき）ことだと思う。研究者志望でもバリバリの商社マン志望でも読むと良いと思う。著者は有名なマッキンゼー出身。

②潘晟（京都大学理学研究科）「No. 1：ニュートリノで解く宇宙の謎」

『ふたりの微積分—数学をめぐる文通からぼくが人生について学んだこと』（ステイーヴン・ストロガッツ、岩波書店）

①非線形現象の解析に関して世界的に有名な数学者が高校時代に教わった数学の先生との30年に渡る文通内容、同時に進んでいく彼自身の心の動きについて赤裸々に語った書。ひょっとしたら自分も高校時代の恩師と今まで文通を続けていて、そうすると今の仕事も変わっていたかもしれない、と思わせるところが青春小説である。

②掛谷一弘（京都大学工学研究科）「No. 3：高温超伝導テラヘルツ光源の開発」

『ロバート・オッペンハイマー —愚者としての科学者』（藤永茂、朝日新聞出版）

①オッペンハイマーは非常に優秀な若者であって、恵まれた研究者としてのキャリアを積んでいった。人類最大のプロジェクト、マンハッタン計画の中心人物となったオッペンハイマーの葛藤は科学の最前線で生きる私たちも少しは感じるところです。

②掛谷一弘（京都大学工学研究科）「No. 3：高温超伝導テラヘルツ光源の開発」

『化学物質はなぜ嫌われるのか』（佐藤健太郎、技術評論社）

①科学には負の側面が付き物ではあるが、時として根拠のない偏見により強調されがちである。科学技術の恩恵とリスクに対してどのように向き合っていくべきか、本書ではそうした負の側面の代表格と言える「化学物質」に焦点を当てて分かりやすく解説している。

②北川進（京都大学物質—細胞統合システム拠点）「No. 4：ナノ空間の世界と化学」

『航空の世紀』（吉川康夫、技報堂出版）

①航空機における耐熱材料の重要性を系統的に理解するのに最適の書。

②乾晴行（京都大学工学研究科）「No. 7：炎を制する—超耐熱構造材料」

『復讐と赦しのあいだ—ジェノサイドと大規模暴力の後で歴史と向き合う』（マーサ・ミノウ、信山社出版）

①悲惨な大規模犯罪の、被害者を癒す本当に有効な方法とは何かについて考える、インスピレーションを与えてくれる本。

②越智萌（京都大学法学研究科）「No. 10：目を背けたい世界の大規模犯罪のその後」

『なぜ、世界はルワンダを救えなかったのか—PKO司令官の手記』（ロメオ・ダレール、風行社）※

①ルワンダのジェノサイドに介入したPKO司令官が見た現実を伝えてくれる本。

②越智萌（京都大学法学研究科）「No. 10：目を背けたい世界の大規模犯罪のその後」

『宇宙は何でできているのか—素粒子物理学で解く宇宙の謎』（村山斉、幻冬舎）※

①ベストセラーになった基礎物理学の啓蒙書。少し難しいところもありますが、これを読めば科学雑誌の素粒子・宇宙物理関係の記事が楽しく読めるようになるのでは。

②杉山和彦（京都大学工学研究科）「No. 11：基礎物理学を目指す単一イオン光時計」

『理系の子 高校生科学オリンピックの青春』（ジュディ・ダットン 横山啓明、文藝春秋）※

①少し前に読んで印象に残った本で、元気が出ます。アメリカの陽の部分も感じられます。若い人だけでなく、とくに教育に携わっている方にも。

②杉山和彦（京都大学工学研究科）「No. 11：基礎物理学を目指す単一イオン光時計」

『野生動物の行動観察法—実践 日本の哺乳類学』（井上英治・中川尚史・南正人、東京大学出版会）※

①野生動物の行動観察のハウツー本。動物園や野猿公苑などで、この本を片手にいかに動物の行動を観察し、いかに記録していくかを、試してもらいたい。(中川)

②中川尚史(京都大学理学研究科)「No. 13: 映像が捉えた野生霊長類の変わった生態」

『日本のサル学のあした—霊長類研究という「人間学」の可能性』(中川尚史・友永雅己・山極寿一、京都通信社)※

①日本のサル学の明日を担う様々な領域の若手研究者(大学院生から30歳台前半の助教の先生)が、自らの研究について、その内容のみならず、研究を始めたきっかけや苦労話まで論文には書けない、書かない内容を、サル学の「あさって」をになってくれる高校生、大学学部生向けに紹介した本。(中川)

②中川尚史(京都大学理学研究科)「No. 13: 映像が捉えた野生霊長類の変わった生態」

『野生のオランウータンを追いかけて—マレーシアに生きる世界最大の樹上生活者 フィールドの生物学 11』(金森朝子、東海大学出版部)※

①「野生のオランウータンを研究したい」日本に先人がいないゼロの状態から、夢をカタチにした研究者のこれまでの歩み。苦労話だけではなく、自分で決めた夢を、自分の力で実現する喜びを感じとることができる。扉を開ける勇気をもたらえる一冊。(田島)

②中川尚史(京都大学理学研究科)「No. 13: 映像が捉えた野生霊長類の変わった生態」

『スティル・ライフ』(池澤夏樹、中央公論新社)※

①世界に対するみずみずしい感動とそれについてのクールな観察眼が同居しています。

②高田明(京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科)「No. 14: 教えること、学ぶこと: 人類学の挑戦」

『A Wizard of Earthsea』(Ursula K. Le Guin、HMH Books for Young Readers)

①英語の原著にトライしてみたい人は、わかりやすいストーリーの本から始めるのがいいと思います。いまさら子供向けの本なんか読めるかという知識層も英語ならプライドが保てる。この本に出てくる魔法使いは科学者のことだと勝手に思ってます。自戒を込めて何回も読みました。

②松田道行(京都大学医学研究科)「No. 15: 顕微鏡と数学で生命の謎に挑む」

『「複雑系」とは何か』(吉永良正、講談社)※

①複雑系に関する入門書である。

②田村類(京都大学人間・環境学研究科)「No. 16: 磁石に応答して動く有機液晶物質の発見」

『宇宙が始まる前には何があったのか?』(ローレンス・M. クラウス 青木薫、文藝春秋)※

①ビッグバンや物質と反物質の対称性について平易に解説している。

②田村類(京都大学人間・環境学研究科)「No. 16: 磁石に応答して動く有機液晶物質の発見」

『キラル化学—その起源から最新のキラル材料研究まで』(日本化学会、化学同人)

①今日のキラル化学に関する最先端の研究を平易に解説している。

②田村類(京都大学人間・環境学研究科)「No. 16: 磁石に応答して動く有機液晶物質の発見」

『自己組織化と進化の論理—宇宙を貫く複雑系の法則』(スチュアート・カウフマン 米沢富美子 森弘之、筑摩書房)

①非平衡自己組織化の観点から、生命の起源・生物進化・経済システム・民主主義の誕生を解説している。

②田村類(京都大学人間・環境学研究科)「No. 16: 磁石に応答して動く有機液晶物質の発見」

『幹細胞研究ってなんだ』(佐藤恵子 鈴木美香、文学研究科のHPにて無料ダウンロード可)

①ES細胞やiPS細胞などの多能性幹細胞は、医療や創薬の役に立つとして期待が寄せられています。しかし同時に、「永遠の命を目指すのか」などさまざまな問題もあり、一人ひとりが考える必要があります。本書は、女子大生と研究者の会話を通じて、技術を解説し、問題点と考える道筋を示したもので、京大文学研究科のHPに気前よく無料でダウンロードできるように掲載しておりますので、是非アクセスしてください。

<<http://www.cape.bun.kyoto-u.ac.jp/project/project02/>>

②児玉聡(京都大学文学研究科)「No. 21: ゲノム編集の倫理について考える」

『有機農業と遺伝子組換え食品 明日の食卓』(パメラ・C. ロナルド ラウル・W. アダムシャ 椎名隆、丸善出版)※

①有機農業と遺伝子組換え作物は相容れないとおもっていませんか? 実際に、それぞれの専門家(夫婦)が持続的な

農業のありかたについて、実践を交えながら執筆した本の翻訳です。ちょっと前の出版ですが、是非読んで欲しい本です。

②佐藤文彦（京都大学生命科学研）「No. 22：ゲノムの中から薬づくりの道具を探す」

『青春論 改版』（亀井勝一郎、角川書店）

①亀井勝一郎は、戦後の文壇において小林秀雄と並び称された代表的な評論家でした。しかし近年は著作の大部分が絶版となっており、その存在が黙殺に近い形で忘れ去られてしまっています。本書は現代人が軽視しがちな他者への思いやり、はにかみ、羞恥心を持つことの大切さを、著者独特のわかりやすい文章で説いています。ともすると理想主義的にうつる面もありますが、それがかえって新鮮な読後感を残します。心の空気を入れ替えるのに最適な書。

②薮塚武史（京都大学エネルギー科学研究科）「No. 25：骨は水から作られる～生物の営みに学ぶ」

『草枕／二百十日 改版』（夏目漱石、角川書店）※

①「草枕」と「二百十日」という、あまり教科書には取り上げられない作品を組み合わせた一冊。この組み合わせが大変素晴らしい。私はこの2作を音声で聴くのも好きです。「草枕」については日高徹郎氏がWeb上で公開している朗読が、作中の「余」が日高氏に乗り移ったかのように素晴らしく、夜に聴いているとどこかに連れて行かれます。「二百十日」については、名優・橋爪功氏の朗読CDが新潮社より発売されており、作中の圭さんと碌さんの落語のような掛け合いが橋爪氏の絶妙な表現力で再現され、絶品です。

②薮塚武史（京都大学エネルギー科学研究科）「No. 25：骨は水から作られる～生物の営みに学ぶ」

『緑のダムの科学—減災・森林・水循環』（蔵治光一郎 保屋野初子、築地書館）※

①森林が洪水緩和に及ぼす影響には強い社会的な関心があるが、人工の防災構造物とどのような違いがあるのかは理解されていない。本書には、多様な意見が収録されているが、すべて読んで、あなた自身の「緑のダム」に関する見解を見いだしてほしい。

②谷誠（京都大学農学研究科）「No. 29：水と環境をまもる森の働き」

『森林飽和—国土の変貌を考える』（太田猛彦、NHK ブックス）※

①最近里山が荒れているとよく言われるが、木材や薪炭に暮らしを依存していた数十年前までは、むしろ森林はたいへん貧弱で土砂災害も多かった。この歴史を本書によって学んだうえで、森林や林業の今後を考えてゆきたい。

②谷誠（京都大学農学研究科）「No. 29：水と環境をまもる森の働き」

『虚数の情緒—中学生からの全方位独学法』（吉田武、東海大学出版部）※

①考える力を持った人を鍛え上げたいと言う著者の情熱がほとばしる逸品です。

②増田亮（京都大学原子炉実験所）「No. 35：放射線と原子核は使しよう」

『中学や高校の歴史の教科書・資料集・用語集』

①外国人さんと話すときに、自国の歴史や文化・その人の国や周辺国の歴史や文化を知っていると話が弾みます。理系文系関わらず、外国人さんと関わるならば、お勧めです。

②増田亮（京都大学原子炉実験所）「No. 35：放射線と原子核は使しよう」

『女性研究者とワークライフバランス—キャリアを積むことと、家族を持つこと』（仲真紀子 久保（川合）南海子、新曜社）※

①育児休業中にこの本に出会いました。ワークライフバランスと言ってもバランスの取り方は人それぞれ。「こうしなければならない」と思い込まずに、自分に合った方法を試行錯誤しながら見つけるのが大事なんだな。と思いました。女性だけでなく、男性にも眺めて欲しい本です。出展代表者の水町より。

②水町衣里（京都大学物質—細胞統合システム拠点）「No. 37：いい対話ってどんな対話？」

『科学技術Xの謎—天文・医療・文化財あらゆるものの姿をあらわすX線にせまる』（塩瀬隆之 元木環 水町衣里、化学同人）※

①多様な分野の研究者と筆者たちとで、じっくり対話を重ねてつくった本です。きれいな写真もたくさん載っています。出展メンバーの水町&元木より。

②水町衣里（京都大学物質—細胞統合システム拠点）「No. 37：いい対話ってどんな対話？」

『スーパーエンジニアへの道—技術リーダーシップの人間学』（ジェラルド・M. ワインバーグ 木村泉、共立出版）

①プログラマとして、エンジニアとして、働くことは、物作り屋のプライドであります。夢を形にして、製品として、この世に登場させることができるからです。しかし、この幸福を持続するには、やはり、リーダーとなり、この幸福な時間が、長く続くように開拓し、組織を守ることが必要です。

②江谷典子（京都大学医学研究科）「No. 38：ICT が守るビッグデータ応用の創薬」

『世界で一番美しい元素図鑑』（セオドア・グレイ ニック・マン 武井摩利、創元社）

①単に見ているだけでは味気ない面もある元素周期表であるが、本書では写真が多く使われているのでより具体的なイメージを持つことができる。

②市川能也（京都大学化学研究所）「No. 40：新材料を創る」

『Newton 別冊 完全図解周期表』（玉尾皓平 桜井弘（薬学） 福山秀敏、ニュートンプレス）

①上記の書籍（『世界で一番美しい元素図鑑』）よりも少しだけ説明が豊富であり表現が自然である。

②市川能也（京都大学化学研究所）「No. 40：新材料を創る」

『理科系の作文技術』（木下是雄、中央公論新社）※

①「理系だから国語は苦手でもいいし文章は下手でもいい」と考えているとしたら、この本をはじめとした「論文の書き方」の書籍を早い段階で一読しておくことをお勧めする。

②市川能也（京都大学化学研究所）「No. 40：新材料を創る」

『ガリア戦記 改版』（ガイウス・ユリウス・カエサル 近山金次、岩波書店）※

①古典の中には、普遍的なことがいくつも記されています。カエサルの率いるローマ軍のガリア遠征の記録から現代を見つめてみてください。フィールドワークの調査手法の参考にも！

②直井里予（京都大学東南アジア研究所）「No. 42：映像で東南アジアの魅力を発見しよう！」

『社会の喪失—現代日本をめぐる対話』（市村弘正、杉田敦、中央公論新社）※

①「薬害、戦争、国家、境界、国境、難民、差別、原発、冤罪」などの問題にどう向きあっていかなければならないか、たくさんのヒントを与えてくれる本。

②直井里予（京都大学東南アジア研究所）「No. 42：映像で東南アジアの魅力を発見しよう！」

『中国史 上、下』（宮崎市定、岩波書店）※

①これから中国史を学ぶ若者のために書かれた概説書です。中国史を古代・中世・近世・最近世（近代）と四つの時代に区分し、各時代の特徴を鋭く描き出しています。中国史の全時代を研究し、大きな業績を残した宮崎博士にしか書くことのできない不朽の中国通史の概説書だと思います。冒頭の時代区分に関する説明は、中国史のみならず、日本史・西洋史にもその範囲が及び、歴史学に興味を持つ人に第一に読むのを勧められる本です。

②平松明日香（京都大学文学研究科）「No. 43：三国時代前夜：後漢王朝崩壊に至る過程」

『クビライの挑戦：モンゴルによる世界史の大転回』（杉山正明、講談社）

①世界史の授業で、モンゴルは残虐非道で非文明的な帝国であったと教わりました。しかし、杉山先生の本を読んで、モンゴル帝国に対する印象が鮮やかに一変したことを覚えています。杉山先生は、モンゴル帝国について、数多くの著作を書かれていますが、その中でもここでは、特に入手しやすく、また先生から直接もらったという縁で個人的に思い入れのあるこの本を推薦致します。

②平松明日香（京都大学文学研究科）「No. 43：三国時代前夜：後漢王朝崩壊に至る過程」

『科举—中国の試験地獄』（宮崎市定、中央公論新社）※

①歴代の中国王朝で、最も重要な制度の一つが、役人を選抜するための制度、つまり官吏登用制度です。中国では、千年以上にわたって、科举と呼ばれる筆記試験によって、役人を選抜してきました。科举は、王朝の運営に必要な役人を選抜するだけでなく、受験者側もまた一族の繁栄、免税特権獲得の為に熱心に受験しました。宮崎博士は、中国の受験地獄を招いた科举制度の実態を鮮やかに描き出しています。中国史に興味のある皆様にお勧めです。

②平松明日香（京都大学文学研究科）「No. 43：三国時代前夜：後漢王朝崩壊に至る過程」

『理系のための独創的発想法』（ア・ベ・ミグダル著、長田好弘訳、東京図書）※

①「科学における創造の動機」、「どのように科学的探究を行えばよいのか」などの項目を通じて、科学者にとって独創性・創造性が如何に重要で、それを育むにはどうすればよいかについて、わかりやすくかつ興味深く書かれていま

す。

②竹脇出（京都大学工学研究科）「No. 45：建物の地震時レジリエンス向上にむけて」

『研究と独創性』（学術月報編集委員会、日本学術振興会）

①独創的研究とは何かについて、ノーベル賞・フィールズ賞受賞者を含む多くの研究者の意見をまとめています。

②竹脇出（京都大学工学研究科）「No. 45：建物の地震時レジリエンス向上にむけて」

『On the Electrodynamics of Moving Bodies, Albert Einstein』

①本ではなく論文（原論分の英訳版）だが、こんな風に新しい理論が作られるのか！と感動する。

<<http://www.fourmilab.ch/etexts/einstein/specrel/www/>>

②田中貴浩（京都大学理学研究科）「No. 49：重力波がひらく新しい物理 2015」

『アフリカ社会を学ぶ人のために』（松田素二、世界思想社）※

①アフリカ社会に関心のあるすべての方におすすめします。アフリカの現実を伝えるとともに、そこからわたしたちが何を学ぶことができるのかを、フィールドワークの名人たちが語った本です。

②太田至（京都大学）「No. 50：アフリカの潜在力とは何だろうか？」

『ルポ 資源大陸アフリカ—暴力が結ぶ貧困と繁栄—』（白戸圭一、朝日新聞出版）※

①現代アフリカの暴力とは何か。著者は現地特派員としての経験を生かしながら、資源開発をめぐる先進国とアフリカとの関係を、平易なことばで解き明かしています。

②太田至（京都大学）「No. 50：アフリカの潜在力とは何だろうか？」

『哲学ってどんなこと？—とっても短い哲学入門』（トマス・ネーゲル（著）、岡本裕一郎・若松良樹（共訳）、昭和堂）

※

①哲学の学説を紹介するのではなく、じっさいに「哲学する」ことによって書かれた古典的入門書です。心、自由、人生の意味といったさまざまなトピックを通じて、哲学的に考えるとはどういうことかを知ることができます。

②北村直彰（京都大学文学研究科）「No. 52：哲学的説明—現代形而上学の観点から」

『子どものための哲学対話—人間は遊ぶために生きている！』（永井均、講談社）

①猫と少年が織りなす対話によって、人生と世界の根本に関わる問いの数々へと導かれます。書かれた対話の続きを身近な人と（あるいは自分自身と）してみたくなるはずです。

②北村直彰（京都大学文学研究科）「No. 52：哲学的説明—現代形而上学の観点から」

『二重らせん』（ジェームズ・デューイ・ウォトソン 江上不二夫 中村桂子（生命誌）、講談社）※

①1962年にノーベル生理学・医学賞を受賞したジェームズ・ワトソンが、DNAの二重らせん構造を解明するまでの軌跡、研究者達の情熱や野心などを、著者の回想により生々しく描写されています。二重らせん構造解明の決定打となる、X線結晶解析を行っていたロザリンド・フランクリンの立場に立った「ロザリンド・フランクリンとDNA」も併せて読む事をお勧めします。

②上村紀仁（京都大学医学研究科）「No. 53：パーキンソン病をモデルする」

『Newton 2015年3月号』（ニュートンプレス）

①身の周りにあふれる“色”と眼で感じる“光”との関係をカラフルに解説

②七田芳則（京都大学理学研究科）「No. 59：脳で感じる光」

『サンスクリット』（ピエール・シルヴァン・フィリオザ 竹内信夫、白水社）※

①古代から現代に至るまでのサンスクリット語の歴史がまとめられています。サンスクリット語の性格、社会における位置づけ、同語がインド文化発展に果たした役割等を知るのに有用かと思います。サンスクリット語やサンスクリット文化に興味がある方には一読をお勧めします。

②川村悠人（京都大学文学研究科）「No. 60：古典サンスクリット詩の樹海—美の探訪」

『私たちはどう生きるべきか』（ピーター・シンガー 山内友三郎 奥野満里子、筑摩書房）※

①倫理学という学問に入っていくのにいい本だと思います。著者のシンガーは、特に動物倫理学の分野の代表的理論家です。

②呉羽真（京都大学宇宙総合学研究ユニット）「No. 61：ひとは宇宙へ飛び立つべきか？」

『祈りの海』（グレッグ・イーガン 山岸真、早川書房）

①人気 SF 作家の第 1 短編集です。表題作が好きです。〈人生の意味〉や〈科学と宗教〉といったディープな哲学的問題を扱った、感動的な作品です。

②呉羽真（京都大学宇宙総合学研究ユニット）「No. 61：ひとは宇宙へ飛び立つべきか？」

『しあわせの理由』（グレッグ・イーガン 山岸真、早川書房）

①人気 SF 作家の第 2 短編集です。こちらも表題作が好きです。〈テクノロジーと幸福〉という哲学的な問題を扱っていて、いろいろ考えさせてくれます。

②呉羽真（京都大学宇宙総合学研究ユニット）「No. 61：ひとは宇宙へ飛び立つべきか？」

『若き数学者のアメリカ 改版』（藤原正彦、新潮社）※

①海外で研究したくなる本です。

②楠見孝（京都大学教育学研究科）「No. 62：なつかしさの心理学：思い出ときづな」

『学問の創造』（福井謙一、朝日新聞出版）※

①日本人としてはじめてノーベル化学賞を受賞した京大の福井謙一先生の、新しい学問創造の意気込みを読み取りたい。

②諸熊奎治（京都大学）「No. 63：コンピュータで化学反応の世界を探索」

『ノーベル賞の周辺—福井謙一博士と京都大学の自由な学風』（米沢貞次郎 永田親義、化学同人）

①ノーベル賞受賞者福井謙一博士の共同研究者が、京都大学の自由な学風を振り返る。

②諸熊奎治（京都大学）「No. 63：コンピュータで化学反応の世界を探索」

『脳科学の教科書 ころろ編』（理化学研究所脳科学総合研究センター、岩波書店）※

①最新の脳科学の研究成果にもとづき、国内最大の脳研究拠点である理化学研究所脳科学総合研究センターが、中学生・高校生を対象とした「脳科学の教科書」を出版しています。少し難しい記述もあるかもしれませんが、基礎的で必須な脳科学の知識を習得できると思います。さらに深く学びたい場合には「脳科学の教科書 神経編」（理化学研究所脳科学総合研究センター、岩波ジュニア新書）もあわせて読むと良いと思います。

②水原啓暁（京都大学情報学研究科）「No. 66：リズムでつながる脳」

『岩波ジュニア科学講座〈第 8 巻〉変動する地球』（斎藤靖二（著）、綱川秀夫（著）、岩波書店）※

①地球科学の全体をざっくり学ぶのによいと思います。

②加納靖之（京都大学防災研究所）「No. 67：歴史にまなぶ大地震」

『科学はどこまでいくのか』（池田清彦、筑摩書房）

①なし②加納靖之（京都大学防災研究所）「No. 67：歴史にまなぶ大地震」

D 自分の研究に関連して紹介したい本

『書名』（著者名、出版社名）※京都府立図書館で貸し出し可能

①推薦者のコメント

②出展代表者（所属）「出展ブース番号：出展タイトル」

『強い力と弱い力ーヒッグス粒子が宇宙にかけた魔法を解く』（大栗博司、幻冬舎）

①素粒子物理学のここ 100 年ぐらいの歴史をわかりやすくまとめた良書。著者は有名な理論物理学者で、簡単に説明しているが間違ったことはもちろん言わない。この業界のロマンを感じれると思う。

②潘晟（京都大学理学研究科）「No. 1：ニュートリノで解く宇宙の謎」

『人物で語る物理学(上)』（米沢富美子、岩波書店）

①アリストテレスの時代からの物理学の歴史を、その発展に貢献してきた人物にスポットを当てて紹介している。自分の勉強している分野がかくも多くの人のドラマの上に成り立っていることを思うと感動を禁じ得ない。

②潘晟（京都大学理学研究科）「No. 1：ニュートリノで解く宇宙の謎」

『SYNCーなぜ自然はシンクロしたがるのか』（スティーヴン・ストロガッツ、早川書房）※

①全く違うように見える電子もホタルも細胞もみんな同じ、タイミングを合わせて驚くべき現象を示す。著者は数理学の専門家なのですが、多様性のなかにある普遍性を見いだすという物性物理の神髄感を感じました。

②掛谷一弘（京都大学工学研究科）「No. 3：高温超伝導テラヘルツ光源の開発」

『新しい物性物理』（伊達宗行、講談社）

①複雑な物性物理を小気味よく説明してくれる図書。同じ著者によって 1986 年に刊行された「物性物理の世界」の方がより平易に書かれているが、やや古いか。私は古い方を読んで物性物理を研究しようと思いました。

②掛谷一弘（京都大学工学研究科）「No. 3：高温超伝導テラヘルツ光源の開発」

『集積型金属錯体』（北川進、講談社）※

①ナノ空間は単なる小さな空間ではなく、設計により特異な構造と機能を発現させることが出来る。ナノ空間を創生するための代表的手法である集積型金属錯体を設計・構築するための基礎理論・実例を解説した研究者向けのバイブルです。

②北川進（京都大学物質－細胞統合システム拠点）「No. 4：ナノ空間の世界と化学」

『革新的な多孔質材料ー空間をもつ機能性物質の創成 CSJ Current Review 03』（日本化学会、化学同人）

①ナノ空間の化学の研究トレンドを基礎から先端研究まで広く紹介しています。この分野の入門として最適な一冊です。

②北川進（京都大学物質－細胞統合システム拠点）「No. 4：ナノ空間の世界と化学」

『金属間化合物入門ー材料学シリーズ』（山口正治 乾晴行 伊藤和博、内田老鶴圃）※

①耐熱材料の中のエース、金属間化合物について平易に述べられている。

②乾晴行（京都大学工学研究科）「No. 7：炎を制するー超耐熱構造材料」

『ファスト&スロー（上・下）』（ダニエル・カーネマン 村井章子、早川書房）※

①人間は合理的に自分の行動を決めているのでしょうか。そもそも合理的に決定するという事は、どういうことなのでしょう。この問題に取り組み、ノーベル賞を受賞した研究者が、自分の研究を分かりやすく紹介しています。

②笠木雅史（京都大学文学研究科）「No. 9：意図が先か、行為が先か」

『国際人権・刑事法概論』（尾崎久仁子、信山社出版）

①近年の国際人権法と刑事法の諸問題について、わかりやすく紹介しています。

②越智萌（京都大学法学研究科）「No. 10：目を背けたい世界の大規模犯罪のその後」

『戦争犯罪とは何か』（藤田久一、岩波書店）※

①東京裁判、ニュルンベルク裁判から、近年に至るまで、武力紛争において行われる非人道的行為を犯罪としてきた過程について知れる本。

②越智萌（京都大学法学研究科）「No. 10：目を背けたい世界の大規模犯罪のその後」

『1秒って誰が決めるの？一日時計から光格子時計まで』(安田正美、筑摩書房)

①時計や時間計測の歴史から最先端の研究まで、様々なエピソードとともに楽しく読めます。

②杉山和彦(京都大学工学研究科)「No. 11: 基礎物理学を目指す単一イオン光時計」

『サバンナを駆けるサル―パタスモンキーの生態と社会』(中川尚史、京都大学学術出版会)※

①1986年から1997年までの間、アフリカ・カメルーンのサバンナに住む世界最速で走るサルを対象に行った生態研究の紹介本。いかにサバンナに適応したサルであるかがよくわかる。(中川)

②中川尚史(京都大学理学研究科)「No. 13: 映像が捉えた野生霊長類の変わった生態」

『いのちはどう生まれ、育つのか：医療、福祉、文化と子ども』(道信良子、岩波書店)※

①さまざまな環境に生きる子どもと、「いのち」について見つめ直します。

②高田明(京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科)「No. 14: 教えること、学ぶこと：人類学の挑戦」

『The cultural and ecological foundations of lifeworld among the !Xun of north-central Namibi』(Takada, A, Trans Pacific Pr)

①サン(ブッシュマン)は、現代に生きる狩猟採集民、南部アフリカの政治・経済・歴史の周縁に追いやられてきた人々、その存在と権利の承認を求めて闘う先住民といった描かれ方の間でゆれてきた。ナミビアに住むクン・サンのライフストーリーにもとづいて、そうした研究史を再考し、新たなサンの像を探る。

②高田明(京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科)「No. 14: 教えること、学ぶこと：人類学の挑戦」

『対称性―レーダーマンが語る量子から宇宙まで』(リーオン・M. レーダーマン クリストファー・T. ヒル 小林茂樹、白揚社)※

①複雑系の真髄である相転移とそれに伴って発現する対称性の破れについて平易に解説している。

②田村類(京都大学人間・環境学研究科)「No. 16: 磁石に応答して動く有機液晶物質の発見」

『無の科学―ゼロの発見からストリング理論まで』(K. C. コール 大貫昌子、白揚社)※

①宇宙の起源とも密接に関連する「無」について科学的立場から平易に解説している。

②田村類(京都大学人間・環境学研究科)「No. 16: 磁石に応答して動く有機液晶物質の発見」

『無の本―ゼロ、真空、宇宙の起源』(ジョン・D. バロー 小野木明恵、青土社)※

①「無」について、科学・神学・哲学・文学の各立場から解説している。

②田村類(京都大学人間・環境学研究科)「No. 16: 磁石に応答して動く有機液晶物質の発見」

『「病院」の教科書―知っておきたい組織と機能』(今中雄一、医学書院)

①なし②今中雄一(京都大学医学研究科)「No. 18: 医療の質の地域格差を考えよう」

『マンガで学ぶ生命倫理―わたしたちに課せられた「いのち」の宿題』(児玉聡 なつたか、化学同人)

①再生医療や脳死臓器移植や、「夢の医療」などと報道されるけど、そんなにバラ色なの？そもそも、脳死ってなんだっけ？生き死にの問題は、身近なことであり自分で考えなくてはならないのですが、難しいし辛気くさいし、ハードルが高いですね。この本は、女子高生の日常を軸にして、脳死や生殖医療、クローン技術など、生命倫理の問題を学びつつ、考えられるように工夫されています。是非手にとってみてください。

②児玉聡(京都大学文学研究科)「No. 21: ゲノム編集の倫理について考える」

『医師の一分』(里見清一、新潮社)※

①人工呼吸器や胃ろうなど生命維持装置が開発されたことはよいことではありますが、多臓器不全の高齢者につけられて、ただ死が先延ばしにされている状況も生むようになりました。この状況は、誰かが望んでいるのでしょうか。著者は、治らないけれど生きていかなくてはいけないがんの患者とともに歩きながら、医師は何をどうすべきかを問いかけます。こういう先生ばかりだったら「がん難民」などなくなるのに。

②児玉聡(京都大学文学研究科)「No. 21: ゲノム編集の倫理について考える」

『植物で未来をつくる―植物まるかじり叢書 5』(松永和紀、化学同人)※

①遺伝子組換え作物というと不安だという声を良く聞きますが、その技術のもつ可能性をもっとしてほしいという日本人研究者の声をインタビューした本です。植物科学を目指す若者に是非読んで頂きたいと思います。

②佐藤文彦(京都大学生命科学研)「No. 22: ゲノムの中から薬づくりの道具を探す」

『セラミックバイオマテリアル バイオマテリアルシリーズ 3』(岡崎正之・山下仁大、コロナ社)

①日本を代表するセラミックス系生体材料の第一人者の面々が執筆している本書。この分野の骨子が目白押しでおすすです。内容が専門的すぎてよくわからない方は、第1章「バイオマテリアルとは」と、各章に時折登場する「コーヒープレイク」という囲み記事だけでも是非一読いただきたいと思います。セラミックス系生体材料の科学が、単なるマニアックな知識の塊で構成されているのではなく、物語性を持った研究分野であることを感じさせてくれる一冊です。

②薮塚武史(京都大学エネルギー科学研究科)「No. 25: 骨は水から作られる～生物の営みに学ぶ」

『ヴィジュアルでわかるバイオマテリアル 新版 臨床工学ライブラリーシリーズ 5』(古園勉、岡田正弘、学研メディカル秀潤社)

①アパタイトセラミックス研究の第一人者である古園勉先生(近畿大学教授)と岡田正弘先生(現岡山大学准教授)の共著。両氏ともセラミックスが専門ですが、本書の内容は多岐にわたり、プラスチック系生体材料、セラミックス系生体材料、金属系生体材料のほぼすべてがカバーされています。実際の医療現場で使用されている生体材料が写真入りで数多く紹介されています。お医者さんがどのような道具を使って我々の身体を治してくれているのかを知ることができます。

②薮塚武史(京都大学エネルギー科学研究科)「No. 25: 骨は水から作られる～生物の営みに学ぶ」

『陸域生態系の炭素動態—地球環境へのシステムアプローチ』(及川武久 山本晋、京都大学学術出版会)※

①森林などの陸域生態系の二酸化炭素吸収に関して、現地観測を基にきちんと評価する手法を説明し、実際に観測した成果が紹介されている。専門書であるが、気候変動と生態系のかかわりについて学びたい方にお薦めする。

②谷誠(京都大学農学研究科)「No. 29: 水と環境をまもる森の働き」

『流域環境評価と安定同位体—水循環から生態系まで』(永田俊 宮島利宏、京都大学学術出版会)※

①水・炭素・窒素などの動きを調べ、それにかかわる生態系の役割を探るためには、安定同位体を用いることがたいへん重要になっている。専門書であるが、環境に関心を持つ方に学んでいただきたい。

②谷誠(京都大学農学研究科)「No. 29: 水と環境をまもる森の働き」

『元素戦略』(中山智弘、ダイヤモンド社)

①元素戦略プロジェクトのプログラムオフィサーが著した本で、「元素戦略」のねらいがわかるように書かれている。

②大石毅一郎(京都大学学際融合教育研究推進センター)「No. 33: 元素戦略プロジェクト」

『未来を拓く元素戦略—持続可能な社会を実現する化学』(日本化学会編、化学同人)※

①この元素戦略プロジェクトも含めて、化学分野からの「元素戦略」へのさまざまなアプローチが紹介されている。

②大石毅一郎(京都大学学際融合教育研究推進センター)「No. 33: 元素戦略プロジェクト」

『岩波講座現代工学の基礎 2 材料特性と材料選択』(落合庄治郎、北條正樹、藤田静雄、伊藤靖彦、岩波書店)※

①なし②大石毅一郎(京都大学学際融合教育研究推進センター)「No. 33: 元素戦略プロジェクト」

『ファインマン物理学 (1~5)』(リチャード・フィリップス・ファインマン ロバート・B. レートン マッシュュー・サングズ、岩波書店)※

①なんとというか、「人間的」な物理の教科書だと感じています。物理を目指す人は読んで損は無いと一冊(セット?)です。

②増田亮(京都大学原子炉実験所)「No. 35: 放射線と原子核は使しよう」

『エスノメソドロジーを学ぶ人のために』(串田秀也 好井裕明、世界思想社)※

①「わたしたちって、どうやって他人を理解しているんだろう?」こうした気持ちに、人の内面ではなく、人が発する言葉や、使用する道具、人の見た目などの、外側に表れていて誰にでも利用できる対象を分析することで答えようとする学問の入門書です。気心の知れた恋人と会話をするときだって、わたしたちはさまざまな能力を駆使しているのです。その能力を知りたい方はぜひ本書を手にとってください! 出展メンバーの城より。

②水町衣里(京都大学物質—細胞統合システム拠点)「No. 37: いい対話ってどんな対話?」

『現代の事例から学ぶサイエンスコミュニケーション: 科学技術と社会とのかかわり、その課題とジレンマ』(ジョン・K. ギルバート スーザン・ストックルマイヤー 小川義和、慶応義塾大学出版会)※

①サイエンスコミュニケーションについて学んでみたい、と思っている人にオススメです。国内で、サイエンスコミュニケーションに関わる多様な分野の研究者と一緒に、原著を翻訳し、この本をつくりました。ぜひ手にとってみてください。出展メンバーの加納より。

②水町衣里（京都大学物質－細胞統合システム拠点）「No. 37：いい対話ってどんな対話？」

『プログラミングの宝箱—アルゴリズムとデータ構造』（紀平拓男 春日伸弥、SBクリエイティブ）※

①マルチコアプロセッサの登場により、並列処理による高速化を評価する機会があり、基本的なアルゴリズムを見直す上で役立ちました。サンプルプログラムは、C と Java で書かれており、インターネットからダウンロードができます。

②江谷典子（京都大学医学研究科）「No. 38：ICT が守るビッグデータ応用の創薬」

『誰のためのデザイン？』（ドナルド・A. ノーマン 岡本明 安村通晃、新曜社）※

①ノーマン先生が来日されて講演をされた時、会場で購入し、ノーマン先生と握手をして、サインをいただいた記念品を持っています。認知科学者でもなく、ユーザインタフェースの研究者でもなくとも、「物づくり」における設計論として読むと面白いです。

②江谷典子（京都大学医学研究科）「No. 38：ICT が守るビッグデータ応用の創薬」

『コンピュータと認知を理解する—人工知能の限界と新しい設計理念』（テリー・ウィノグラード フェルナンド・フロレス 平賀譲、産業図書）

①ロボットや人工知能を擬人化しすぎる風潮のある中で、その限界を正しく理解し、人間の道具として使えるような設計を考えさせてくれる本です。

②江谷典子（京都大学医学研究科）「No. 38：ICT が守るビッグデータ応用の創薬」

『わかりやすい Java オブジェクト指向編』（川場隆、秀和システム）

①オブジェクト指向の特徴的なデータ構造と Java 言語による操作が、一目瞭然で分かります。

②江谷典子（京都大学医学研究科）「No. 38：ICT が守るビッグデータ応用の創薬」

『Java のオブジェクト指向がゼッタイにわかる本—最初からそう教えてくれればいいのに！』（立山秀利、秀和システム）

①「おもちゃ屋の店主の日常」を例題に、オブジェクト指向らしい仕様変更を行いながら、頑強性のある Java プログラミングテクニックが学べます。

②江谷典子（京都大学医学研究科）「No. 38：ICT が守るビッグデータ応用の創薬」

『Java による Web アプリケーション入門—サーブレット・JSP・Struts—』（中所武司・藤原克哉、サイエンス社）

①Web アプリケーションを作るための基本が学べます。例題で登場している「図書管理システム」のドメインオブジェクトは、アプリケーション開発におけるモデルを検証するにも役立ちます。

②江谷典子（京都大学医学研究科）「No. 38：ICT が守るビッグデータ応用の創薬」

『アンナの道—H I V とともにタイに生きる』（直井里予、岩波書店）※

①北タイに生きる一人のH I V陽性者の女性とともに過ごし映画を制作した背景を綴りました。タイ人のしなやかな生きざまから学ぶことは多いです。

②直井里予（京都大学東南アジア研究所）「No. 42：映像で東南アジアの魅力を発見しよう！」

『宦官—側近政治の構造』（三田村泰助、中央公論新社）※

①宦官とは、皇帝のプライベートに仕えるため、意図的に男性機能を喪失させられた人間の事です。皇帝の最も身近に控えていたため、歴史上何度も暗躍し、時には皇帝・皇后の廃立に関わり、国家滅亡の原因をつくることもありました。この本は、宦官が大きな影響力を持った漢・唐・明などの時代に特にスポットを当て、彼らがどのようにして巨大な権力を振るったのかをわかりやすく描いています。

②平松明日香（京都大学文学研究科）「No. 43：三国時代前夜：後漢王朝崩壊に至る過程」

『海のかたのローマ帝国—古代ローマとブリテン島』（南川高志、岩波書店）※

①漢代とほぼ同時代にヨーロッパで繁栄していた帝国が、ローマ帝国です。本書は、ローマ帝国の辺境である現在のイギリスでローマ帝国がどのような統治を行ったのか、その統治の内実を鮮やかに、そして簡明に描き出しています。

また、考古学と歴史学との関係や、古代史と現在の歴史がいかに関係するののかという、興味のある地域や時代を問わず、歴史学という学問を考えてみる上で非常に重要な問いを投げかけてくれます。

②平松明日香（京都大学文学研究科）「No. 43：三国時代前夜：後漢王朝崩壊に至る過程」

『四川大地震（中国四川大地震の地震断層と被害写真集）』（林愛明 任治坤、近未来社）※

①四川大地震の震源断層と地震被害の状況・救助活動などをカラー写真で紹介しているので、今回のアカデミックデイ 2015 出展内容と密接に関連しています。

②林愛明（京都大学理学研究科）「No. 44：内陸巨大古地震による長江文明の滅亡」

『地震の化石—シュードタキライトの形成と保存』（林愛明、近未来社）※

①地震の発生証拠としての「地震の化石」—シュードタキライトを詳しく紹介しています。地震発生のメカニズムを分かりやすく概説しています。

②林愛明（京都大学理学研究科）「No. 44：内陸巨大古地震による長江文明の滅亡」

『図解・超高層ビルのしくみ—建設から解体までの全技術』（鹿島建設株式会社、講談社）※

①超高層ビルのしくみについて、建物耐震設計の歴史から読み解いています。昭和初期の柔剛論争から、最新の制振構造に至る幅広い内容を含んでいます。

②竹脇出（京都大学工学研究科）「No. 45：建物の地震時レジリエンス向上にむけて」

『みんなが知りたい超高層ビルの秘密』（尾島俊雄・小林昌一・小林紳也、S Bクリエイティブ）

①超高層ビルのしくみについて、構造安全性だけでなく、実際の施工方法や維持管理についてわかりやすく解説しています。また、超高層ビルの高さの限界や地下の深さの限界など、興味深い内容についても触れています。

②竹脇出（京都大学工学研究科）「No. 45：建物の地震時レジリエンス向上にむけて」

『東京スカイツリーの科学—世界一高い自立式電波塔を建てる技術』（平塚桂・たかぎみ江、S Bクリエイティブ）

①東京スカイツリーについて、「どうやって設計したか？」、「どうやって建てたか？」、「設備はどうなっているか？」などについて、初心者向けにわかりやすく書かれています。

②竹脇出（京都大学工学研究科）「No. 45：建物の地震時レジリエンス向上にむけて」

『材料力学史』（ステファン・P. チモシェンコ 最上武雄 川口昌宏、鹿島出版会）※

①材料力学は、構造物を安全に設計する際の基礎をなす学問である。レオナルド・ダ・ヴィンチ、ガリレオ・ガリレイから始まり、17 世紀から 20 世紀に至る材料力学の歴史的発展を興味深く解説しています。

②竹脇出（京都大学工学研究科）「No. 45：建物の地震時レジリエンス向上にむけて」

『Improving the Earthquake Resilience of Buildings: The worst case approach』（I. Takewaki, A. Moustafa and K. Fujita, Springer）

①建物の地震に対するレジリエンスを向上させるための方法について解説した英語の本です。建物の地震に対するレジリエンスについて論じた本は世界的にもめずらしく、世界各国の研究者に広く読まれています。この本は、2014 年の日本建築学会著作賞を受賞しています。

②竹脇出（京都大学工学研究科）「No. 45：建物の地震時レジリエンス向上にむけて」

『Critical Excitation Methods in Earthquake Engineering, Second Edition』（I. Takewaki, Elsevier）

①建物の最悪地震動について英語で解説しています。建物の最悪地震動に関する本は世界でもめずらしく、世界各国の研究者に広く読まれています。

②竹脇出（京都大学工学研究科）「No. 45：建物の地震時レジリエンス向上にむけて」

『重力波をとらえる』（中村卓史 三尾典克 大橋正健、京都大学学術出版会）

①この本の出版後も様々な研究の発展があるが、重力波を（もうすぐ）とらえるためのバイブルとしていつもそばに置いておきたい。

②田中貴浩（京都大学理学研究科）「No. 49：重力波がひらく新しい物理 2015」

『アフリカ学事典』（日本アフリカ学会 編、昭和堂）※

①アフリカに関する辞典ではなく、アフリカ研究に関する辞典です。一読すれば、アフリカ研究がいかに多様であるか理解できると思います。

②太田至（京都大学）「No. 50：アフリカの潜在力とは何だろうか？」

『アフリカから学ぶ』（峯陽一 武内進一 笹岡雄一、有斐閣）※

①内容は少し専門的ですが、執筆者たちの現場感覚を活かした作りになっており、「アフリカから」学ぶというタイトルがそれを端的に表現しています。

②太田至（京都大学）「No. 50：アフリカの潜在力とは何だろうか？」

『人物で語る物理学（下）』（米沢富美子、岩波書店）

①アリストテレスの時代からの物理学の歴史を、その発展に貢献してきた人物にスポットを当てて紹介している。自分の勉強している分野がかくも多くの人のドラマの上に成り立っていることを思うと感動を禁じ得ない。

②宮野公樹（京都大学学際融合教育研究推進センター）「No. 51：産学連携の原形」

『研究を深める5つの問い—「科学」の転換期における研究者思考』（宮野公樹、講談社）

①アマゾンで悪評なのに京大ルネでは毎月売り上げ上位ランキン？一度、自分の目で判断してみてもいいのでは？

②宮野公樹（京都大学学際融合教育研究推進センター）「No. 51：産学連携の原形」

『真理から存在へ—〈真にするもの〉の形而上学』（秋葉剛史、春秋社）※

①真理と存在との関係について、「形而上学的説明」というアイデアに基づいて論じた本です。著者の博士論文をベースにした本格的な研究書ですが、論述はたいへん丁寧かつ明瞭で、非専門家にも広くおすすめできます。

②北村直彰（京都大学文学研究科）「No. 52：哲学的説明—現代形而上学の観点から」

『穴と境界—存在論的探究 現代哲学への招待 Japanese Philosophers』（加地大介、春秋社）

①「説明」概念と密接な関係にある「依存」を鍵概念のひとつとして、穴と境界の存在について論じた本です。身近でありながらも奇妙な性格をもつこうした「ものもどき」の本性に一步步迫るきわめて緻密な議論が展開されています。

②北村直彰（京都大学文学研究科）「No. 52：哲学的説明—現代形而上学の観点から」

『アリストテレス的現代形而上学 現代哲学への招待 Anthology』（トゥオマス・タフコ（編・著）、加地大介・鈴木生郎・秋葉剛史・谷川卓・植村玄輝・北村直彰（共訳）、春秋社）※

①「説明」「依存」「本質」といった概念を重要視する「アリストテレス的形而上学」という流派の論文を集めた本です。アリストテレスの形而上学観を現代に蘇らせようとするプロジェクトの最先端を知ることができます。

②北村直彰（京都大学文学研究科）「No. 52：哲学的説明—現代形而上学の観点から」

『ジェイムズ・パーキンソンの人と業績』（豊倉康夫、診断と治療社）

①パーキンソン病はおよそ200年前にパーキンソンによって記載されました。当時の医学は現在のものと随分異なりますが、パーキンソンの細部に渡る観察眼に驚かされると共に、神経学の成り立ちを知ることができる一冊です。

②上村紀仁（京都大学医学研究科）「No. 53：パーキンソン病をモデルする」

『シリーズ21世紀の動物科学 9—動物の感覚とリズム』（浅島誠 日本動物学会 七田芳則、培風館）※

①動物の光受容機構に関する生物系学部生向けの参考書

②七田芳則（京都大学理学研究科）「No. 59：脳で感じる光」

『見える光、見えない光：動物と光のかかわり（動物の多様な生き方1）』（寺北明久 蟻川謙太郎、共立出版）※

①動物が眼だけでなく多様な組織で光を感じ、いろいろな情報を得ていることについて、最近の研究成果を含めて概説

②七田芳則（京都大学理学研究科）「No. 59：脳で感じる光」

『George Cardona, Pāṇini: His Work and its Traditions. Volume One. Background and Introduction. Delhi: Motilal Banarsidass, 1988. Second edition, revised and enlarged, 1997.』

①紀元前500-400年頃の文法家パーニニが残したサンスクリット文典と彼の文法体系について詳説する名著です。驚くべきことに、全763頁という分量にして未だ「第一巻」であり、第八巻までの刊行が予定されています。パーニニ文法学の専門的知識を求める方にお勧めします。

②川村悠人（京都大学文学研究科）「No. 60：古典サンスクリット詩の樹海—美の探訪」

『偶然の宇宙—双書現代の哲学』（伊藤邦武、岩波書店）※

①わたしの学生時代の先生が書いた本です。「わたしたちが存在するこの宇宙は、偶然の産物なのか？」という深遠す

ざる問いについて論じています。とはいえ、それに答えを出すことよりは、この問いを前にして立ちすくむ人間の姿を描こうとした作品だと思っています。読んでたやすく理解できるような代物ではないですが、哲学という学問の深みを味わいたければおすすめです。

②呉羽真（京都大学宇宙総合学研究ユニット）「No. 61：ひとは宇宙へ飛び立つべきか？」

『生まれながらのサイボーグー心・テクノロジー・知能の未来』（アンディ・クラーク 呉羽真 久木田水生、春秋社）

※

①わたしが訳した本です。認知科学・認知技術の話題と哲学の手法をベースに、「人間は生まれながらのサイボーグだ」という驚きの主張を展開する、野心的な本です。原書で読んであまりにも面白かったので、翻訳するだけでなく、博士論文のテーマにもしました。最終的に著者の主張には反対することになったのですが、やっぱり強い思い入れがあります。買ってください。

②呉羽真（京都大学宇宙総合学研究ユニット）「No. 61：ひとは宇宙へ飛び立つべきか？」

『なつかしさの心理学：思い出と感情』（楠見 孝、誠信書房）※

①なつかしさを心理学から解明した本邦初の本です。専門外でもわかりやすいように書きました。

②楠見孝（京都大学教育学研究科）「No. 62：なつかしさの心理学：思い出ときづな」

『サブリミナル・マインド：潜在的人間観のゆくえ』（下條信輔、中央公論新社）※

①なつかしさやデジャビュは、この本で、解説されている情動と潜在認知における親近性の問題に関わります。

②楠見孝（京都大学教育学研究科）「No. 62：なつかしさの心理学：思い出ときづな」

『コンピューターはいい化学者』（西村肇、東京化学同人）

①やや古いが、計算化学を平易に解説する。

②諸熊奎治（京都大学）「No. 63：コンピュータで化学反応の世界を探索」

『最新脳科学で読み解く脳のしくみ』（サンドラ・アーモット サム・ワン 三橋智子、東洋経済新報社）※

①脳科学に関する本は巷に溢れていますが、脳の研究者からすると眉をひそめるようなものも少なくありません。この本では、脳研究の世界的な権威である雑誌「ネイチャー・ニューロサイエンス」の元編集長らが、「正しい」脳研究の成果を、一般の読者向けにできるだけ面白く、わかりやすく紹介しています。

②水原啓暁（京都大学情報学研究科）「No. 66：リズムでつながる脳」

『脳科学がビジネスを変える ニューロイノベーションへの挑戦』（萩原一平、日本経済新聞出版社）※

①脳の研究をしていると、よく「何の役に立つの？」と尋ねられます。この本では脳科学研究の産業応用を、農業革命、産業革命、IT 革命に次ぐ第四の経済革命と位置づけ、脳研究のビジネスへの展開の可能性を示しています。脳科学研究の成果を活用するためのヒントになるかもしれません。

②水原啓暁（京都大学情報学研究科）「No. 66：リズムでつながる脳」

『日本被害地震総覧 599-2012』（宇佐美龍夫（著）、石井寿（著）、今村隆正（著）、武村雅之（著）、松浦律子（著）、東京大学出版会）※

①およそ 1400 年にわたる日本の被害地震のカタログ。

②加納靖之（京都大学防災研究所）「No. 67：歴史にまなぶ大地震」

『The Orphan Tsunami of 1700—Japanese Clues to a Parent Earthquake in North America』（Atwater）

①英語、日本語、くずし字、地質学、地震学、歴史学が入りまじったおもしろい報告書。

②加納靖之（京都大学防災研究所）「No. 67：歴史にまなぶ大地震」

β 山極総長の推薦図書

【推薦図書ジャンル】

『書名』（著者名、出版社名）※京都府立図書館で貸し出し可能

コメント

【今の仕事（研究、進路）を選ぶことになったきっかけになった本】

『ゴリラとピグミーの森』（伊谷純一郎著、岩波文庫）※

アフリカ独立の都市と呼ばれる 1960 年、単身アフリカに渡り、小さなルノーを駆って原野を走り、ゴリラの森に分け入る。そのうち、森の民ピグミーの人々に魅せられ、彼らの文化と生態を調査するようになる。フィールドワークの野心と魅力が豊富に詰まっていた。

『ゴリラの季節』（ジョージ・シヤラー著、早川書房）※

マウンテンゴリラのすむ赤道アフリカの高地ミケノ山の中腹に夫婦で露營し、ひたすらゴリラの跡を追跡する毎日。次第に明らかになってくるゴリラの生態、思いがけない発見、とりわけゴリラの中に人間に似た心を感じる記述がすばらしい。

『森の隣人』（ジェーン・グドール著、平凡社）※

タンガニーカ湖畔に母親と一緒に住み始めて、未知の野生チンパンジーの生態解明に挑む。日本の霊長類学者が試みた、一頭一頭の個体に名前を付ける個体識別法を駆使して、チンパンジーと心の触れ合う間柄となる。個性あふれるチンパンジーの描写がすばらしい。

【今ハマっている本（誰かとこの本について話したい）】

『モラルの起源』（クリストファー・ボーム著、白揚社）※

動物の中で人間だけが顔を赤らめるという生理現象を持つことから出発し、恥と罰をどのように内面化させながら人類は社会を作ってきたか、を類人猿と比較しながら解き明かした野心作。文化人類学者である著者がチンパンジーの調査をして得た考察は進化をたどる上で説得力がある。

『新世界ザル（上・下）』（伊沢紘生著、東京大学出版会）※

日本霊長類学のパイオニアである著者が 30 年余りにわたって通い続けたアマゾンの熱帯雨林。そこにすむ多様なサルたちを通して知った「種の誇り」がひしひしと伝わってくる。自然の原理ともされている「競争」についても現場の観察から再考を迫る。動物から学ぶこととはこういうことなのだと教えてくれる本だと思う。

【若者にお勧めしたい本】

『京都の平熱』（鷺田清一、講談社）※

哲学者である著者が生まれ育った町の京都を散策しながら、自身の体験と歴史、思想の交錯をさらりと書き綴ったエッセイ。京都がこんな風にできているのか、と改めて目を見張られる。

『続・百年の愚行』（小崎哲哉編著、紀伊国屋書店）

戦争、差別、暴力、貧困、メディア、環境、エネルギーなど現代を取り巻く諸問題を「愚行」という視点からまとめた。人間のもつ果てしない欲望と想像力を、どのような世界観、地球観に帰結させえるか。もはや地球も宇宙ですら無限ではない。アーティストである著者がまとめた写真も見ごたえがある。巻末の「愚行」について考える文献リストをぜひご参照あれ。

『カナリー・ロウ』（ジョン・スタインベック著、福武文庫）

カリフォルニア州に実在したイワシの缶詰工場のが並ぶ横丁で、人々の日常を描いた小説。主人公は中年の生物学者で、彼を取り巻く人々の関係とドタバタ劇がとても面白い。人間って、人のために良かれと思ってやったことがとんでもない方向へと発展してしまうことがよくあるよなあ。人が集まるとろくでもないことが起こる、と覚悟しておいたほうがいい。

【自分の研究に関連して紹介したい本】

『暴力はどこから来たか』(山極寿一著、NHKブックス)

集団的自衛権が議論になる今、集団間の暴力に関してその起源にさかのぼって考えてみるのが問われている。人間はそもそも暴力的な動物として進化したのか、それとも別の目的のために発達した能力を近年暴力として発揮するようになったのか。政治家は前者の解釈を好むが、先史人類学や霊長類学の証拠は後者が真実だと主張する。そこには人間の社会性の不思議な進化の歴史が埋め込まれている。

『闇の奥』(ジョゼフ・コンラッド、岩波文庫) ※

今でこそ、アフリカの奥地のジャングルはテレビでも紹介され、気安く行けるところだという錯覚がある。しかし、つい最近までそこは普通の人々が入れない暗黒の世界だと思われていたし、一度足を踏み入れたものは正気では帰ってこないとされていた。この本は20世紀の初頭に書かれ、当時の欧米の暗黒大陸のイメージがそのまま表現されている。多くは間違っているのだが、私は時々そこにいくつか重要な真実が眠っていると思うことがある。

『共感の時代へ』(フランス・ドゥ・ヴァール著、紀伊国屋書店) ※

アメリカのヤーキス研究所で、チンパンジー、ボノボ、オマキザル、カニクイザルなどの行動研究をしてきた著者が、人間に特に発達していると考えられる共感能力の進化を広く動物一般に比較しながら論じた本。具体例が豊富で、人間の行動のどれをとっても人間だけが優れているとはいえないことがわかる。この世界は同調という種を超えて通じる相互作用に満ちており、それを正しく理解することが重要だとわかる。われわれ人間ははたして共感能力を十分に使って生きているだろうか。

編集者 白井哲哉（京都大学学術研究支援室）
仲野安紗（京都大学学術研究支援室）
森下明子（京都大学学術研究支援室）
福元隆（研究推進部研究推進課研究助成掛）
樺島彩波（研究推進部研究推進課研究助成掛）
デザイン 永田奈緒美（京都大学学術情報メディアセンター）
写真 大森貴生

発行日 2015 年 12 月?日
発行 京都大学学術研究支援室
京都大学研究推進部研究推進課
京都大学「国民との科学・技術対話」ワーキンググループ
問合せ 〒606-8501 京都市左京区吉田本町 京都大学学術研究支援室
Tel : 075-753-5113
E-mail shirai@kura.kyoto-u.ac.jp



Dialog with the Public